
レベル5で幻想入り

ペイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レベル5で幻想入り

【Nコード】

N6386T

【作者名】

ペイ

【あらすじ】

レベル5の超能力を宿した少年が
いろんなネタを使いながら幻想郷で面倒事に首を突っ込んでいく物語。

やけに長いプロローグ(前書き)

書きたくて書いた

一切後悔も反省もしていない

あ、石は投げないで

やけに長いプロローグ

「バイビ―!」

「おお、さいなら」

そう言っつて悪友と別れる

俺の名前は上は2文字、下は3文字の普通の名前だ

ああ、嘘だから!嘘ですから、石を投げないでください!

どうせ俺にはかっこいいことは言えませんよ

で、俺の名前は、昔は鈴木で今は中島

別に『磯く野球しようぜ』とかは言わないから安心してくれ。

と、まあなんで変わっているか、理由は簡単

親が離婚したからだ

そして引き取った父も死んだ

別に悲しくはなかったと言ったらウソになるが
それに何よりそんなこと感じる暇もなかった

いや、忙しかった

まじで忙しかった

ちなみに今の簡単なスケジュール。

朝は、登校時間ぎりぎりまで新聞配達。

昼は、学校。

夜は、日が昇るまで道路工事。

と、昔に比べたらすごい楽な生活を送らせてもらっている。

前のスケジュールは家に帰るまでには語りきれないので割愛させて頂こう。

と、言ってる間に家に着いたようだ

俺の家は今漫画だらけになっている

少し紹介するとF a t eやとあるやe t c . . .

そしていつものように漫画を手取る

今日はとあるでも見ようかな

見ていて不意に呟いた

「あゝこんなふうにはレールガン打ちて〜」

皆もこう思うことが一度はあるはずだ。

なかったらあったと仮定して想像して妄想してくださいさうお願いします。

しかしこの一言が俺の運命を変えてしまった

誰だってひよんな事で後悔することはあるはずだ

でもこれは格が違った

一言で言うことや っ ち ま っ た、だ

その結果俺の目の前には金髪の美人が居た

「はあ？」

「ねえ、あなた少し時間いい？」

「ちょ？え？あ、はい」

押し切られてるぞ俺、情けねえ

「ねえ、あなたはそのレールガンっていうのを打ちたいのよね」

「まあ打てるなら」（この人どうやって入ってきたんだ？）

「じゃあ私の言うこと聞いてくれたら打たせてあげるわ」

「は、はあ」（ああ、頭の残念な人か）

「じゃあ交渉成立ね」

「そうですね」（携帯を用意して）

「なんで携帯を用意してるの？」

「いや、ちよつと救急車をひとつ用意しようかと」

「残念 ボツシユートよ」

「え？穴？」

いきなり携帯を奪われた

「そう、これが私の【境界を操る程度の能力】よ」

（ああ、これは夢ですね、分かります）

「ねえ聞いているの？」

（ふふふ、俺夢から覚めたら漫画読むんだ）

「しょうが無いわね、えい」

そう言うといきなり俺の頭上に穴が表れて
そこからタライが落ちてきた

ドリ符【伝統と信頼の金ダライ】

「は！？俺はなにを？」

「さて、落ち着いたところでこれ飲んで」

「分かりました」《ゴクツ》

「あれ、ずいぶん潔いのね」

「いや、父から美人の頼みは断るなって」《にこっ》

「そう、ありがと」（なかなか女たらしの才能あるわね）

「で、どうすればいいんですか？」

「こうすればいいのよ」《パチン》

その瞬間俺の足元に穴が発生し

その穴に落ちた

「おひとり様【幻想郷】にご案内」

「は？聞いてな・・・ぎゃああああおちるううう！！！」

「携帯は返しておくわね」

「あ、ありがとございま・・・ってぎゃあああ！」

一気にジェットコースターに乗ったような感覚が体を突き抜ける

「ちなみに薬が効くまで10分くらいかかるから
気をつけてね」

「ちよっ！それも聞いてなああああ！うわああああ気持ちわりいい
い！」

そう言つて金髪の女の人は消えた

「ちよつとおおおお!?死ぬつてえエエえ!あぶねええつえ!」
叫びすぎてのど痛え

そう思つていと外の景色が見えてきた
ああ、俺死ぬのかな
やけに落ちるまで長いし

《ぼふっ》

運よく何か柔らかいものに
落ちたようで大したダメージは無かった

「え、助かったのか?
よかったあああ!
神様ありがとうございます!」

まあ一概に喜んでいられない

- 「さて、状況を整理しよう」
- 1・能力を使うまであと8分くらいかかる
 - 2・ここは、幻想郷とかいうところらしい
 - 3・目の前の怪物どうしよう

《キシヤアアア》

「はあ?」

なんか、蜘蛛の体に般若の顔をしたでかい化物が居た

(なんだよこいつ)
そう思っているときいきなり襲ってきた

「ちよつとおおお！まちましょおおよおお！」

とりあえず全力で走る

バイトで鍛えた足をなめるなよ！

《ドスンドスン》

前言撤回、フラグでした

「ちよつ！《ブン》まっ！《ブン》アブな！《ブン》」

「くそう、さつきから叫びまくりな気がするぞ！」

何とか小回りの利くところに逃げないと
原っぱではつかまる！

「くつそおおお！不幸だあああ！」

某説教が必殺技の方の名言を借りて走り出す

能力を使って怪物にぶち込んだ結果、周り一帯が吹き飛んだ

「・・・はあ!?!」

あれ、強すぎ!

???視点

「はあ!?!」

なんかいきなりすごい音がしたと思ったら
森が少し削れてるんだぜ

「これは少し面白そうだぜ」

自分の知的好奇心からその場に急行した

千草視点

「さ…さすがレベル5、すげえ」

まあ、ちよつとやりすぎたかなあ
状況整理しよう

1・これがあればだいたいの化物は倒せそう

2・所持品

- ・学生服（夏服） うん、まあ帰ってすぐに誘拐されたからな
- ・財布（2千円） うわほとんど小銭ばつかじゃん
- ・携帯 おお、文明の利器、これを使おう

《prrrrrr》

『圏外です、残念でしたね』

「まあ、そつだよな」

とりあえず、この森気持ち悪くなりそうだから
早く出よう

????side

「あそこにいるのは外来人かな？」

急行してきた結果、面白そうな人間を発見したぜ
早速接近するのぜ

主人公 s i d e

「よう なんだぜ」

「あ、はじめまして」

なんか金髪の魔法使いみたいな人が箒に乗って飛んできた
何でもありなのか幻想郷!?

「こんなところで何やってんだ？」

「いや、ちよつと変な人に落とされて、そこにいた化物から逃げ
てました」

「訳がわからないよ」

俺だってわからないよ畜生!

「で、結局これをやったのはあんたなのか？」

「え、はあ、まあそういうことになりますね」

「いざ尋常に勝負!」

「はい!？」

なんだこの人、戦闘狂か？

「さあいくぜ！」
「うわっあぶねえ！」

いきなりエネルギー弾飛ばすとかどこの龍玉だよ!?

「ほらほら、よけてはつかじゃどうにもならないぜ！」
「なんでいきなり女の子を殴らなきゃいけないんだよ!？」
「そんなこと言ってたら幻想郷ではすぐ死んじまうぜ！」
「それでもいやだね！」
「くそっ！強情な奴だ！」

そう言う魔法使いは変なカードを取り出した

「魔符【スターダストレヴァリエ】！」

そう言うと筈に跨ってすごいスピードでこっちに向かってきた

(っ！まじであぶねえ！)

何とか回避すると通った後に星みたいな物が置かれていた
そして一気に周りに拡散した

(なんだこれ!?)

それをすんでのところで回避する

「後ろがガラ空きだぜ！」
(くそっ！よけれねえ！)

そう判断すると全力でガードする

《ズガン》

が、そのガードは一瞬で突き破られ吹き飛ばされる

「ほらほら、まだまだ行くぜ！」

(っ！この人まじで強い、手加減なんてできない！)

そう判断して戦闘態勢に入る

「はっ！やっとなる気になったな！じゃあこっからは全力で倒すぜ
！」

(まずはあの突進を止める！)

両手に電撃をためる

「改めて魔符【スターダストレヴァリエ】！」

(きたっ！)

真正面から来る突進に合わせてその箒を両手でつかむ

「なっ！？受け止めるとはおもわなかったぜ！？」

そして、そのまま投げ捨てる

「だっらっしやあああー！」

「っおおおー！」

しかし普通に着地される

(やっぱり駄目か！・・・なら！)

雷撃の槍を相手に向かって投げつける
が、回避される

「じゃあ、次のわざはどうか！恋符【マスタースパーク】！！」
その瞬間真っ白い極太のレーザーが飛んでくる

「こんのおお！」
全力の雷撃の槍もはじかれてしまう
幸い少し遅いがそれでももうかなり迫ってきている

(もっと、強力な技は…あれしかない！)

財布から百円玉を取り出す
そして真上に上げる

「レールガン超電磁砲！！！！」

その瞬間音速の3倍の速さでコインが発射される

そして一瞬の拮抗の末、極太のレーザーを突き破る

「えっ！？うわっ！！」

そして超電磁砲は魔法使いの横を通り過ぎて行った

「はあ、あれが破られるとは…降参だ」

そう言って魔法使いは両手を上げる
その瞬間緊張の糸が切れたようにその場に倒れる

(電池切れか…情けないな)

「大丈夫か？」

「うん、少し休めば多分…」

「じゃあ、うちに運ぶぜ」

「あ、自分で歩けるから」

「いや、乗ってくれた方が早い」

「それなら、お願いしようかな」

「ん、了解だぜ！え」と…」

「ああ、俺は千草ちくさって言うんだ」

「よし了解だぜ千草！」

筭に跨るとその瞬間すごいスピードで飛んで行った

「あ、ちなみに私は霧雨きりあめ 魔理沙まじさって言うんだ！」

「うわ、はやっ危なっ」

(…聞いてないか)

ちびに長いプロローグ（後書き）

6 / 1 魔理沙のセリフとあとがきを修正しました

第1話 ニーりんエ… (前書き)

めいへんこつてんじゅー!

第1話 ニーりんエ…

「よし、ついたぜ」

「う、すいません、ここまでしてもらって」

「まあここでは、全力で戦った相手はもう友達みたいなもんだ」

う、笑顔がまぶしい

「ま、とりあえず、霧雨家へご招待だぜ」

「おじゃまします」

「うわ、何かすごく…汚いです」

「もうちょっとオブラートに包んでくれないか？」

「サーセンwww」

「謝る気ねーな」

イヤだって汚…

「まあ、2階のベッドを使ってくれて良いんだぜ」

「う、ありがとうございます」

「ふう、よく寝たぜ」

携帯を見ると1時間ほど経っていた

「よう、よく寝れたか？」

「はい、おかげさまで、ありがとうございます霧S」魔理沙でいいぜ「魔理沙さん」

1階に下りると魔理沙さんがご飯を作っていた

「飯食べないか？」

「・・・頂きます」

人の厚意はありがたく頂こう

少女s 食事中・・・

「「ごちそうさまでした」

(っっていうか洋風な服着てご飯は和食なんだな)

「んじゃあもう行きますね」

「行くあてはあるのか？」

「いや、ありませんけど？」

「んじゃあ、いまから博麗神社に行くけどついてくるか？」

「あ、行きます行きます」

行くあてのなかった俺は魔理沙さんについていくことにした

少女s 移動中

「ん、ついたぜ」

「死ぬかと思っただんですけど」

「まあ割り切るんだぜ」

く、本当に死ねかと思っただぞ

「ところで能力はもう使えるのか？」

「この通りです」

そう言っつて少し電撃を発生させる

「あら魔理沙お賽銭でも入れに来てくれたの？」

「それは遠慮する」

「ん、そっちの人は？」

「ああ、千草っつて言うんだ」

おお、紹介されている

第一印象は明るく行かなければな

「はじめまして！」

「はい、はじめまして、お賽銭はいくら入れてくれるの？」

「え、じゃあ百円入れときますね」《チャリン》

「え！？入れてくれるの！？あなた良い人ね！」

私霊夢っつて言うのお金くれる人は大好きよ

「ど、どうも」

「霊夢、千草が引いているから離れるんだぜ」

「お賽銭入れてくれたらいいわよ」

「しょうが無い」《チャリン》

「っつていつか千草さんの入れてくれたお金見たことないわね」

「え、見たことないんですか？」

「見たこと無いわ(ぜ)」

「まじすか!？」

わりかしガチでへこんだ

「まあ後で香林堂にでも行くっぜ」

「はい」

「まあお茶くらいなら出すから中に入りなさいよ」

「邪魔するよ」

「邪魔させていただきます」

ん、香林堂ってなんだろう

「はい、お待たせ」

「ありがとうございます」

「うまいんだぜ」

「ところで香林堂ってなんですか？」

「それはな《ズー》なんでも《ズズー》引き取って
物々交換してくれるんだ」

「お茶飲んでから話しなさいよ」

「まあ、そういうことなんだ」

「へー、そういう事なら今からでも行くっかな」

「まあゆっくりしていきなさいよ」

「じゃあそうしましょうか」

俺は霊夢さんの「ご厚意に甘えることにした

少女sまつたり中

「じゃあもう行きますね」
「またおお賽銭いれに来てね」
「持ち合わせがあれば入れますよ」
「本当にっ!?!約束よ!?!」
「ははは」

霊夢さんお金が絡むと人が変わるな

「さて、私は帰るけどどうするのぜ?」
「香林堂に行こうかと」
「じゃあ連れてってやるのぜ」
「イヤいいですよ」
あんなのもうごめんだ

「じゃあ場所わかるのかぜ?」
「ぐっ」
「はあ場所も分からないのにどうやって行くつもりだったのぜ?」
「だ、第六感ってやつで」
「もういいから早くつかまってくれ」
「・・・はい」

俺はまたあの浮遊感を味わうことになった

少女s移動中

「ついたよ」
「うふふ、お花畑が見えるなあ」

「おきろ」《バコン》

「はっ！こは！」

「ここが香林堂なんだぜ」

「なるほど、行きましようか」

「やけに潔いな」

「頭が妙に冴えてるんですよ」

「あれ、魔理沙いらっしやいと、その君もいらっしやい何の用だ
い？」

「あの、ちよつと交換してもらえますか」

「なにをだい？」

「ちよつとこれらを」《どぞどぞどぞ》

財布から金を全てとりだす

「これ全てこつちのお金にしてください」

「これはすごいね、少し待っていてくれ」

店長はそう言って奥に入って行った

「今のうちに店の物見ていようぜ」

「それもそうですね」

少女s物色中・・・

「さて、これぐらいかな」《どしゃどしゃどしゃ》

「うわ、凄い大金だな」

「そうなんですか？」

「さて、何かいるものあったかな？」

「このコインください」

「じゃあお代から差し引いておくよ」

お金から少し引いていった

「そんなもんなんですか」

「サービスだよサービス」

「じゃあもう行きますね」

「気をつけて」

「じゃあばいばい」

そう言って魔理沙さんたちと別れた

「……あ、店長の名前聞くの忘れてた」

第1話 こーりんエ…(後書き)

こーりん涙目…;

すまんこーりん

第2話 人里目指してレッツゴ！…シヨタコンに襲われました (前書き)

ゆゆゆ、作者は感想をもらえると
ついゆっくりになっちゃうんだよ

更新スピードは反比例します

第2話 人里目指してレッツゴ！…シヨタコンに襲われました

「ふふふ、くくく、フハハハハハ」

主人公は迷っていた

「やべえやべえよ！最っ高に迷っちゃまったぞくそやロー！」

要約するところだ

1・香林堂から出たしどうしようか

2・人里に行ってみよう

3・あれ、この道さつきも通ってなかった？

「ふっいいいぜ！お前が俺の邪魔をするって言っなら
まずはてめえを吹き飛ばす！」

右手に電力をためる

「うおおおお、ふきとべえエエ！」

《ズドオン》と音をたてて木を吹き飛ばす

「よし、これなら満点だな」

しかし千草は内心焦っていた

…このネタ何人に通じるんだろう

少年移動中・・・

「お、ココが人里か？」

寄ってくる妖怪共を電撃で吹き飛ばしてやっと夜になって
人里が見えてきた

《~~~~》

「？なんだこの歌？？」

どこからともなく歌が聞こえてきた
そうしているとどこからか子供がふらふら歩いてきた

「あれって子供じゃね？なんでこんな時間に？」

いや、俺も人の事言えねえけどな

「あれ、視界が悪く」

いきなり周りが暗くなってきた

『フフフ、今晚は人間が二人も来たわ』

ああ、なるほど妖怪か

「さて、出てこいよ、妖怪！」

とりあえず叫んでみる

「あらら、私の歌を聞いても大丈夫なんてただの人間じゃないみたいね」

「まあそうとつてもらってもかまわないけどな」

「まあいい、人間は夜には目が見えなくなる…夜スズメによってね」

「じゃあ、今日の夕飯は焼き鳥にしよう」

「その前にあなたが私の夕飯よ」

この一言をきっかけに臨戦態勢に入る

そんなわけで早速軽めの牽制の電撃を放つ

《ピリッ》電撃を放つ音

「キヤッ」電撃が当たった敵の悲鳴

《ぼふっ》敵が地面に墜落する音

「え！？よわっ！？」

「違うのよ！こうっ今は油断してたからでっ！

いつもは目を見えなくして…ってなんで私の場所が！？」

スーパー言い訳タイム

「なによこのテロップ！？覚えてなさい！」

「なに早々と逃げてんだよ！」

逃げ脚だけはかなり早いようですぐ逃げられた

ちなみになんで鳥目なのに相手の場所がわかったかって言うと
超電磁砲の原作で御坂さんが言っていたように常に俺は周りに電磁
波を放っている…らしい

「まあいいや。お〜い大丈夫か？」

「ヒイイ!？」

「だいぶ古いおびえ方だなオイ！」

「ヒヒイイ!」

「面倒くせえ、よいしょ!」

強引に背中にのせる。まあ俗に言うおんぶと言っちゃだ

「少し揺れるよ」

「ヒイイ!」

あんまり揺れないようにゆっくりと歩いていく

とある人里の近く

「あ、お母さん！」

「ありがとうございます！息子が助かるなんて！」

あなたは息子の恩人です」

「いや、当然のことをしたまですよ」

「あなたは息子の恩人です。ありがとうございます！」

こっから現実

「この野郎！こんなに小さい子をここまでビビらせるなんて！」

「いや、ちがっ「うるせえ！この野郎たたんじまえ！」話を聞けえ

ええ！」

「「「うおおおおおおおおお！」」」

「くそっ、さっきの子はどっか行っちゃまうし…ってきやがった！」

雪崩のように村人が襲いかかってくる

こんなものよけれッか！

「「「うおおおお！シヨタの恨みいい！…！」」」

「救いはねえのかあああ！」

なんと村人A B C D E（以下略）はシヨタコンだった！

「くそっ！一般人にいきなり攻撃は…出来る！」

「うわっ！いきなりこっちにすり寄り寄ってくるな！」

普通の人を村に入って初めて見たっ！
救いはあるんだ！

「くそっ！離れろっ！」

「せめて話をつ！話を聞いてください！」

何とか食い下がる

すると何とか話を聞いてくれるようになった

「分かった！分かったからやめてくれ！」

「ありがとうございます！それで実は……」

「なるほど、つまり子供を保護して

村に戻ってきたらいきなりシヨタコンに襲われた、ということだな」

「うつつ、まともな人ってすばらしい」

「よしよし、大変だったな。しばらくは家に停めてやるからもう泣くな」

「えっ！？さすがにそれは…」

「大丈夫。部屋は別だ」

「はあ。まあそうですよね」

「ん、不服なら背中ぐらい流して…」

「な、ナンダッター」

「嘘だな…」

「デスヨネー」

「さあ早く行こうか。そうだ私は上白沢かみしろさわ 慧音けいねだ。おまえは？」

「千草って呼んでください」

「わかった。いこうか千草」

「…はい、慧音さん」

まあ寝床があるだけ良いとしよう

第2話 人里目指してレッツゴ！…シヨタコンに襲われました (後書き)

慧音先生初登場！

作者は慧音先生が大好きです

女教師とかまじハンパねえっす！

ハアハア

第3話 あれっ？なんかこの霧紅くね？（前書き）

第二話は犠牲になったのだ…

ゆっくりしていったね！

第3話 あれっ？なんかこの霧紅くね？

「おーい、起きろー朝ご飯が冷めるぞー」

「んー、後五分・・・ってなんでやねーん！！！！」

「何がだ！？」

な、何か起きたら目の前に美女がいるなんて…

「おk、つまり妄想だな」

「何言ってるんだ？先に行っておくから早く降りてきなさい」

トントン、と階段を降りて行った

…あゝ確か慧音さんの家に泊めてもらったんだっただよな
忘れてたぜたぜ！！

とりあえず自分の服に着替える

早く降りないとな

「おはよう、割と早かったな」

そう言っでご飯をよそってくれる

ああ、幸せ…

「早着替えて割と得意なんですよ」

「まあ早く座って食べなさい」

「いただきます」

少年s食事中……

「ごちそうさまでした」

「おそまつさまでした」

そそくさと食事を終えて片付ける

「いや〜なんでこんなおいしいご飯が出来るんですか?」

「それはな、愛情という名のスパイスが入っているからだ」

「えっ!?!まじすか!?!」

「ふふ、冗談だ。君といると退屈しないよ」

「そ、そんな…俺の純情を返してください!」

「ハハハ。ところで今日も頼むぞ」

「うつつ…まあいいです、お世話になってますしね」

そう言つて家から出ようとドアを開けると

「えっ!?!何か紅くね?」

「は?君は何を言つて…これは…霧か?」

何か外に紅い霧が蔓延していた

「これは異変か?...博麗はなにをしてるんだ?」

「博麗つて霊夢さんの事ですか?」

「あれ、知ってるのか?」

「賽銭入れたら懐かれまして...」

「じゃあ少し霊夢に異変の解決を依頼してきてくれ」

「おk、いまから言つてきます」

そう言って走っていきこうとすると声をかけられた

「まさか君は空を飛べないのかい？」

「俺普通の人間ですから」

「いや、ここの変態を倒せる奴は絶対に普通じゃない」

断言されたよ畜生！少し前まで普通の高校生だったんですよ！

「しょうが無い…これを使いなさい」

千草は自転車を手に入れた

「自転車で空を飛べって言うんですか！？」

「大丈夫。そいつはつくも神になっているから空を飛べるぞ」

「まじですか？じゃあ行ってきますね」

「うむ気をつけてな」

そいつって自転車をこいで行った

んっ！？何か速くなって・・・

「あ、そいつ喋らないけどかなり速いから気をつけるよ」

「はやく言うてくださいよおおおおお！！！！」

魔理沙さんの筈に乗った時のような浮遊感が全身に突き抜ける

「ちよつとおおおお！速すぎやしませんかねえええ！？」

そう言ってすぐに消えていった

「頼んだぞ、千草」
そう呟いて慧音さんも家に入っていた

博麗神社

「ふう、誰か賽銭入れてくれないかしら？今月も厳しいわ」
「うわっ！あぶねえ！どいてどいてエエえ！」
「何か来たあああ！？」
「何かって失礼トモn……」
「えっ！？ちよつと大丈夫!？」

へんじがない、ただのしかばねのようだ

「ふざけんなああ！死んでたまるかあああ！」
「うわっ！生き返った！」
「死んでませんよ!!」

いや、一瞬だけ意識なかったけど

「まあいいわ、何の用？約束通りお賽銭でも入れに来てくれたの？」
「じゃあほいつと《チャリン》」
「えっ！？まじで！？ホントに入
れてくれたの？」
あなたはあれね…家の神様でしょ、そうなんでしょ!？」

「いやいやいや！なんで自分の所に賽銭入れに来てんですか？そんな訳ないでしょ！」

あと近い！近いから！もう少し離れて！」

俺と霊夢さんの顔の距離があと10cmくらいしかない
こんなのへたれの俺には耐えきれない！

「私あれよ！今ならなんでも願いをかなえてあげれるわ！お金以外なら！」

「じゃ、じゃあ、早く異変の解決を！」

「分かったわ！今すぐ行きましよう！速く！一瞬で！」

「落ち着いて下さい！なにお札も持たずに行こうとしてるんですか！？」

「ふふふ、幻想郷の皆に伝えなさい。今の博麗は素手で大妖怪を撲殺できる……」

「ちよっ！目がまじですよ！落ち着いてエエえ！」

その後10分ほど押し倒されそうになりました

「これはどういうことなんだ！？」

「はっ！よかった、魔理沙さん！霊夢さんが、霊夢さんがああ！」

「つれないわねえ…霊夢でいいわよ」

「落ち着くんだぜ」《シュボ》

魔理沙さんが白い光線で霊夢さんを吹き飛ばした

「えっ！？霊夢さん！かなり飛びましたよ！？」

「大丈夫。夜になったら起きるぜ」

「いや、体の方は？」

「もちろんそつちも大丈夫だぜ。霊夢は丈夫だから」

「あ、ホントに目を回してるだけだ」

「じゃあゆっくりしていこうぜ」

「異変解決を頼みにきたんですけど」

「じゃあ霊夢が起きてから皆で行けばいいんじゃないか？」

「それもそうですね」

そう言っつて博麗神社の奥に2人でお茶を飲みに行った

第3話 あれっ？なんかこの霧紅くね？（後書き）

ちなみに慧音先生の言っていた

『頼むぞ』と言っていたのは寺子屋の体育の授業の事です

一応、つくも神ですが今はあの自転車は喋る予定はないと思います

第4話 右手に見えますのはルーミアでございます そーなのか (前書き)

タイトル通りルーミア登場です

ゆっくりしていったね！

第4話 右手に見えますのはルーミアでございませう そーなのか

「はっ！ここは!？」

「まだ五分くらいしか経ってませんよ!？」

「霊夢、恐ろしい子!？」

半日で起きるダメージを五分で回復って、どういつ体してるんだ!？

「じゃあ、準備してくるから待っててね」

「ま、まともになってる!？」

「頭が冷えたのよ、じゃっ」

そう言っつて霊夢さんは蔵の方に歩いていった

「あの調子なら、すぐに準備はおわると思っぜ」

「じゃあしりとの続きしましょうか」

「え〜と、「待たせたわね!」「早っ!」

しりとりするまでの時間すらなかったよ!どうなってんの!？

「さあ行きましようか、思い立ったが吉日よ!」

霊夢さんに引つ張られながら、霧の発生原に向かった

少女s移動中……

博麗神社境内裏

「あの、何か暗くなってませんか？」

進み続けること10分、いきなり周りが暗くなった、
ちなみに自転車さんには、少し霊夢さんのO H A N A S Iを
食らってもらって大人しくさせた

「確かにいきなり暗くなったわね。でも、夜の「まさか、夜の境内
裏は気持ちいい、とか

そんなのんきな事ぬかすんじゃないよな？」「…そんな事言う訳ない
じゃない」

（言うつもりだったんですね）

（言うつもりだったんだな）

「な、なによその目は？」

「「なんでもありませんよ」「」

「絶対何かあったんでしょ！」

「「.....」」

「うっ、何だったのよ?」

ふう、泣き顔ごちそうさまです

「所で、そろそろ出てきていいのか?」

森の方からいきなり金髪の黒い服を着た少女が現れた
あれ、いまのタイミングは…

「ふ、ふふ、あんだのでてくるタイミング、最低よ。

あんたは、今この瞬間に地獄逝き決定よ」

「な、何か、かなり危険な気がするのか?」

「そんなこと言っていないで早く逃げなさい!つかまったら終わりだ
!」

「早く、早く逃げ」残念、もう捕まえたわ「畜生!」《ドン》

やけくそ気味に魔理沙さんがレーザーを放つが

「無駄よ」

結界ではじかれる、そして

「この中は、私の世界よ」

四角い結界で少女と霊夢さん二人だけ隔離し攻撃し始めた

「アンタが泣き叫ぶまで殴るのをやめない!」

「つく、ならせめてもの抵こ」遅い!」ぐはあ!」

「言ったでしょう、アンタが泣き叫ぶまで殴るのをやめない!、つ
てねええ!」

「…これって絶対に俺達が悪いんじゃない」

「それはいわない約束だぜ」

「すまない、名も知らない幼女よ
俺も命が惜しいんだ、すまない」

「あ、ボロボロになっておちて行きましたね」

「まあ妖怪っぽいから大丈夫だろ、行こうぜ」

「えっいいんですか!？」

「妖怪は丈夫だからな」

それにしてもこの妖怪哀れである

第4話 右手に見えますのはルーミアでございます そーなのか (後書き)

すまんルーミア、霊夢が全部悪いんだ

そんな訳でルーミアが可愛そうな回でした

ルーミアファンのみなさま、怨むなら霊夢をどうぞ！

第5話 これはゾンビですか？いいえ、それは氷精です (前書き)

リザルト

データが飛んだ回数 3回ってなわけでえ俺は悪くねえ！

この作者はスタッフがいただきました

あと今回オリ設定が多く含まれております

第5話 これはゾンビですか?いいえ、それは氷精です

霧の湖

「うわっ敵がすごく多くなってるんですけど!」

「異変だからしょうがない!(キリッ)」

「うわ、ティッシュが降ってきましたよ!」

「異変だからしょうがない(キリッ)」

何なんだこの人たちさつきか同じことしか…そんな事を考えていると目の前に青い服の幼女が現れた

「うわ!?何か出てきま「夢想封印!」《ピチューン》き、汚い流石霊夢さん汚い!」

「異変だからしょうがねえ(キリッ)(キリッ)じゃっねえええええええ!」

「うわ!?千草が切れた!逃げろおろおおい!」

「わあああ!?何か知らないけど逃げろおお!」

「おいしいい!?何生き返ってんですかあああ!??」

幼女が復活してるんですけどおおお!??

「異変だからしょうがな「くねええええ!」…」

「おいしい!?なに黙ってんですかあああああ!??」

「まあ、頭を冷やしなよ」

「くそう、突っ込みばかりやらされてる俺の身にもなってくれよ

……って何さらっと会話に参加してんですかあ!??」《ドン》《ピチューン》

イライラしてたのでとりあえず電撃で吹き飛ばしておいた
ってやつちまつたあああ！死んだんじゃ！？

「「うわあ、サイテー……」」

「お前らは引くんじゃねーよ！」

「落ち着きなはれってチルノはチルノはエセ「お前の口癖じゃねえ
ええ！」《ピチューン》

っは！？また生き返ってたのに殺しちゃったんじゃ

「……まさか、この程度でアタイを潰せたとか、思ってたんじゃ無い
わよねえ」

「なっつんで……ホントに妖精……？いくらなんでも再生が早すぎるんじ
や……」

「アタイの職業は氷精兼天才だからね！」

「答えになって無いのでマスパだぜ」《ZUN》《ピチューン》

今度はマスパで吹き飛ばされる

酷いなあ、なんて事を考えていると吹き飛んだ場所から氷精が現れた

「アタイの再生力はああ世界一イイイイ！」

「くそっ！？どうなってるんですか！？」

「妖精は周りに自然がある限り再生するんだけど、それでも回復力
が異常ね」

「アタイが天才だからよ！」

（（（うわあ、うぜエエ）））

さっきから思ってたけど、こいつかなりウゼエ

「アタイの天才っぷりに声も出ないようね！」

「……はいはい、ワロスワロス」

「何小馬鹿にしてんのよ！電符【ヘイルス「お札で十分ね」《シユ

《《ピチユーン》》」

「「弱っ!?!」」

一回の攻撃で粉碎されてやがった、おお、脆い脆い

「フハハ、無駄無駄あ！アタイの再生力はあ、いくらでも上がるぞ
おお！」

「防御が反比例してるわよ。ナイトになって出直しなさい」《《ピチ
ユーン》》

「でも、このままだとジリ貧なんじゃ…?」

「今からそれを破るからそのため十分稼いで頂戴」

「よし、分かったぜ！それで行こう」

「ふふふ、話は決まったかい？歯あ磨いたかい？ベッドでガタガタ
震える準備は？」

「うっせえ！」《《ブリッ》》《《ピチユーン》》

早速時間稼ぎの為に電撃を放ってピチユらせる

「無駄無駄あ、その程度では私は殺せんぞおお！」

「殺すつもりはないんだよ」《《パン》》《《ピチユーン》》

魔理沙さんも弾幕でピチユらせる

「ハツハアア！レッツパアアリイイ！無駄だあ！」

「どんだんテンションが上がっていつてんなあ畜生！」《《ズドッ》》

《《カーン》》

「なっ!?!?氷の盾!?!」

電撃で吹き飛ばそうとした所を氷の盾でガードされた

「まさか、そう何度も同じ手を連続で放ち続けてアタイを倒せるとも…?」

「つくつそつが!」

魔理沙さんがミニ八卦炉を構えようとした所で小声で声をかける

(待つんだ魔理沙さん、プラン2だ)(プラン2!? 一体何なんだ?)

よしよし、いい感じに食いついてきたな

(「じにょ」に「よ」に「よ」)(「ほうほうそれで」)(カクカクシカじか)
(おk、把握)

よし、作戦は伝わった。これで勝つる!

「で、話は決まったのかい?」

「いや、チルノさんまじ最強すよね!」

「チルノさんに勝てる奴なんているんすかね?」

「な、いきなりなんだい?寝返つてきたのかい?」

まだまだ、まだ足りない。もう一步!もうひと押しなんだ!

《ピロリロリン》詐欺符【口先の魔術師(仮)】!

補助符【猫かぶりのおだて上手】!

「いやいや、たった二回見ただけ対応するなんてマジ最強っす!」

「お、おうっふ、ま、まあね。アタイは最強だからね」

(くくく、うまく乗ってきてるぜ、やっぱりこいつ馬鹿だな)

魔理沙さんも悪い顔してるぜ、ふふふ楽しいなあ

《ピロリロリン》 捕符【金魚のすくい上げ】!

「ホントホント、もう最強すぎるっす!どうやったらそんな強くなるんすかね!？」

「かき氷食ったら強くなるぞ、アイスも食べえ!」

(よしっ!準備終わったわ、適当に離れて!)

(分かりました!) 「チルノさん!ちよつとそのカエル凍らせてくれませんかね!」

「おk!ちよつと待ってる!」 《ビューン》

湖に浮かんでいた孤島に向かって全力で飛んで行った

今です!霊夢さん!

「博麗捕縛結界ゼロ式!」

「うわっ!厨二臭い!」

『うっさい!こういう名前しか思いつかんかったんじゃあああ!』

「おお、メタいメタい」

そんな事ばかり言っている間にチルノを半透明の立方体に取り囲む

「なっ!動けない!？」

「酸素だけは送っておくから死にはしないわよ」

「よっしゃ、流石霊夢!私の嫁だぜ!」

「はいはい、分かったから行こうね魔理沙」

はあ、疲れた、残りの電力も半分くらいしかないから節電しないと

「…ふふふ」

「何笑ってんの、気持ち悪いわよ」

「まさか、この程度でアタイを封じれた、とでも思ってたの…?」

「はあ、実際に動けもしないじゃない」

なんかいやな予感がする…当たらないでくれよ

「酸素は送ってくれてるなんて優しいんだから」

「はあー、もういいよ。いこいこ皆」

「酸素すら自然界に発生するメカニズムになってるんだからね
つまり、こんな事もできるのよ」

その瞬間、周りの気温が一気にさがった

「妖精は自然界のメカニズムに取り組みられているんだから…」

「うるさい！もう黙れ！」

「酸素を吸収することも出来るのよ!」

一気に周りが凍りつき結界が砕け散った

「さあ、第二Rと行こうか」

そこには、エネルギーを吸収したことによりフルパワーモードになった最強の妖精がいた

第5話 これはゾンビですか？いいえ、それは氷精です (後書き)

はあ、めっちゃ更新が遅れた

本当にすいませんでした

第6話 メルヘンだっていいじゃない。人間だもの（前書き）

タイトルウウウ!?

おまえ、真面目に考えるよ作者ア!

皆さんどうか寛大な心で見てください

第6話 メルヘンだっていいじゃない。人間だもの

「さて、第二ラウンドと行くこうか？」

「へ、変身した！？」「

おめでとう！ ちるのは ようじょから びじょに しんかした
(外見的な意味で)

「はあ… ホントに破られるとは思ってなかったわ」

「は、あの程度でアタイを封じられるとか思ったんだったら
残念だったわね。アタイみたいな天才にあんなの効かないわよ！
もっと手を講じることね！」

「じゃあ、結界をプレゼントしてあげる」《すっ》

霊夢さんがそう言って手をかざすとチルノの足元に大きな印が浮か
び上がる

「博麗限定結界」

その結界の名を呼ぶとチルノに青白い光にチルノが包まれる

「っ！？アンタ何を！？」

「アンタの力を一部制限させてもらったわ、これで得意の再生も出
来ない。

…まあ、一時的だけどね」

「たった力の一部と再生を取り上げただけで倒せると思ったたら大間違いよ！」《ヒュン》

先ほどとは早さも質量も違う氷の弾が顔の横を通る

「さっきまでがイージーだとして、今のアタイはルナティックって所ね」

「っ！？これでも食らえ！」《バチィ》

「無駄」《バキィィン》

電撃を放つも右手で一瞬でかき消される

「な、何を！？」

「ただ目の前にきた緩い電撃を凍らせて砕いただけだけど、何か？」

「な、レール」遅いわね、霜符【フラストコラムス Lunatic】
「つくそ！」《うっ》

圧倒的な量の弾幕に対し、回避出来無いと判断し電撃で出来る限り弾幕をへらして手を交差させる

「あら、直前に足掻くわね。

でも無駄よ、ひとつ当たればそこから一気に凍りだすわ。そんな訳で、まず一人脱落かしら？」

「甘いわね、そう簡単には行かないわよ」

「はっ！ぬかしおる！実際に完全に沈んでったじゃない！湖の底に体が凍った状態で落ちれば氷の重さで溺れ死ぬのは確定でしょ」

「残念ね、解説は…」

《ザバツ》

「死亡フラグだ！」

6枚の電流の翼を使い、勢いよく水面から飛び出す。あとチルノ、氷は水に浮くから溺れないぞ？

「羽が生えとる！？」

3人同時に突っ込まれた。いや、確かにおかしいけど…

「時間が無い、さつさと決めるよ」

「いや、色々突っ込ませてよおお！」

6枚の翼の内飛行用の2枚以外を右手に集めコインを上高く弾く

「超電【レール】何だつてのよ！？」

くそっ！？雪符【ダイヤモンドブリザードLunatic】！磁砲【ガン】！

《ズガガガガガ》

チルノの雪の弾幕と超電磁砲（4枚の超高压電流の翼込み）がぶつかり、拮抗する

《ズン》 《ズドン》 《ガン》

その衝撃で湖に大きな波が出来始める

「ハッ！なんつー威力よ！？いいね！最っ高に楽しくなってきたわね！」

（まだ余裕があんのかよ…？それなら…）

実況席

「あつ！あれは！？翼を一枚さらにエネルギーに加える事によって一気に決着つけるつもりね！？」

「何だこのテロップ！？」

「と言うか、霊夢！？いつの間に解説になってるんだ！？私にも役をよこすんだぜ！」

「しょうがないわね。じゃあ、実況にしてあげるわ」

「流石霊夢！愛してるぜ！」

「はいはい、早く来なさい」

再び湖

「ははは！いいねえ！でも一つの翼じゃあ長い事バランスは取れないわよねえ！？」

「なら、速攻で決めるだけだ！」

高圧電流の翼を左手に圧縮し、握りしめる

「高圧電流をさらに再圧縮したんだ…少しは食らってくれよ」

そして圧縮した電流をレールガンに加える

「貫けえええ！俺の武装連金！」

「それは違うでしょおおおお！！《ズドーン》「はあ！」

一瞬の拮抗した後にレールガンがチルノのスペルを打ち破った

「おふっ、死にそう…電池が…」

「おっと、倒れるのは勘弁してよね」《ガシッ》

倒れそうになったところを霊夢さんに掴まれる

「よしよし、良くやったぞ千草

…と言う事で霊夢、掛け金をもらおうか」

「…くっ！今月もまたピンチになりそうね」

そうやって渋々霊夢さんがお金を魔理沙さんに渡すっておい！

「なに！？人が頑張ってるのに賭けしてんすか！酷いですよ！」

「いや、ちょっつと金に困ってて、千草もピンチだったから…魔理沙に賭けを…」

「俺、負けるとわれてたんですか…？うっっ…」

「よしよし、私は賭けておいたからな…
おい霊夢、少し足りないぞ」

「そ、そんなことないよ、キノセイダヨ」

「おい霊夢！これ見てみるよ。これ、全然足りないんだぜ」

「ごめん、実はそれ全財産…」

「…ごめん」

「いいよ」

その場がやるせない雰囲気になる

「所で、あのチルノって言う子が浮かんでるんで助けてくれませんか？」

「いいのか？また襲われたら今の電池切れ寸前のお前じゃ瞬殺なんじゃ…？」

「大丈夫ですよ。『幻想郷では全力で戦った相手はもう友達みたいなもんだ』でしょう？（どやっ）」

過去に魔理沙さんに言われた事をそのまま返す。どや顔で

そうすると観念したように大きなため息をついて

「…はあ、分かったよ。私たちは先に元凶を叩いておくから

その岸でそいつの調子でも見といてやれ」

「じゃ、お願いしますね。ゆっくり待ってますよ」(@ ^ ^) /

「その前に、これあげるわ」《ポイツ》

千草は真っ白いスペルカード×3を手に入れた

「とりあえずそれに弾幕を記録させときなさい
役に立つ事間違いなしよ」

「はは、ありがとうございます
じゃあ行ってらっしゃいです」

「ん、行ってくるわ」

「行ってくるぜ」

「お気をつけて〜」

手を振って眺めていたのに一瞬で見えなくなる
さて、

「よくもやってくれたな、顔に落書きでもしてやるぜ」《ぱぎゅ》

お返しはしっかりしないかね

第6話 メルヘンだっていいじゃない。人間だもの（後書き）

ちなみにめーりん、パチュリー、咲夜さん、レミリア戦

無い予定です

なぜかって…？

それは、おっと時間のようだ

すまないな、それは次のあとがきで話すと思います

あと主人公の口調が安定しない…どうしましょ？

第7話 ノーマルなんかで満足してんじゃねーよ！男ならEXだろ！！（前書き

フランちゃんごぶぶ・・・

うわこの作者気キモッうわバカやめっ（ry

ゆっくりしていってね〜

第7話 ノーマルなんかで満足してんじゃねーよ！男ならEXだろ！！

小一時間後

「うーん、ここは一体？」

「お、起きたみたいだね、ご機嫌いかが？」

「な、なんであんたが！くっ氷符「おつとちよつと待ってもらおうか？」…何よ？」

コインをつきつけて停戦を呼び掛ける。

我ながら、凄い悪党見たいな感じがする…罪悪感がハンパネエ

「とりあえず、こつちもコインは下ろすわ《ポイ》」

「何なの？さつきから何がしたいの？訳分らないんだけど？」

「そつだねえ、とりあえずまずは友達にでもなってもらおうか？」

「・・・ポカーン」

おいそこ！？黙んな！

「ちよっ！？自分で言っつてて恥ずかしいから何か言っつてよ！」

「超展開テラワロスwww」

「で、どうなの！？いいの！？良くないの！？（超やけくそ）」

もうどうにでもなれ、とやけくそ気味に大きな声を出す
すると、少し微笑みつつ

「じゃ、改めてあたいはチルノ。人呼んで最強よ」

「ん、俺は千草。あと嘘乙」

「「よろしく」」

挨拶も終わったところで本題を切りだす

「じゃ、友達のよしみで紅魔館に連れてってもらおうか？」

「さっきみたいに翼生やしていけばいいじゃない？バーってさ」

チルノが身振り手振り交えて説明する

「うん。それ無理。今やったら1分持たないと思う」

「うわ、役に立たないわね。何してんの？」

「ちょっと待っていま目から塩水出てきたわ」

塩水の処理中…

悲しくなんてないもん！…言ってる気持ち悪くなった。ゲロゲロリン

「終わった？」

「うん、大丈夫。じゃあお願いするよチルノ」

「まだOKしてないんだけど…、まあいいや友達のよしみでね。つかまって頂戴」

「じゃあよろしく頼むよ、チルノ」《ガシツ》

落ちないように全力で足をつかむ

「なんでそこをつかむの？」

「他の所だと全年齢対象で大丈夫かわからんからな」

「え、そういう目でみてたの？何それエロい」

「冗談きついで。俺の守備範囲は15以下は入らないんでね」

ちなみに上は20くらいだな（見た目的な意味で）

「つまり変身すると、ふうあんたも好きね」

「よし、今すぐにそこに正座しろ。今から友人として説教兼愛の鞭を放ってやる」

威嚇の為に強めに目の前で電撃を放つ

「冗談だよ、じ・よ・う・だ・ん！お願いだからまた分解しないでよ」

「もう良いから早く行かないと霊夢さん達が待ってるから」

「じゃあ飛ぶから掴んでてね」

少女s移動中……

「この体勢ってパンツ見えるかもだけど見ないでね」

「見ねえよ!」

全力で突っ込む。さっきも言ったが俺にロリコンの趣味は無い!絶
対にだ!

再び移動中……

「お、あの紅いのって紅魔館じゃないか?」

「ほうほう、あそこがアタイの別荘になる所だね」

「んな訳無いだろ、さっさと行ってくれ皆待ってるかもしれないし」

「全く妖精遣いが荒い人だよあんたは」

少女s移動中……

紅魔館門前

「うわ、門がぐちゃぐちゃだなあ、あんたの連れじゃないの…これ
やったの?」

「霊夢さんじゃないな、門が削られてるし。魔理沙さんがやったん
だな」

門の破壊の痕跡から犯人を推理する。…当たってるかは知らんがな
「ねえ、あそこに突き刺さってるのって妖怪かな？とりあえず引き
抜いとく方向で」《スポン》

こ、これはチャイナ！？胸熱です

「うん、レーザーがあ、レーザーがあ…」

「すごいなされてるわね、ってアンタどこ見てんの？」

チャイナのお姉さんは所々服が破れたりして、とても扇情的な感じ
になっていた

「へっ、いや、これは違っ！…これは服とか破れてるから家の中に
入れたやろうと言う親心だよ！」

「……（白い目線）……」

「苛めか！？これはそう言うのとは…違うと言いきれない…」

しょうがないじゃん、男の子だもん

「まあいいや、このままじゃ風邪ひくもんね」

「ツンデレ乙」

「パーフェクトフリーズブチかましてやるっか？」

「ジョークですよ、ジョーク！」

チルノさん、目が怖いですよ…

「もう良いよ…いこつ、ムッツリの千草？」

「超電磁…「待った待った！ジョークだよ、ジョーク！」それなら良いんだ」

コインをポケットにしまつてチャイナのお姉さんを…「チルノ、頼んだ」

これ以上は危険と判断し、その場を遠ざかる。しょうがないね、男の子だもの
そんなナイス判断の俺にチルノが

「うわっ、やっぱり《バチイ》《ピチューン》」

茶化そうとしてきたので電撃で吹き飛ばししておいた
俺の常識ががりがり削られていくな。…ふう

『幻想郷では常識に囚われてはいけないのですね！』

「うん、これなんだよ？馬鹿なの？死ぬの？」

とりあえず天の声？に突っ込みを入れておいた

「はっ！？こじは！？」

おめでとう！ ちるのが さいせいしたよ やったね

「じゃあチルノ、お姉さんは頼んだぞ」

「ふっ、しょうがないわね」《すたすた》

チルノはそう言ってさっさと近くの小屋に収納しに行ったようだ

「さて、霊夢さん達はどこに居るんだろうか」

ここまで来たけど全くあてが無いって言う状況な訳よ

「おっす、とりあえずこんな所でずっと居るのもなんだからさ、さっさと中に入ってあんたの連れ探そうよ？」

考え度としてるうちにチルノが中に入ろうと言ってきたのでとりあえず中に入ってぶらぶらしよう、と言う結論に達した

少女&少年移動中……

「赤い！赤くて目に悪いぞここ！？」

内装まで真っ赤にするなんて趣味悪いぜ！

目がチカチカして痛いぞ畜生！

「あたいには分かるわ…」

あいつらは下に居る！さあ行くわよ！」

「待てチルノ、なんでそんな事がわかるんだ？」

いきなりチルノがそんな事を言い出し、俺のをグイグイ引いてく

るので根拠を聞いてみた
すると

「さっきの人のポケットにこんなものが入ってたよ」

チルノがボロボロの地図を取り出し、《危険、立ち入り禁止!》と
書かれた所を
指差しながらどや顔で

「絶対に強いやつがいるからこんなこと書いてあるんだよ!
強いやつ」頭首って事でここがボス部屋に違いないんだよ!」

とか言ってきたので言い返してみた

「お前、もしそこに居なかったらどうすんだよ?
もしもホントに危険なだけな場所だったらどうするんだよ?」

「甘いわね!綿がしに砂糖とグラニュー糖と角砂糖を塗すと見せか
けて
砂糖を直接舐めてみたみたいに甘いわ!」

「文字数稼ぎ乙です」

「結局何とかの穴に入らずば、何とかは得られないって訳よ!」

「ほとんど覚えてないじゃねーか!」

「もう良いからさっさと行こうよ。こんなとこでじっとしてるよりは
はいいと思うよ」

「む、確かにそうだな。チルノのくせに良い事言っじゃないか？」

「『チルノのくせに』は余計だよ！」

そう言いつつ俺は、手を強引に引っ張られて連れて行かれた

少女&少年移動中……

紅魔館入口

「おおっ！赤い！目が痛い!？」

「なんでそんなにテンション上がったんの？」

チルノがジト目で質問してきたのでテンション高めに

「だって館だよ!？洋館だよ!？ボス戦のおいがするぜ！俺の野次馬精神が唸るぜ！」

と返しておいた。あんまり戦いたくないね。しんどいし…痛いし。

「アンタ戦う気は無いのかい？」

「わざわざ戦わなくても霊夢さん達が解決してくれるさ」

「女に任せて戦わないってどうなのよ？」

「適材適所と言う言葉があっただな……」

「ははあん、つまり自分は弱いから強い女の子に戦ってもらって訳ね！」

また分かり易い挑発だな、そんな餌に釣られないクマー

「はっ！んな訳無いじゃん！俺が本気だしたらまじ半端ねえし！」

「はっどうだかね!？」

さらに餌をまいて来る。そんな餌に「なら、どちらが多く敵を倒せるかでしょうぶな！」

俺が勝ったらさっきのセリフは帳消ししてもらおうか!」おもいつきりつられたクマー

「いいわよ！その代わりにあたいが勝ったらアイスを1年分もらおうか!」

「いいぜ、じゃあ勝負は館に入ってからでいいな!？」

「じゃあ行くわよ、3、2、「バカめ！誰が待つか!」《バン》うわっ！汚い！」

あんた絶対に忍者でしょ!？」

「だまされる方が悪いのだからあぁ!ってあれ?敵が1人もいない?」

勢いよく館に飛び込むとそこにはきれいに宝石の部分だけくり抜いた石像などが散らばっていた

「霊夢さん、そんなにお金に困ってたんですね?」

「千イイ草くウウウウウウー!!」

恐る恐る後ろを振り返ると、そこにはスペルカードを掲げて目に赤い光を灯したチルノが立っていた

「ち、チルノさん？ちょっと待ちましょうよ。落ち着いて、落ち着いてください！」

さっきの奴は正直に悪いと思ってますからそのスペルカードを……
って無理ですよ

そうですね、すみませんでしたあああ！」

「だが許さん！氷符【パーフェクト】逃げるが勝ちじゃあああ！ヒヤフイイイ！」逃がすかああ！」

上、下、左右から弾幕が迫ってくる

「とにかくどこか隠れる所は……畜生そこらへんの物全部壊されてやる！」

「アハハハハ、待て待てえ！ぶち殺してあげるうう！」

「そこまで怒りますか！？良いじゃん少しくらい！」

「……………《ババババババ》……………」

「無言！？危ないから！？危ないから許して！？」

さらに弾幕が濃くなる。それに伴って扉や床、天井などが傷ついていく

「くそっ！超電磁砲【レールガン】！」《ズガン》

足元にレールガンを放ち、床を抜けさせる

「ははは、さらばだ明智君！」

床が抜けた事により、重力で俺は地下に落下する

「しまった！待て千草！」

チルノが俺を追いかけて地下に落下する
一方俺は…

「うわ、気持ち悪っ！こんなことするんじゃないああああ！」
激しく後悔していた

少女、少年落下中……………

《ズドン》

「あぶねー、羽生やしてなかったら粉々だったわ…」

俺は羽を生やし、衝撃を緩和する事によって粉々になるのを回避していた

「危ないじゃない！何してんのよ!?!」

「元々お前が襲ってきたんだろっが!？」

「あんたが卑怯な事するからじゃない!？」

「ぐっ!痛い所を…」

「ねえ、あなたたちが新しいおもちゃ？」

「!？」

チルノと言い争いをしている所で不意に後ろから声をかけられた

「そうね、そうに違いないわ!私はフランドール・スカーレット。
楽しく遊びましょ?」

名乗り終えると同時に圧倒的なプレッシャーを放ってくる。
これは、マジでやばいな…

「チルノ、一時休戦だ。ここを一旦二人で切り抜けよう」

「うん、その方がいいみたいね」

「さあ、あんまり早く壊れないでね?」

フランドールが言い終わるや否や命がけの戦闘が始まった

第7話 ノーマルなんかで満足してんじゃねーよ！男ならEXだろ！！（後書き

つまり、美鈴くレミリアが無いのは

全部飛ばして行き成りEXになるからです

次から戦闘が始まるよ

第8話 やったね千草、友達増えるよ！（前書き）

テスト期間中なのに更新してしまった…

勉強とかしねえから！

ゆっくりしてたってね！

第8話 やったね千草、友達増えるよ！

「先手必勝！霜符【フラストコラムス】！」《ズゴン》

戦いが始まると同時にチルノがスペルカードを発動させ、直撃させる

「ハツハツハー！まともに食らったんじゃない？さっさときまっちゃたわね！？」

「チルノ！それはフラグだ！」

「そんな訳無いじゃない！私が負けるはずないわ！」

「フラグ二回目！やめるよ、もうやめてくれ！死にたいのか！？」

もうこれ以上はマジでやばいぞ、チルノ！

しかし ちるのは いうことを きかない

「あたいが…負けるわけないだろう…」

うわ、すげえいい笑顔…

「きゅっとして…ドッカーン」《バーン》

「チルノおおおお！」

目の前でチルノが吹き飛んだ…

…はぁ！？いきなり何の前ブレも無く吹き飛んだぞ！

チルノだからまた再生するけど…俺は洒落にならんぞ！

そんなこと考えていると不意に声をかけられた

「これが私の【ありとあらゆるものを破壊する程度の能力】よ。さてお兄さんは私を倒せるかしら?」

余裕綽々と言った様子でこちらを見上げる

ていつか絶対に『程度』じゃあ片付かないだろう

「確かに恐ろしいの威力だが…お前は一つ勘違いしてるぜ」

「あら、何かしら? つまらなかつたらさっさと殺しちゃうよ?」

「おお、怖い怖い。まあ俺が言いたいのはな、チルノは普通の妖精じゃないって訳よ」

「はあ、何言ってるんだか。もういいや、きゅっとして…」 「電符

【ヘイルストームHard】!」

《パパパパパパパン》

どこからか大量の氷の弾幕がフランドールに襲いかかる
その様子に俺はニヤツと口角を釣りあげながら復唱する

「言つたる? 普通の妖精じゃないって」

「普通の妖精じゃないどころか、妖精じゃないでしょ、この火力は! ?」

しかもなんか変身してるし! ?」

「やだなあ、あたいはただの氷精がE xモードになっただけだよつと」 《ババン》

チルノも口角釣りあげつつさらに弾幕を放つ

「つく!? 禁忌【レーヴァテイン】!」

とてつもなく大きな炎剣を作り出しチルノに振り下ろそうとする

「やらせるかよ! 超電磁砲【レールガン】!」

「っ!?!」

「ナイスアシストよ! 千草! いけえエエ!」

が、その炎剣目掛けてレールガンで剣の進行方向をねじ曲げて、剣をチルノから逸らす。

そしてチルノが弾幕をフランドールに直接たたきこむ

「「これが俺あたの力だ(よ)!!」」

ダブルでフラグ乙です^p^

「アハハハハハ!」

「な、なんだ!? 一体どうしたんだ!?」

フランドールがいきなり狂気を孕んだ雄たけびを上げる。

「禁忌【フォーオブアカインド】!」

突如フランドールが4人に増え、それぞれがスペルカードを構える

「禁忌【レーヴァテイン】！」

「禁忌【クランベリートラップ】！！！」

「禁弾【過去を刻む時計】！！！！」

「禁弾【スターボウブレイク】！！！！！！」

1人は炎の大剣を構え、1人は無数の魔法陣で取り囲み、1人は手から十字の弾幕を放ち
そして1人は七つの魔砲陣を構える

「まずいつ、くそっ！」

チルノを抱き寄せて、磁力を全開にして天井に突っ込む

《ドン》「カハっ！？」

「え！？しまった！止まらな《ズシャ》ぎゃあああ！？」

すると4方向から囲んでいたせいか同士撃ちになり、また1人に戻った

「お、なんかラッキー？」

「油断するな！次来るぞ！」

フランドールが次のスペルを取り出す

「はあはあ、いいね、お兄さん達強いね！楽しいよ！禁忌【カゴメカゴメ】！」

スペル宣告した瞬間に弾幕の壁に囲まれ、そこから弾幕が迫ってくる

「このくらい！凍符【パーフェクトフリーズHard】！」

「ついでに俺もやっところかな？」

チルノは高速で弾幕を出し、途中で凍って、そこからバラバラに降り注ぐ弾幕を放つ

俺は手に砂鉄を集めて鞭のようにしてチルノと俺に当たりそうな弾幕を逸らす

そしてそのまま打ち合っていれば、簡単にスペルブレイクできるはずだった

「…秘弾【そして誰もいなくなるか？】」

「連続スペル!？」

フランドールがスペルの途中で新たなスペルを発動させて赤いオーラを放ち、突っ込んでくる

「くっ!?!弾幕の中を突っ切って!?!」《ごすっ》

そしてチルノにタツクルして体勢を崩させ、殴り始める

「あはははははは!」《シュシュシュ》

「っ!?!」

最初は避けていたチルノだが、フランドールの拳の早さに追いつけ

ずに掠り始める
そして、

《ゴスツ》「が…はっ!？」

「チルノ!？」

ついにフランドールの蹴りが脇腹をとらえ、軽く2、3m吹き飛ば

「ゴホっ!げふっ、一瞬息がとまったよ」

しかし、何とかまだ無事のようなだ。

チルノがフランドールに向かって弾幕を放とうとしていると
もう一度フランドールがスペルを掲げる

「【そして誰もいなくなる?】」

轟、とフランドールのオーラが、より紅く、より濃く、より禍々し
くなる
そして、

「っ!?!?雪符スゴウがあっ!?!？」

チルノがスペルを唱え切る前にフランドールがチルノを殴り飛ばす
そしてそのまま、壁に突き刺さり、チルノがぼてつと音を立てて床
に落ちる

「なんだ、ただのチートか。」

「さあ、次はお兄さんの番だよ?」

勘弁してほしい。が、それも言ってもらえないので、超高压電流の翼を2枚、背中に纏う

「あら、きれいな羽ね？」

「お前ほどじゃないさ」

「そう、ありがとう」

「じゃあ、さっさと始めようぜ？」

手をクイクイっと動かし、挑発する

「さよなら、お兄さん」《スン》

挑発に乗って、こちらを切り裂きに来るフランドール。といっても、予備動作しかこちらには見えなかったが。普通ならこんなの反応も出来ずに切り裂かれるだろうが

「そんなつれない事言っなよ？」《ゴン》

「!？」

俺はフランドールの体当たりを羽で受け止め、フランドールの背中に肘鉄を食らわせていた

「…なんであの速度に反応できるの？」

しかし、さすが吸血鬼、空中で体勢を戻し、きれいに着地してこち

らに質問をぶつけてくる

「企業秘密だ」

(やはり、電撃じゃないとだめか?)

「じゃあ死んで」《シュン》

「だが断る」《バァン》

「きゃ!?!」

今度は片方の電翼で抑えつけ、片方でたたき落とす

「やってくれるじゃない?」

「こつちもサービスだ。もらっとけ」《パァン》

「っ!?!」《パキイイイン》

電撃をサービスで打ち込んでスペルブレイクさせる。

ちなみにさつきから目にも止まらない速度の攻撃を避けまくっていたのは、

第三話で夜雀を倒した時、常に発していると言った電磁波のレーダーを

さらに強化し、この地下室全体の動きを確認していたので

フランドールの動きなど手に取るように分かり、

予備動作と体の向きから攻撃の来る位置を割り出して

そこに翼を置くだけの簡単なお仕事だったのだ

飛ばしてくれてもいいんだぜ?

「はあはあはあ、お兄さん、唐突だけど名前はなんていうの?」

「千草だ。」(名字はいらないよな?)

「千草お兄さん、あなたの名前は私が忘れるまで忘れないわ」

「安心しろ、忘れないようにこれが終わってもここにちよくちよくお菓子でも貰いに来てやるよ」

「それは無理ね。次でお兄さんは死ぬもの」

「死なねえし、絶対にお菓子貰いに来てやる」

「じゃあこれに耐えられるかしら?」

「愚問だな。耐えるんじゃないかって打ち破ってやるよ。」

そして俺はコインと4枚の翼、フランドールはスペルカードを構える

「Q.E.D!【495年の波紋】!?!?!」

「超…電磁砲【レールガン】!?!?!」

《ガキイイイイン》

こちらは4枚全て吸収して放っているが、フランドールは余裕そうに構えている

「あはははははは!?!?!こんなものなの!?!?そんなんじゃないでし

よ？

もっと全力でかかってきてよ！」

「ぐっ！うああ！六枚だあああ！！」《ゴッ》

六枚でやっと拮抗し、少しずつ押していく

「そうこなくっちゃね！こっちも全力だよ！」《ゴゴゴッ》

「っ！？」

こちらの全力が少しづつ、しかし確実に押されていく
このままでは確実に押し負けるだろう

このままだったのなら

「…雪・符【ダイア…モンドブ・リザー…ド】」《ゴウッ》

「チルノ！？」

そこで、先ほど倒れたはずのチルノがボロボロになり、喋ることも
ままならないのに

しっかりと地面を踏みしめ、スペルをとнаえていた

「アタイ…は最強…だけど、今回は…譲ってやるわ」

「ありがとう、チルノ！」

チルノにお礼を言い、一歩前に踏み込む

「う、がああああ！」 《ズガアン》

「くっ！？や、ば、ぐ、あああああ！！！」 《ズドオオオン》

そしてフランドールの弾幕を突きやぶって、フランドールのすぐ横を通り過ぎて行った

《ドサツ》

と、同時に電池切れで倒れる。

「千草！？大丈夫！？」

「大丈夫、一時間ほど休めば動けるようになる…」

「いったいどうした…」

俺の目の前で紅い目をしたフランドールが立っていた

「くけくかかかか」

「くっ！？チルノ！？」

「弾幕はもう撃てないよ！もうスペルカードもないし…！？」

俺は電池切れ、チルノは弾切れになっていた。
これ以上どうやって戦えば…？ 《ピキーン》

「っ…！」

手をポケットに突っ込み、ひとつの白いカードをつかむ

「スペルカード持ってたの!?!」

「ああ、行くぜ!」《ぎゅ》

「くけけけけけ!!!」《ズン》

フランドールは炎の大剣を作り出し、こちらに向けて振りかぶっている

そしてこちらもスペルカードを握りしめ、スペルを作る。名前は…

「**圧縮式【超電磁砲】!**」《ズドン》
レールガン

そこら中にただよう静電気を吸収し、
右手に圧縮、そのままコインを音速の何倍かもわからない程の速度で放つ

《ズゴオオオオン》

そしてフランドールの炎の大剣を突き破り、フランドールを薙ぎ払って

それでも止まらずに紅魔館に大きな穴をあける

「うわ、これどうすんの?」

「いいか、全部フランドールがやった。分かったな?
あとでアイスおごってやるからそう言う設定で頼む」

「3本でいいわ」

買収完了（ニヤリ

第8話 やったね千草、友達増えるよ！（後書き）

7 / 29

スペカ名変更。

今回から、実験的にやってみるコーナー

NGシーン1 フォーオブアカインドのシーン

「まずいつ、くそっ！」

チルノを抱き寄せて、磁力を全開にして天井に突っ込む

《ドン》「カハっ!？」

「え!?!しまった!止まらな《ズシャ》ぎゃあああ!？」

天井に突っ込む、そして…

「え、まだ止まらな…《ズドドドン》ガハハアア!!！」

そしてチルノと千草は星になった…

第？話 夏だ！暑い！そうだ、風呂に入ろう！（前書き）

紅魔郷エクストラのエピソード的な…

ゆっくりしていいね！

第？話 夏だ！暑い！そうだ、風呂に入ろう！

「とりあえずチルノは無事か？」

「あたいは天才だからね！」

そう言っていたが、姿も幼女に戻り
ふらふらしていて服が所々赤かった

「そっか。じゃ、とりあえず俺も疲れてるし、フレンドールの治療
でもしてやってってくれ」

「分かったわ。あんたはそこでじっくりしっかり休んでなさい」

「ありがとう」

「どづいたしまして」

軽く笑いあってその場に座り込み、スペルカードを見つめる

「さっきの威力ハンパなかったな…本当に俺、人間離れしていつて
るな…」

そう呟いてクラスメートの悪友の姿を思い浮かべる

「俺、もうあっちに帰れないのかな？」

「何呟いてんの？」《ポン》

「わきやあー！」

突然声をかけられて驚いて声を揚げる

「ププー、変な声出してヤンの！」

「この野郎、待ちやがれ！」

「ここまで来てみなさい」

チルノに馬鹿にされたので追いかけてようと立ちあがると
一気に飛ばれて逃げられる

《キイイイイ》「あれ、千草。何でここに居るの？」

「霊夢さんこそどうして？」

チルノを追いかけているとドアが開き、そこから少し服が破れている
霊夢さんが現れた

「ああ、ここの館の主に頼まれてね」

「私がそうよ」

霊夢さんの後ろから大きな羽のついた、変な帽子の少女が現れた

「ねえ、いま失礼なこと考えてなかった？殺すわよ？」

「すみません」

全力であやまっておう。マジで殺気がやばかった…
超怖えこの幼女

「で、あなたの妹はどこに居るの?」

「変ね?どこにもいないわ」

「もしかして、金髪できれいな羽してますか?」

「あら、よく知ってるわね?そうよ」

まさかとは思っけど…

「名前はフランドールって言いますか?」

「何で知ってるの?本当に怖いわよ?」

うわ、名前まで一致してるよ。完全にさっきのフランドールだな

「…多分、その人…俺とチルノが倒したかも…」

「「?」?」?」

うん、面白いくらい訳が分からないって顔してるな

「いや、さっき戦うことになりました…」

苦戦した結果…勝っちゃいました」

「へーすげえじゃない?」

何とか霊夢さんはこちらの話を理解したようだが、幼女は

「え…フラン…？な…は…」

全くついて来れてない様だ。

これだから幼女は困るぜ

「どうしましょうか？」

「もう良いわ。あんたが倒したんだったら、もうここに居る意味が無いもの。」

レミリア、明日神社で宴会するから来なさいよ

そう言ってさっさと身支度して階段を上っていったので俺も帰えることにした

「チルノー、終わったかー？」

「ああ、終わったよ」

「じゃあさ、これから俺は帰るけど、お前も一緒に帰らないか？」

「いいよ、行きましょう」

そうして俺はチルノーと一緒に帰る事にした

そう言えば、外の霧なくなってたな

人里 慧音さんの家

「おお、千草、無事だったか？良かった」《ギユ》

人里に帰ってくると、慧音さんが迎えてくれた

そして、胸のあたりに柔らかい感触が…ああ、野次馬して良かった…

「フー、熱いねお二人さん！溶けちゃいそうだね！」

「いや、そう言うことではないんだが」《スツ》

ああ、折角の感触が！チルノオオオオオオ！！てめえ後で絶対にはこぼこにしてやる

まあ、いつまでも言ってもらえないので、経緯を話す

「千草、血の涙をまで流さなくてもいいんじゃない…」

自分では気付かなかったが服が血でぐしゃぐしゃになっていた

「…とりあえず家に入りなさい」

「はい」

「っあ、それと」

「?なんですか??」

家に入る途中で呼び止められる
一体なんだろう?

「おかえりなさい、千草」

「ただ今です。慧音さん」

そして皆で家に入って行った

お風呂タイム

《カポーン》

「ふう、お風呂お風呂」

この俺、千草はいま風呂に入ろうとしている
誰得? 知らねえよそんなもん!

「これが噂の五右衛門風呂、胸が熱くなるな…」

ここで火傷するなんて、そんなベタな事する訳無いぜ!
そして蓋を敷いて、風呂に…

《チャプ》 「ギヤアアアアアアアアアア！！！！」

皆！傷だらけのときにお風呂に入ると傷が開くから絶対にまねしないでね！

「ど、どうした千草！？」

「け、慧音さん…俺はもうだめです…」

「千草！しっかりしろ！死ぬなああ！」

「最後に…もつともてたかった…」 《ガクツ》

「千草ああああ！」

そして意識がブラックアウトした…

第？話 夏だ！暑い！そうだ、風呂に入ろう！（後書き）

NGシーンその2 フランとの戦い後

「いや、さっき戦つことになりました…

苦戦した結果…勝っちゃいました」

「へーすごいじゃない？

じゃあ戦つてみましょう、行くわよ？

夢符【夢想封印】」

「ちよつ！？ギヤアアア！！《ズドン》…」

「あれ、千草？千草アアア！？」

そうして俺は息を引き取った…

第10話 未成年の喫煙、飲酒は犯罪です！ (前書き)

三日連続の投稿を目指した結果がこれだよ！

ゆっくりしていてもいいのよ？

第10話 未成年の喫煙、飲酒は犯罪です！

翌日

「お〜い、そろそろ起きろよ千草？」

「う〜ん、後50年…」

「氷符【「すいませんでした！」それで良いんだよ

この野郎…妖精だからもう完全に回復してやがる
こっちはまだあちこちが痛いって言うのに…」

「まあまあ、とりあえず今日は宴会なんだから、持っていく料理の
準備くらいしてくれ」

「ふっ、料理の腕で数々の友人を悶絶させた俺の力を見せてやりま
すよ」

と言っても、ほとんどは慧音さんがつくってしまっているので少し
おにぎりを握るくらいだが…

「すいません慧音さん、塩酸と硝酸はどこにありますか？」

「お前は何を作ろうとしてるんだ!？」

塩酸+硝酸=王水 あの人の心と体をとかしつくす、極悪料理の完
成だ!

「やだな、冗談ですよ、塩をとってください」

「ホントか？まあいい、ほら、受け取れ」

「あたいはあつちでかき氷でも作るわ」

そんな感じで準備完了して宴会に出発した。

キングクリムゾン！移動するという過程を消し飛ばし、到着したという結果だけを残す！

博麗神社

「お、千草いらっしやい」

「俺だけじゃないけどな」

「霊夢、今回も異変解決ご苦労だった。

お礼と言うにはなんだが、これでも受け取ってくれ」

そう言って慧音さんは霊夢さんに重箱を渡した

「いいのよ、私はこれが仕事だからね。

それより、まあ楽しんでってね」

「ああ、ありがとう」

「じゃ、一通り終わったところでアレ食べに行こうぜ千草」

チルノ、君は本当に空気が読めないな…
ま、楽しまないと損だよな？

「よっしゃ行こうぜ！」

「早く行かないと無くなるわよ！」

こうして、チルノと一緒に宴会場を全力疾走して、慧音さんに全力の頭突きを食らうはめになった

少年&幼女悶絶中…

「いったく、まだ頭がジンジンする〜」

「チルノがあんなに走るか「千草ー！」《ゴン》ぐはあああ！」

頭を押さえながら立っていると、いきなり腰辺りにタックルされた

「痛っ〜、誰だ？ってフランドールか」

「うん千草！一日ぶりだね！」

腰のあたりを擦りつつ、確認すると、そこには一日まえに戦ったフランドールがいた

「あたいには何も無いのかい？さびしいね」

「何言ってるの、えーと??」

「…ケンカ売ってるのかい?」

「冗談よ、チルノ」

互いにふざけあっている様子はつい先日殺しあったようには見えな
い。

しかしそこで、フランが何か思いついたように

「あ、そうだ！お姉様が何か言いたい事があるって言ってたよ?」

「そうなの？今はどこに居るの?」

「まずは博麗の巫女の所に行くんだって」

「なるほど、じゃあ行ってくる」

「行つてらっふあい」 《もぐもぐ》

チルノが食べ物を中心に含みながら言ってきたので

「行つてきます」 《バチィ、ピチューーン》

電撃で吹き飛ばしてやってから、博麗神社の本殿の方に歩いていく
すると途中で魔理沙さんに声をかけられた

「おっす千草！館の主の妹を倒したんだってな？大活躍じゃないか」

「それほどでもありませんよ。所で隣の方は?」

さつきから魔理沙さんの隣でちびちびお酒を飲んでいる
紫のパジャマみたいな服を着た女の人について聞いてみた

「ああ、こいつはパチュリーって言って「能力は【火水木金土日月
を操る程度の能力】よ」「そう言うことだな」

説明を途中で取られ、明らかに不機嫌そうになる魔理沙さんと
逆にどや顔で魔理沙さんを見るパチュリーさん。
この人たち、なんか仲よさそうだな

「まあいい、ここに座ってお前も飲めよ」

「折角ですけど、レミリアさんに呼ばれてるので」

手短に断って、有無を言わせない様、さっさとその場を離れる
酔っ払いは厄介だからね

少年移動中・・・・・・・・

博麗神社の本殿前に着くと、そこには霊夢さんとレミリアさん
そしてレミリアさんの横に居るメイド服の銀髪の女の人がいた

「え、と、レミリアさん？呼ばれてたんで来ましたよ？」

「そう、やっときたのね。霊夢、咲夜少しはずしてくれない？」

「分かりました、お嬢様」

「いやよ、面倒くさい」

れ、霊夢さん、空気読んでくださいよ…

「はあ、じゃあ、後で何かおごるわよ」

「貸しーね」

そう言って霊夢さんはご機嫌で去って行った
そして、レミリアさんは真面目な顔になり、

「千草、だったわね？」

「はい」

「あなたがフランを倒してくれたおかげで、あの子の狂気、少しだけ薄まったの。

だからこうして、こんな所にも連れてこられるようになったの。

だから、紅魔館の主としてではなく、あの子の姉として礼を言うわ
ありがとう、千草」

かしくまった態度で頭を下げられる。

うつ、なんか、こう、息苦しいな、こういつ挨拶って

「頭を上げてくれませんかね？」

「え!？」

「俺だけがやったわけじゃないし、
それに俺はたまたまそうなっただけですから、
そんなに言われるほどの事してませんよ」

「で、でも!」

「それなら、これからはフランドールを出来るだけ自由にさせてや
ってください」

決まったな、俺輝いてるぜ!

「…分かったわ、ありがとう千草」

「いえいえ、では私はこちらへんで」

「今度紅魔館に来たら、手厚く歓迎させてね」

「お願いします」

それから、皆に散々いじられ、お酒を飲まされ、一杯目でダウンし
たのは言うまでもない

第10話 未成年の喫煙、飲酒は犯罪です！ (後書き)

NGシーン フランドールのタツクル

「チルノがあんなに走るか「千草ー！」《ゴン》くはああー！」

「あれ、千草、何で動かないの？千草！千草あああー！」

そして俺は息を引き取った…

第11話 二日酔いとか、マジ勘弁ww(前書き)

三日連続投稿、マジ何やってんだ？

ち・な・み・に・！この小説は健全です！

エロなどありません！（ここ重要！）

第11話 二日酔いとか、マジ勘弁ww

翌日 博麗神社

「おうつふ、超吐きそう…」

「お願いだから吐かないで頂戴ね」

昨日飲まされて二日酔いでガンガンする頭を押さえつつ、自分の現状を確認する

「なあ、霊夢さん」

「何？千草？」

「何でこんな惨状になってるんですか？」

死鬼累々、その言葉がこんなに似合う光景なんて中々みられない。そこらじゅうに酒瓶が散らかり、半裸は当たり前、チルノは全裸状態になっていた。

おい、脱がすなら慧音さんにしとけよ

「とりあえず、掃除手伝いますね」

「ありがと、こいつら全然後片付けしないから助かるわ」

そんな感じで寝てる皆をゆすり起して行く途中で

寝ぼけてチルノがパーフェクトフリーズを放ってきたのはいい思い出。

な訳は無い。きちんとレールガンで吹き飛ばした

少年&少女掃除中……

「ところで千草、霊夢が渡したスペカは役に立ったのか？」《ズズ
ー》

一通り終わって一息付いた所で魔理沙さんがお茶をすすりながら聞
いて来る

行儀悪いでやんす！

「一応、一枚だけ使わせてもらったんですけど、返した方が良いで
すかね？」

「いいわ、全部あげる。また足りなくなったらいつてくれればあげ
るわ」

「やけに太っ腹だな霊夢」

「ふふふ、これから紅魔館に行けばご飯がもらえるのよ」

自慢げに話してくる霊夢さんエ
今度お賽銭でも入れてあげよう

「おーい、千草！もうそろそろ帰るぞ」

「もう支度終わったのか、早いな。はい、今行きますよ！

…そう言うことでまた」

「おう、またな！」

「お賽銭でも入れに来てね」

軽く挨拶して二人から離れ、家に帰る。

慧音さんとの愛のs「ドリ符【安心と信頼の金タライ】」「《カラン
カラン》

何でこんな所にタライが!?

少年、女性&幼女移動中……

人里

「あ、慧音先生だ！皆、慧音先生が帰ってきたよー！」

ちびっこが慧音さんの帰りを皆に知らせに走っていく。
皆慧音さんが大好きなんだな

「うおおおお！！慧音さんつきあってくれえエエエエー！！」

「何言ってるんだ、慧音さんはわしの嫁じゃ！」

「はあはあはあー！おっばいおっばい！」

お前らは黙ってる

「フン！《ガキイイン》」

「帰れ！《バライイイ》」

「変態しかいないの!?!この村は!?!《カキイイイン》」

慧音さんは頭突き、俺は電撃をためらいなく放ち、チルノは戸惑い
つつ凍らせる

チルノ、こいつらに容赦は必要ないぜ

「さて、さっさと帰るか…」

「そうですね、ちょっと疲れましたし」

「もう訳が分からないよ。突っ込むのも嫌になってきた…」

チルノ、こればかりは慣れしかないぞ…

そうだ、後でアイスでもおごって機嫌を直してもらおう

「…千草め…1人だけ慧音さんの所に住むとは、許さ《ビリッ》
《ふ》」

最後に残ったごみを掃除して帰宅した

少年、女性&幼女帰宅中……

ああ、一日ぶりだけど、慧音さんの家はすぐく落ち着くな…

「じゃ、私は夕飯の仕込みでもしてくる」

「行ってらです〜」

慧音さんは障子の向こうに行ってしまった。

ふふふ、今日のおかずをぬすみぎきだ！

チルノと共に障子に耳を当てる

「妹紅、来てたのか」

「おっす、久しぶりだな慧音」

ほうほう、二人が仲良く話してる所を見ると…

「うへへ、慧音、また成長したんじゃないか？私が確かめてやろう」

「妹紅！？どうして、手をわきわきさせながら近づくんだけだ！？」

やめっバカ！ちよっ！？《モミモミ》ひっああっ！」

そっち系だったらしい。慧音さんだけはまともだと思ってたのに…

「チルノ、アイスでも食べに行くか？」

「うん、いこっ」

「ちよっ、やめっ！？そこは」《ピシャァン》

そうしておれたちは慧音さんを置いてアイス屋に小一時間程居座ったのであった

第11話 二日酔いとか、マジ勘弁ww（後書き）

NGシーン3 慧音先生へるへる

「うへへ、慧音、また胸が成長したんじゃないか？私が確かめてやるっ」

「妹紅！？どうして、手をわきわきさせながら近づくんのだ！？やめっバカ！ちよっ！？《モミモミ》ひっああっ！」

そっち系だったらしい。慧音さんだけはまともだと思ってたのに…俺が矯正してやる！《バリバリ》

「ちよっ！千草まで何っ！？《もみもみ》ひんっ！？」

消されないかな？消されないよね！

だってこれ、肩揉みだからね！勘違いしないでよね！

第12話 幻想郷最速のパパラッチ！（前書き）

4日連続投稿なんて無理

そう思っていたところが私にもありました…

ゆっくりしていったね

第12話 幻想郷最速のパパラッチ！

俺とチルノがアイス屋から帰ってくると、そこにはテカテカした妹
紅と呼ばれていた少女と

服をはだけさせて涙目になっている慧音さんがいた

「ふう、スツキリ！」

「うつつ、ひつく、グス」

「け、慧音さん？大丈夫ですか？」

流石にかわいそうだったので、声を掛ける。

泣いてるってことは、そっち系ではないんだらうと信じたい

《パライイイイイン》

「あやややや、幻想郷最速の「何ごとだ！」《ズドン》酷いひどイ
イい！！！」

幻想郷は今日も平和だった…

「終わりませんけどね！」

「馬鹿な！？電撃を受けて立っていられるだど！？？」

うん、まあ手加減はしたんだけどね。

ま、負け惜しみなんかじゃないんだからね！

「あやややや、私じゃなければ死んでましたよ…！」

「で、何の用だ？射命丸？」

軽口をたたく射命丸？と呼ばれていた女性に慧音さんが疑いの目を向ける

…まあ、いきなり窓を突き破って入ってくるもんね。

俺もビツクリして電撃を撃っちゃうくらいだもんね、しょうがないね…

「ふふふ、実は紅魔館の吸血鬼の妹を倒した外来人がいるとか何とか聞いてきたんですよ！

さあ、ここに居るのは分かっています！出でてもらいましょうか！？」

あの事すごく広まってるなあ…勢いで行動するもんじゃないかな？でも、あのおかげでフランドールはある程度は自由に行動できるようになったし、いいよね？

そんな事を考えていると慧音さんに小声で

「あいつは射命丸と言ってな、
新聞記者なんだが…かなりのマスゴミで有ることない事書きまくる
と言つ警戒すべき妖怪なんだ」

ほうほう、なるほど。

マスゴミか…最悪だな、絶対に知らぬ存ぜぬで通そう。絶対にだ！

「ここにはいないよ。確か今は博麗神社に居るよ（棒）」

「そうだよー、ここにはそんなひといないぞー（棒）」

「そんな事より、慧音をもみしだきたい」

俺、慧音さんと続いて完璧　ここ重要！な演技で窮地を脱出しよう
とする。

…まあ、こんな完璧だからばれるはずないな！

「あやややや、困りましたね。

えーと、特徴は…黒い髪で人里では見慣れない服を着ている男性か
あゝ」

「ちよつと失礼！」《バン》

全力で家を飛び出す！だって絶対あのままだったらつかまるじゃん
！？

逃げろおおお！全速力だあああ！

「あまい、甘いすぎるー！」《シュイン》

速っ!?!一瞬で目の前に移動された!?!

「そこをおおどけエエエエ!」《バアアアン》

「無駄ああ!風符【風神一扇!】」《パキイイイン》

「馬鹿な!?!」

電撃をスペルカードにより発せられた風で散らされる。

ま、まずい、このままではある事ない事書かれるにきまっている…

「嫌ですねえ、

そんな私がマスゴミばかりやってるように言わないでくださいよ」

「思考が読まれた!?!」

「いや、それなら、この前『人里の歴史について聞きたい』と言った時の記事が

なぜ『必見!上白沢の乳を揉むと巨乳になる!?!』という記事になったんだ?

おかげで博麗の巫女が私に鬼の形相で『乳出せやごるああああ!』と迫ってきたんだが?」

霊夢さんエエエエ

ていうかマジでマスゴミじゃねえか!!

そんな事を言われても飄々としながら

「あややや、私の記憶では確か私は『超必見!!幻の巨乳神!ハクタク現る!』だった気がするんですけど…!」

「っ！？突撃【ハリケーネミキサー！】」《ズドツ》

「ふふっ遅い遅い…」《すっ》

「う、うぜえ！！流石うぜえ丸うぜえ！」

スペルカードを使って一瞬で詰め寄るがそれすらうざい顔で避ける
おお、ウゼエウゼエ…

「さて、つつがなく私の紹介も終わったところで、取材させてもら
いましょうか？」《ガシッ》

「ひっ！？ちよつと誰か助けてえエエエエ！！」《ズドオオオオオ
ン》

「「「ご愁傷様です」「」

射命丸さんに腕を掴まれて、凄い速度で飛ばれ、俺は意識を手放し
た…

しかし、射命丸さん曰く『取材した、という事実だけが必要』らしいので

なんの支障もなく文。新聞は発行されて、見出しは

『過去最強のロリk外来人襲来！どんな妖怪もかかってこい』だった
てや…

俺、死んだんじゃね…？

第12話 幻想郷最速のパパラッチ！（後書き）

NGシーン

外道の千草！

射命丸侵入編

《パライイイイン》

いきなり黒い羽をを生やした女性が窓から突っ込んできた

「あやややや、幻想郷最速の「電符」レールガン【圧縮式超電磁砲】

《ズドピチューン》！！」

うぜえ丸は犠牲になったのだ…

第13話 とある体育教師の憂鬱（前書き）

リアルにまえがきに書くことが無かった。

ただそれだけの事…

第13話 とある体育教師の憂鬱

寺子屋の臨時体育教師になった千草は考えていた…

「次の体育《遊び》はどうしよう…?」

慧音さんに頼まれて体育の教師として

体育（遊ぶ）のは良いのだが、もうすでにやれることをやりつくしてしまつた

たとえば、鬼ごっこ、その派生のけいドロは10回はやったし…
かくれんぼや、だるまさんが転んだは何十回やった事が…

「やっぱり遊ぶ道具がいるよな」

幻想郷は基本的に缶とかないから缶けりは無理だし、
ボールが無いから球技なんてやった事もないし…
むしろそんなものは幻想郷に入ってから見た事も…

「ある！」

千草…閃く！

圧倒的な…アイデアを！

「困った時は、香林堂に行ってみよう」

気軽にコンビニに行くようなテンションで出かけたのが間違いだつた…

少年移動中・・・・・・・・・・・・・・・・

「くっ！？長い長すぎるぞ！」

冷静に考えればすぐに分かったのに……だって距離けっこうあるのに
走っていくって無いわ　www
笑ってる場合じゃないよ！まだまだ時間かかるよ畜生！

「誰かー！？俺を甲子園に連れてって　！？」

《シーーーーー》

「くくくくく、ですよなー？」

全力で叫んでもやはり何も帰ってこない……けっこつ泣きそうだな……
これは……

まあ、やっっても疲れるだけなので走りだした

少年走行中……………

香林堂

「はあはあ、死ぬかと思つた……」

途中で妖怪に襲われる事10回だつたかな…？
絶対にあの新聞のせいだろ。
汚い、さすが烏天狗汚い。

次に会つたら全方位への回避不可能な電撃弾幕で焼き鳥にしてやる…

《カラーン》

「おや、いらつしゃい。久しぶりだね？」

「ど……どうも……」

動かなくなりそうな足を何とか動かし、店内に入ると
少し驚いたような表情の店長が迎えてくれた。
もっと温かい言葉が欲しいよ……
とりあえず目的の品を探そうかな…

とりあえず、奥の方の棚を探していると、目的の柔らかそうなボールを発見した！
うっん、ご都合主義乙です。

しかし、ただこれだけ買うのもアレなので
今回はもう少しだけ見て回る事にした
うゝむ、なにかいいものは無いかな…？
でも、単に回るのはつまらないのでこの店を歌にしよう。
聞くが良い！我が美声！

「店はひろいゝなゝ？大きいゝかゝ？」

「放っておいてくれ…」

「サーセンwww」

しょうが無いので黙って探そうかな？

…おっ！これってD○じゃないか！？
おおっ！これはカセットも大量にある！
掘り出し物が一杯あるぞ！

少年発掘中………

…「で、なんでこんなに買ってくるんだい？」

「いゃゝゝ、ちょっと熱中しちゃって」

ゲーム本体はOSしか無かったが、カセットがけっこうあったので山のようになっている…

その他にもまたいろいろ買ったんですけどね…

べつ別にやましいものなんて買ってないんだからね！

「ゲーム機、用途は娯楽か…。こんなに買うものかな…」

「いいんですよ！そういうもんなんですから！」

少し強めに言いつつ、お金を払って店をあとにした…

さて、ここでさっき買ったものの出番だ！

いでよ！鉄の塊！

「説明しよう！この鉄の塊を投げ捨てて、磁力で移動をしてやるぜ
！」

ブン（鉄の塊を投げ捨てる音）

バチィィ（磁力を発生させる音）

ゴン（鉄がこちらに帰ってきて頭にぶつかる音）

「痛っ—————!!」

ふざけるな！また歩けと言うのか!?

あんなのやっつてられッか!?

「おや、千草こんなところでなにしてるんだ？」

そんな事を考えてると、行きなり後ろから魔理沙さんに話しかけられた。

おお！グッドタイミング！この機を逃してたまるか！

そう決めるとすごい剣幕で魔理沙さんに近寄る

「魔理沙さん！ここで会ったのも何かの縁！俺を人里まで連れてってくださいー！」

「よ、よくわからんけど任せとけ！」

ふふふ、やはり押しが大切だな…

しかし、俺は一つ見落としていた…

…魔理沙さんの筈のスピードは半端じゃないということ

「つぎやあああああ！！魔理沙さん！速っ！？速い!?!」

「何！？もつと速く！？しょうがないな！行くぜ！」《ズドン》

「じぼほほほほ！？ちよつとおおおお！あぶねえ！」

さらに悪い事は続き、

「落ちっ！？《つるっ》ぎゃあああああ！…！」

「ん、なんか軽くなった…？よし、調子もいいしもつと飛ばすぜ！」
《ズドン》

「わああああああ！つく！」《バサッ》

何とか落下とちゆうで羽根を生やして無事に落下する。

ここまで派手に発光してれば魔理沙さんも気付くであろう…

あれ？なんでそんな速度で飛んで行くんですか？

まさか、…気付いてない？そんな訳無いよね！？ある訳ないテですよね魔理沙さん！？

「あの、何してるんですか？」

「へ！？貴女は誰ですか？」

いきなり緑の髪をした女の子に話しかけられた。

ふう、なんか女の子ばっかだなここは。

「し、失礼しました！私はリグル・ナイトバグっています。
一応蛭の妖怪やっています」

ああ、おとなしそうな子だな…

癒される…。って蛍の【妖怪】？妖怪！？妖怪だつて！？
こんないい子が妖怪な訳が！あるんだよな…はあ…

「あ、あの大丈夫ですか？なんか疲れてませんか？」

「いえ、大丈夫です。…はあ」

「ほ、ホントに大丈夫なんですか！？
少しそこで休んだ方がいいんじゃない？？」

「いえ、其処までじゃないんで、お気遣いありがとうございます。」

…はあ、こんなに他人の事まで気にかける子なのに妖怪なんだ
ぜ…
マジ信じられねエ……こんな酷いよ…

「所でこんな所でホントに何してたんですか？」

「いや、ちよつと備品の購入を…」《キューピーン》

千草…閃く…いや、其処までの物じゃないけど…
とりあえず作戦実行なう

「リグルさん、今暇ですかね？」

「え、まあそれなりに…」

「ならば、ちよつと一緒に遊ばない？」

D○を取り出して、リグルに渡して

マ〇オと操作の説明をする。

「なるほど、ここをこうしてこうやって…」

「よし、操作はだいたいわかったな？対戦しようぜ！」

「対戦ですか？いいですよ、やりましょう？」

「よし、やろうぜ！（にやにや）」

少女&少年対戦中……………

「あ、キノコ!？」

「フハハハ、無駄あ！」《ボンボン》

「ひ、酷い!…」

「はははは！勝負に汚いもなにも無いのだ！」

少年少女をフルボッコ中……………

「うっぐすっ、もうマリ〇なんてやりません」

「え、もう一回やるっぜ、もう一回もう一回！」

「うわ、絶対にやってたまりますかあああ！？」 《ダダダダ
ダダ》

リグルは叫びながらどこかに走っていった。

たった三十回くらい完封勝利しただけなのに…

「しょうがない、帰るか…」

幸い、魔理沙さんがけっこう進んでくれていたのでそのまま走って
帰って行った

第13話 とある体育教師の憂鬱（後書き）

NGシーン その4 ゲームリグル

少女&少年対戦中………

「くっ！？そんな所を通れたのか！？」

「ふふふふ、これで三十回連続勝利！」《ピロリロリン》

「くっ！？もう一回！もう一回だ！」

「次から負けたら服を一枚脱ぐことにしませんか？
そっちの方が面白そうですし……」

「くっ！？言っただな！？全裸に剥いてやる！」

その後日が暮れても対戦し続けたが俺は一回も勝てなかった……

初めてなのに強すぎんだろ……

俺は結局全裸に……誰得だよ！

第14話 メリークルシミマス！ えっ！違っの！？（前書き）

キングクリームゾン！

時間を消し飛ばし、一気に冬に！

今回、主人公がかなり暴走しております。
閲覧に注意してください。

え、いつもの事？

そんな訳無いじゃないか！

第14話 メリークルシミマス！ えっ！違いの！？

「12月24日滅べ滅べ滅べ滅べ……」《ブツブツブツブツ》

「お、おい？千草はどうしちゃったの…？」

「非リア充の呪文だよ。しょうが無いしょうが無い」

《コンコン》

「ん、何だろう？ちょっと出てくる」

慧音さんがノックに反応して玄関の方に対応に行ったようだ。

あれ、俺は今まで何を…？何も思い出せない…

「…な…、…った。では皆…え…こ…」

「…こち…はし…く…頃…く…」

《ガラガラ》

会話はあまり聞こえなかったが、とりあえず終わったようで慧音さんが居間にもどって事情をせつめいしてくれた

「つまりカクカクシカジカでクリスマスパーティーを紅魔館でやるから来いと的事だ」

「吸血鬼なのにクリスマスの誕生日を祝うんですか？」

「細かい事は良いらしいぞ？そんな事よりいいじゃないか、たまには騒がないとな」

やべえ、超適当ジャン。

…って言うか

「意外ですね。慧音さんもそんな事言うんですね」

「ははは、たまには息抜きも必要だろ？」

常に気を張っていては疲れるだろ？肩もこるし」

「ならば私が揉んでやろう！」

「もこたんinnしたお！」

「チルノ黙ってる！っていうか妹紅さんいつの間！」

本当にどうやってくるんだろう？

毎回いつの間にかやってくるんだよなあ…

「私は慧音（の肩）を揉むためならどこにでも現れる！」

「お前はそういうことを断言するなあああ！！！」

二人が言い争っている中で

「チルノ、どうせだしさ。マリ○カートしようぜ！？」

「いいわよ、今回こそはあたいが勝つんだから！」

隅の方でマリオカー○をしていた…
ちなみに慧音さんはやはり（肩を）揉まれていた

少年少女熱闘中………

「おい、もうそろそろ行かないとまずいぞ？時間的に」

「おっと、もうそんな時間ですか？じゃ、そろそろいくか、チルノ？」

「もう一回！もう一回だけ！勝ち逃げ汚いぞ！」

「続きはあっちでたっぷりとしてやるから早く行くぞ。」

「絶対にだからね！今度こそ勝つんだから！」

チルノを説得して紅魔館に出発した。

ちなみに30回やって30勝してしまった。

ふ、楽勝だったぜ……

少年少女移動セッ【キングクリムゾン！】

紅魔館付近

「ふう、意外と近かったな…」

「なあ、今まで流してきたが、それ勝手に使ってもいいのか？」

「戦闘とかに使ってないギャグパートだからいいんですよ！」

少年少女さらにいd【キングクリムゾン】

紅魔館大門前

流石のキングクリムゾン、一瞬で紅魔館の門の所まで来れた。

便利すぎるな、ギャグパートは…

そんな事していると門の所に人影が見えてきた。

その人影は圧倒的な違和感をその場で放っていた。

服がチャイナとか、そんなものじゃない、

明らかに門番の放つ雰囲気ではないそれはつまり、

…寝ていた。

「紅魔館のセキュリティどうなってるんだ？」

「ま、実際は館の主がかなり強いから

侵入しようと思うような奴はいないから門番いらなげな気もしま
すけどね…」

「むにゃむにゃ…そんなに食べられませんかよ…」

俺たちが違和感について話し合っている間もベタな寝言を発してい
るし、

これは良くない経費の無駄遣い。

「まあ、起こしましょうかね」《プリッ》

「はっ！？寝てませんよ！寝てませんよ咲夜さん！？

って、パーティーの参加者の方ですか？ビックリさせないでくださ
いよ…」

「俺は門番なのに寝てるあなたにビックリしましたよ…」

「寝てませんよ！瞑想というやつですよ！」

「あふれ出る言い訳感…」

「いい訳じゃないですよ！本当ですって！」

どう聞いてもいい訳です、本当にありがとございました。
しかし、完全に手遅れなのにそれでもまだ食い下がってくる

「じゃ、それでいいから門をあけてくれ」

「その前に規則なので招待状を拝見しますね」

「分かった。これでいいか？」

「はい、たしかに拝見しました。ではお通りください。」《ガラガラ》

門番の人に指示されて、招待状を取り出し、門番の人に見せると招待状を確認し、門をこじ開けた。

「あの、門番さん？あなたそんな力がどこにあるんですか？」

「ふふふ、これはですね、私の【気を使う程度の能力】によって体を強化したんですよ。《ドヤツ》

そして私の名前は紅^{ホシ} 美鈴^{メイリン}と言うので

間違っても中国とかみりんとか言わないでくださいね！」

あふれ出る龍玉臭。

そしてどや顔はすげえうざい。

まあ門も開いたのでお礼を言っていこうかな。

俺超礼儀正しいな

「ありがとう、本みりん！」《ダツ》

「それを言うなと言ったでしょうがああああ！」《ダツ》

ばかな！俺の言った挨拶は完璧だったはず！

…まあ、駄目だと思ったから全力で走ってるんですけどね！

もう少しで館の中だ！中に入ればいくらでも隠れる所はあるから、館に入ればこちらの勝ちだ！

フハハハハハ！《ぽふっ》

走っていた俺はいきなり何か柔らかい感触に包まれた
え、ここにはなににも無かったはずなのになんで柔らかい感触が？

「お客様、他のお客様の迷惑になりますので、館の周りではあまり
走らないでもらいませんか？」

「あ、すみません。」

思わず謝ってしまう。

近くで見ると何ともきれいな人だなあ。

あれ、じゃあさっきまで包まれてた感触はもしかして!?

うわああああ！こんなことならもっと堪能しておくんだったあああ
あ！

「待てエエエエエ！中国4000年の歴史を「美鈴、なんでこんな所に居るのかしら？」

さ、咲夜さん！？イヤっこれは違うんです！？色々あります！」

【咲夜の世界】

《シユン、さくさくさく》痛あああああ！！」

い、いま起こったことをありのまま話すぜ…

メイドさんがスperl宣告すると同時に無数のナイフが出現したんだ…

けっして物質転移とか、物質の生成とか、

そんなチャチな物じゃねえ…

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

そんな事をやってる間にメイドさんがこちらを向いて挨拶をしてくる

「失礼しました。私、紅魔館でメイド長をやっております、十六夜咲夜と申します。」

それでは会場に案内しますのでついてきてください」

「あの、美鈴さんはこのままでいいんですか？」

「ああ、その子は丈夫なので大丈夫です。」

では遅れない様についてきてください」

「はあ、分かりました」

美鈴さん…流石に可愛いそうだな…アーメン。

そんな訳で少年少女移動中……

「あら、千草おそかったわね？」

「霊夢さん、久しぶりですね」

咲夜さんに案内されて、大ホールにつくと、

霊夢さんに出会った。

しかし、なぜかその手には大きなパックが握られていた…

「あの、霊夢さん？なぜそんなものを持ってるんですか？」

「ああ、ここの料理おいしいから持ってかえって暫くのご飯を確保しようかと…」

「霊夢さん…そんなに切羽つまってたんですね…」

何でだろう、一寸目から塩水が…

またお賽銭を入れに行こう…

「千草、大丈夫…？いきなり泣き出すなんて…？」

《ガシツ》「霊夢さん！俺にはお賽銭を入れるくらいしかできませんが」

強く生きてください！」

「え、ええ、分かったわ…」

気付いた時にはなぜか霊夢さんの肩に手を置いて励ましていた。でも、しょうがないよね…俺にはこれくらいのことしかできないんだから…
そして、ひとしきり泣いていたらいつの間にか霊夢さんはいなくなっていた。

「よしっ！気分を切り替えて今はパーティーを楽しもう！」

よく考えたらこんな美女ばかりの所で迎えるクリスマスなんて今までなかったじゃないか！

幻想郷最高！

「あら、何をそんなに張り切っているのかしら？」

「あれ、誰もいない？」

「殺すわよ…？下よ」

突然後ろから声をかけられて振り向くと誰もいなかった
と思っただけで身長差で見えなかっただけでレミリアさんがいた

「す、すみません！ちよつと見えなくて！」

「悪意なしなのがさらにムカツキを加速させるわね…
まあいいわ。楽しんでる、クリスマスパーティー？」

「そりゃもう。こんな美女に囲まれながら迎えるクリスマスが楽し
くない訳無いですよ！」

若干興奮気味で言い返す。

もてない俺がこんな場所に來れるとか、胸熱……

「そう、それはよかったわ。」

あなたは大切な客人なんだから楽しんでもらわないとね。」

「ありがとうございます。じゃあ、また」

「ええ、後でイベントがあるから楽しみにしててね」

「なるほど、でもそれ教えてよかったんですか？
サプライズとかなんじゃ…」

「え？招待状に書いてたんだけど…」

「聞いてない…これは酷いじめだ…。
鬱だ、超鬱だ…それじゃあまたあとで…」

「え、ええ、強く生きてね…」

「はい、ありがとうございます…」

さっきまで励ましてた俺が

一瞬で励まされるなんて…鬱だ…死なないけどな…

まあいい、おいしい料理でも食べて気分をm「千iiiiii草あああ
ああああ!!!」

《ズゴン》

「ゲフウウウウ!!!」

何者かのタツクルによって吹き飛びそうになる俺。

しかし、足元に磁力を発生させ、吹き飛ぶのを回避する。

でも、衝撃が逃がせなくなり、真面目に死ぬかと思った…

そして、タツクルをブチかましてきた奴を確認する。

…まあこんな事前にもやられたから大体の目星は付いてるんだけど

「フランドール、本当にタツクルは勘弁してくれ…」

「えへへへ、ごめんね。」

久しぶりに会ったから気分が高揚しちゃって…」

フランドールめ、こいつ全然反省してねえ

流石にこれ以上はやばいから今回は強目に言っておこう

そう決めると俺はキリツとした顔を作り

「フランドール、さすがにこれ以上はマジで骨折れるからな。手加減と言うものをだな…」「よう千草！なんだこんな賑やかな所で説教なんて

やめるよ。お前も飲め飲め！」ちよつ、魔理沙さん酒臭つ！どんだけ飲んでるんですか！？」

魔理沙さん、いきなり肩組んで絡んできたと思ったら超息が酒臭え…
…っていつか俺み青年なんですけど…

よし、ここはしっかりと断ろう！

「魔理沙さん、俺み「オラオラア！飲め飲め！」ゲボガボガボガボ」

魔理沙さんがワインをボトルごと俺の口に強引に突っ込み飲ませてくる

ちよっ！？やばっ、息が出来な…

「あひゃひゃひゃひゃ、酒持ってこーい！」

「千草！？酒弱いの！？誰か水持ってきてええええ！！！」

「いい飲みっぷりじゃねーか！ほらほらもつと飲め！」

「わしゃしゃしゃ…！もおおつと持ってこおおい…！」

「千草！落ちつけ！」《カキイイイイン》

突然俺は氷漬けにされる。

氷漬け…ってことはチルノかあ？

「はあ、『鮭は飲んでも飲まれるな』ってことわざ知らないの?」

漢字があああ「ちがあああう!」《バキイイイン》

電撃を操り、中から氷を粉碎し、外に飛び出す。

この程度ではあおいちゃんは倒せんぞお?

「うへへへへへ、酒酒酒酒…」

「誰か何とかしてエエエ!」

チルノの悲痛な叫びも無視して酒を求めて走り出す。

もう誰にも俺は止められないぜ!

「うるさいわね、夢符【夢想封印】」

カラフルな弾幕が俺に向かって放たれる。

あまりの恐怖に一瞬素に戻る

「あれ、これって俺死んだ…?」《ドドドドドド》

そしてそのまま俺に抵抗する間もなく無数の弾幕が降り注いだ。

第14話 メリークルシミマス！ えっ！違っの！？（後書き）

NGシーン5

「うるさいわね、夢符【夢想封印】」

カラフルな弾幕が俺に向かって放たれる。
あまりの恐怖に一瞬素に戻る

…とても思っていたのかあ

「むだあ、電符【圧縮式超電磁砲！】」

スperl宣告し、夢想封印をふき飛ばす。

「はははあ！むだむだむだむだあ！
酒をよこせええ！」

「「「「「「どうしてこうなった……」「」「」「」

第15話 も〜うひ〜とっ寝〜る〜と〜お正月〜 (前書き)

タイトルに詐欺を入れちゃ〜いけね〜よ。

大晦日はゆっくり年越しそばを食べるんだよ！

リア充のやる事は知らん！分からん！リア充は爆発しろ！

第15話 も〜っひ〜とっ寝〜る〜と〜お正月〜

慧音さんの家

「それでは！今年最後の仕事を授ける！」

「「サー、イエッサー！！」「」

元の世界で言う大晦日、慧音さんの家で俺とチルノは今年最後の任務を言い渡されていた。

「チルノは家の大掃除！千草は年越しそばの購入だ！各自、迅速に任務を達成するように！以上！質問はあるか！？」

「はい！」《シユビ》

「何だ千草！？」

「バナナはおや「関係ないだろ！」「すみません…」

定番のギャグは使うことも許されなかった。

そんな訳でやるせないままに年越しそばを買いに行く。

「って言ってもソバ屋は一体どこにあるんだ？」

搜索する事5分、完全に迷った…

けっこう長い間人里に居るけど行動範囲が狭いから簡単に迷っちゃうんだね。

しょうが無いね、

「しかし、私には慧音さんからもらったメモがある！」

「なに！？慧音さんの手紙！？皆の衆！！！」

「『イエツサー！！！！』」

「お前らいい加減にしろおおお！！！！」 《ツゴン》

ちぐさは でんげきを はなつた

「邪魔だ！」 《パキイイイン》

しかし ふしぎな みぎうでに かきけされた

「それはダメだろおおおおおおお！！！！」 《ズドバゴオオオオン》

しかし けつきよく ふきとばされた

「そんな…幻想〇しが…」

「お前らはそんなもんを持ってくんじゃありません！」 《ドドドドド
ド》

少年掃除中…

とりあえず電撃を片っぱしから当てて吹き飛ばしてやった。
さて、そろそろメモを見て蕎麦屋を探さないとな

かさっ (ポケットに手を突っ込んで紙に手が当たる音)

ポロツ (メモが消し炭になり、崩れ落ちる音)

がくっ (俺がその場に崩れ落ちる音)

ひゅううう (風で消し炭が全て飛ぶ音)

「もう…駄目だ…おしまいだ…」

多分さっきの電撃のときに電圧に耐えきれずに焦げてポロポロにな
ったんだな

しかも風で吹き飛んだからもうどうしようも無いじゃないか…

「あら、そんな所でなにしてるの?」

「あ、え〜と、咲夜さん？」

「久しぶりと言うほどでもないのかしら？」

Orz こんな感じになっていたら咲夜さんに声をかけられた。
なんか前とキャラが変わってませんか？

「流石にいつも気を張り詰めてたら疲れるでしょう？
だから今はこんな感じに息抜きつてとこかしら？」

「なるほど。所で知らないと思いますけど蕎麦屋さんの場所とか…
？」

ははは、さすがに知らないよね？

だって少しとはいえここに住んでた俺が知らないんだから。
でも、今は藁にもすがりたいから一応聞いておこう。

はあ、そんな訳無い「其処を右に曲がってまっすぐ進んだら右に見
えるわよ」はい…

流石瀟洒なメイド、まじ半端ない…
読心術なんてマジ瀟洒や…

「何でそんなに人里に詳しいんですか？」

あれですか？俺に皆でいじめをしかけてるんですか？」

「偶にここに茶葉を買いに来るから地形を丸暗記しただけよ」

やだこのメイド、超瀟洒…

つーか丸暗記とか流石やでえ…超瀟洒やでえ…

そして暫く談笑し、
咲夜さんと別れて案内通りに蕎麦屋に行つて
目的のブーツを買つて帰宅した。

慧音さんの家

「ただいま帰りました」

「おかえり。遅かつたな」

「色々ありましてね。つてチルノはまだやってるんですか？
けっこう長いな」

「だつて廊下長いんだもん！全然終わらないよ！」

俺もけっこう長い間買い物に行つてたけれど

それでも終わつてないってことはかなり長いんだろうな
しょうが無い、俺も手伝つてやろう

「慧音さん、雑巾貸してください」

「あんならそう言つてくれると信じてたわ。
はい、後は頼んだわよ」

そう言つて俺に自分の雑巾を渡すチルノ。

これは許されないね。

「あ、俺一寸あっちの方でお茶飲んでくるわ。
後頑張れよチルノ」

「ジョークよ！ジョークだから見捨てないで！
ホントにしんどいんだって！」

「分かったよ、慧音さん雑巾下さい」

「念入りに頼むぞ」

「分かりました」

慧音さんからもらった雑巾で廊下をふきに行った

少年&幼女掃除中・・・・・・・・・・

「つ終わったあああああ！！！！」

「腰が痛い！」

「手も痛いぞ！！！」

かなりの長時間休みなしで雑巾掛けやら蔵の整理やらやったので体の節々が超痛い。そんな俺たちに慧音さんが素敵な提案をしてくれた

「お疲れさん、居間の方に団子があるから食べなさい」

「ヒヤッフウウイ！団子団子おお！！！」

「汚い！チルノ待てこの野郎！」

こっちに来てから団子が超好きになった。だって、人里の団子屋の団子超うまいんだもの…そしてその味を知るチルノが一足先に走り出した。まずい、このままではチルノの事だ…全て口に含むに違いない。急がなければ。

行くぜ、発想の提供ありがとうございました。

「電磁加速！」

ローレンツ力を用いて一気に加速し、チルノを抜きさる。うひゃひゃ、団子は貰ったああああ！！！！

《バン》

いち早く居間の前につき、勢いよく障子を開ける。
勝った！第三部k・・・

「ん、そんな所で何立ちつくしてるんだ？」《もぐもぐ》

「も、紅…さん…」

障子を勢いよく開け、そこに居たのは団子を啜えている妹紅さんだ
った…

「もしや…その団子は…？」

「ああ、そこに置いてあったからもらったんだ。

全く、こんな所に置いてあったら乾燥して食べなくなるぞ。

しかも二つも置いておくんてな。

もちろん両方とも処理しておいたぞ」《ゴクン》

ふ、ふふふふ、これは…許されないよなああ？

いつの間にか横にいたチルノもそう思うだろ？

《コクコク》

ふふふ、生まれた事を後悔させてやるぜ…

《説明しよう》

いつもは温厚？な千草だが

重労働による空腹、疲労、そして何より、食べ物の恨みが
全ての怒りを倍増させる！

「表に出るやぐるアあああ！！！！」

「団子を返せえエエエエ！！！！」

「ん、お前らの分はあつちにあつたぞ？」

「なんですって！？《ダツ》つく！？待ちなさい千草、凍らせるわよ！」

「フハハハハ、無駄無駄あ！もらったああ！」

チルノがはんするよりも先に
妹紅さんの指さした所に走り出す。

もらった。この速度なら間に合うタイミングじゃない！
勝った！第三部完！

《ドン》「お前ら、家の中ではあまりハシルナヨ……？」

「さ、サーイエツサー……」

全く穏やかでない笑顔で笑いかける慧音さん。
あまりの恐怖に体が動かない……俺オワタ……

「そうか、なら一回だけで勘弁してやるっ……」《ガン》

「がっふ……」

「チルノ……」

慧音さんの横薙ぎの頭突きで家の外まで吹き飛ばすチルノ…
次は、俺の番だ。

「さあ、覚悟は良いか？」

「ソフト目をお願いs「フン」《ズガゴオン》ひでぶっ!？」

気絶出来ればまだ楽であつたらう…

しかし、普段の慧音さんの頭突き、

フランドールのタツクルなどのであり得ないほどの耐久力のみ上がつていた俺は気絶すらできなかつた

そんな俺を見て慧音さんはさらに笑みを深め、

「千草、耐久力が上がったようだし、

ご褒美にもう一回の頭突きと今後に役立つ説教をやるう」

(くそつ、チルノは気絶して使えないし、妹紅さんは!?)

駄目だ、ニヤニヤしながらこつちを見てるだけだ…)

周りを見渡し、使えそうな物を探すが何も見つからない。

頼りの香林堂で買った小袋は全部部屋においてるし…

電磁加速でも逃げられそうにないし…

…オワタ

《ガン》

…今年の正月は説教明けになりそうだ。

「とでも思ったのか？」

「おい、何してるんだ？早く出発しよう」

「あ、はい」

結局説教はあまり続かなかった。

慧音さんが『まあいい、折角の正月を説教しながら迎えたくないからな』

と言うありがたいご提案を受け、頭突きを計？回食らっただけで許された

…うん、絶対『だけ』じゃないけどな。「何か言ったか？」

「いえ、なにも」

すごい眼光で睨まれた。

レミリアさんと最初に会った時の殺意並みに怖かった…

あ、ちなみに今から博麗神社に【一応】　　ここ重要！！

一応行く事にした。

…ご利益あるんだろうか？

巫女がアホみたいに強いけどアレなんだよなあ…

「千草ー、おいてくぞー？」

「あ、待ってください！」

そんな事を考えててもしょうが無く、皆で博麗神社に出発した。

《キングクリムゾン！！》

博麗神社前

「最近そればっかだな千草」

「こっちの方が楽じゃん、書く手間が省けて」

「メタいな、さすが千草メタい」

いいじゃん、こっちの方が楽なんだよby作者

「あら、こんな時間に参杯客？…ああ、初詣ね」

そんな事をしていると霊夢さんが迎えて？くれた

…って神社で大晦日なのに参杯客がないのか。

立地のせいもあるんだろうけどそれでもこのさびれ方はまずいんじゃない…

「所で干草、後どれくらいで新年だ？」

「えっと、後30秒位ですね。今から秒読みしましょうか？」

携帯電話を取り出し、時間を見る

ああ、文明の利器が時計としてしか使われないなんて元の世界では考えられないな

「じゃあ頼む」

「新年まで、20、1？、18…」

慧音さんに頼まれて秒読みカウントダウンをする。

毎年恒例のアレをやらねばいけないな

「残り、3、2、1 《ぴよん》 「 「 「 新年明けましておめでと 「！」

「 「 「

皆でお正月恒例の挨拶を言う。

そして俺は今年も最後の一瞬は地球上に居無かつたぜ！

皆もやるよね！…え、やらない？はははは、冗談きついで！

さ、そんな事は良いとして、初詣だな！何お願いするかって？

そんなの刺激にきまつてるね！出会いをください安西先生！

「さ、初詣なんだし、がつつりお賽銭入れてよね？」

「そこそこには入れときますよ」

慧音 side

さて、とりあえず今年も霊夢には世話になったし

千程は入れておくかな…

今年も皆が健康に暮らせませますように…

チルノ side

今年もサイキョーで天才な一年になりますように

《ぽいつ》《ミ》？

千草 side

さて、霊夢さんかわいそうだったし

二千程入れておこう

え〜と健康かつ天才的で刺激的な老年を過ごせませますように…

あ、後すごいもてますように！

リア充になれますように！

あとは、『そんなに願いがかなえられるか！』うおっ！？

なんださっきの？ここの神様か？

…まあいいや、刺激的な恋がしたい！でファイナルアンサー！

…のちにこの願いが波乱を巻き起こしたり起こさなかったり
することを願った本人は全く知らなかった・・・

第15話 もっつひつと寝るつとお正月 (後書き)

NGシーン 5、いや6だったかな？

初詣シーン

千草side

さて、霊夢さんかわいそうだったし

二千程入れておこう

え〜と健康かつ天才的で刺激的な老年を過ごせますように…

あ、後すごいもてますように！

リア充になれますように！

あとは、『黙れ小僧！たたきのめしてやる！』《ズドーン》

龍のようなものが現れたかと思うと一瞬で今まで見た中で

もっとも強く、そして最も逃げ場の少ない、いや、逃げ場など無い
弾幕が放たれた

「え、何この弾幕ムリゲー」

そして避ける事も出来ずにピチューンという音も立てずに
後形も無く吹き飛ばされた。

… 久々の死亡落ち、一番簡単に書けるという理由で採用されました
とわ…

第16話 霊夢「お正月だから宴会しましょうか？」 千草「なんですか！？」

前回の続きですね。

時間的には大体お賽銭を入れてお願いを願った後くらいですね。

第16話 霊夢「お正月だから宴会しましょうか？」

千草「なんですか！？」

「よし、初詣終わったし帰りましょうか」

「まあまあ、お正月だし宴会しましょうか？」

「何ですか!？」

帰ろうと皆に語りかけるといきなり霊夢さんが妙な提案を言いだす。

…うん、訳わかめ。

「まあそう言うなよ？飲み明かそうぜ!？」

「魔理沙さんいつの間!？」

「って言うか慧音さんもなに準備の手伝いしてるんですか!？」

「何を言っているんだ？宴会の場所を提供してもらったから準備くらいは手伝わなければ常識知らずというものだろう?？」

なにを言ってるんだ?という表情でこちらに首をかしげながら言うてる慧音さん。

いや、そうじゃなくて何でも宴会するつもりなんですか？

家でゆっくりするという選択肢は無いんですか？

…いや、まてよ…これってさっきの願いのもてたいが叶いそうなんじゃ…

ならば止める理由はない！私は自分のもてロードを突き進む！

「よし、俺もやりますよ！何をすればいいですか!？」

「そうね、おつまみ代わりに何か料理を作ってたね」

ほほう、料理ですか？腕が鳴るぜ！

そんな意気込みバツチリの俺を見て慧音さんが顔を真っ青にしてこちらに詰め寄ってきた

「わ、私も一緒に料理を作らせてくれ！

私も料理得意なんだ！」

「まあまあ、あんたは其処でお酒の用意してなさい」

「だ、だが千草の「家主の意見が聞けないの？」「いやそうじゃなくて！」

「はあ、もう良いから千草はあっちで料理して来て」

「やめてくれ霊夢！死にた「ちょっとO H A N A S H I I しましようか？」「そうじゃなくて〜！」

霊夢さんが慧音さんの話を遮ってさっさと行ってとばかりに手をひらひらさせる。

しょうが無い、俺の実力を見せてやるぜ！

ちなみにチルノは霊夢さんからシロップをもらってかき氷を作っていた。

（おっ、宴会かい？これは人を集めておかないとね）

少年少女S準備中………

《ワイワイワイ》

「で、なんでこんなに人が集まってるんですか？」

「なにも言っただけだよね？」

一寸しか時間は経ってないのに

宴会場を覗くといつの間にか視界の限り、人、人、人。

…おうつふ、こんなに料理作ってないよー…

どうしましょ…？どうすればいいんだろ…

こんなに博麗神社に人が来るなんて…異変か?!…ってそんな訳無いよね…

「俺もう帰っていいですか？」

「しょうが無いわね、私もいっしょにやっただけから諦めて調理に専念しなさい」

「う、はあ〜ヤダナ〜やりたくないな〜」

「だが断る!…ってなわけで行くわよ?」

「…はあ、諦めますか…」

少年少女調理中………

「ってなに入れようとしてるの!?!」

「えっ、甘いおにぎりってよくないですか?」

「よくないわよ!もういいから出て行きなさい!」

《ポイント》

「あ〜れ〜…」

ただおにぎりに砂糖を入れようとしただけなのに
なぜか台所から追い出された…

甘いおにぎりだっっておいしいのにな…

しょうが無いのでさっき台所で拝借したおにぎりを頬張りながら適

当にぶらつく…

念の為に展開している磁場の流れに注意しておこう。
さもなければ俺はフランドールの凶悪なタックルを食らう羽目になりそうだからな…（遠い目）

（あんた、苦労してるね・・・）

「それほどでもないですよ・・・（超遠い目）」

はあ、刺激的とかいったけど命は取られたくないなあ…

あれ、今俺誰と話してたんだ？

目の前には誰もいないし、一応下も向いてみたけど誰もいなかったし…

ま、いつか！宴会楽しもうぜ！酒はのま無いけどな！

前回飲んだらしいけど飲んだ記憶が無いけど

一瞬だけ目の前に弾幕が広がっていた記憶があったな…（さらに遠い目）

あれ、磁場が歪んだ？…って事はフランドールか！？

「千草　！」《キィィン》

「食つか！」《ぽふっ》

予想通りフランドールのタックルだった。

それはあほみたいな速度で迫って来ていたが来る事が分かってた為翼を生やして受け止める事が出来た。

なぜいけないか？そんなのタックル避けて其処に中級以下の妖怪が居たら

消し飛ばすからに決まっている。

俺毎回良く生きのこってるな…（遠い目）

「あはははは、千草千草！」

「フランドールさん、今回は何とか受け止められたから良かったけれど」

また手加減してなかったろ？」

「えへへ、ごめん」

いや、全く反省の色見えてないからね！

マジで危なかったのに…ま、切り替える俺！

こんな所で心が折れてたら幻想郷で生きていけないしな！

「一週間チヨイぶりだな、元気にしてたか？」

「うん！千草は！？」

「まあまあだな。さて、何して遊ぶ？」

「一応言っておくが弾幕ごっこと殺し合い意外な」

「えへ、私殺し合いなんてしないよ！」

「初めて会った時は死にそうになったんだけどな…」

「そうだったけ？ま、細かい事は気にしないで遊ぼうよ！」

狂気にのまれていた時の事は覚えてないのかな…

そっちの方が都合が良いね！主に壊した屋根のこととか…

それにあんなの覚えててもいい事無いし

そんな訳でDSとテトリスを渡す

「ん？これどうやってやるの？」《ギシギシ》

「いいか、まずは力をぬいてくれ。話はそれからだ」

フレンドールにテトリスを教える前に手加減を教えていたら
日が暮れてしまった。∴リアルに
しかもあんまり効果なかったし∴

第16話 靈夢「お正月だから宴会しましょうか？」 千草「なんですか！？」

NGシーンその7

哀れDSの巻

そんな訳でDSを渡す

「ん〜、これどうやるの？」 《バキッ》

おおっ、一瞬で壊れよった…

しかしこんな事もあるうかともう三台ももってきているのだ！

え、すぐ壊れるんじゃないか？

はは、そんな訳無いだろ？

「あ 《ビキッ》 1 HIT!

「あれ？ 《バキッ》 2 HIT!!

「おろ？ 《バキーン》 3 HIT!!!

スペルブレイク!!!

「スペルブレイクじゃないよ!」

「えへへ、ごめ〜ん」

「『ごめ〜ん』じゃないってえええええええ!!

そこフラゲ『消化乙』とか言ってるんじゃないよおおお！」

第17話 バレンタインなんてなかった…（前書き）

皆：待たせたな…

第17話、始まるよー！

第17話 バレンタインなんてなかった…

???視点

「あ…ふっ…」《ブルツ》

長い冬眠から起きた私は少し肌寒さを感じて小さく身震いをする。
…おかしいわね？春なのに肌寒いなんて…異変かしら？
…それなら私にできる事は限られてるわね。

「藍、久しぶりに起きたから温かいものが食べたいわ」

「あ、はい」

藍に温かいものを頼んであったまる事ね！

千草視点

「起きろ！起きるんだ千草！こんな寒いのに寝てたら死ぬぞ！？」

「後？0分」

「凍符【】」うおっ！？やつべー！超起きたい！運動してー！」…っ
ち」

この野郎：吹き飛ばしてやるうか…

しかし布団から既に飛び出しているのでチルノを部屋から追い出して
いつもの着物に着替える

…何回やっても着物を着るのは難しいな

それでも何とか着替えを終えて1階に下りると

慧音さんが朝ごはんを用意してくれていたので早速食べる事にした

「いただきます」

「そういえば千草、異変だぞ」

「へへ、異変ですか、だからこんなに寒いんですね」《もぐもぐ》

「そんな訳で霊夢に報告頼んだぞ」

「は〜い。…つてええええええ！？」

「ほらほら、食事中に下品だぞ。飲み込んでから話さない」

《ゴクン》「何をそんなのんきなこと言ってるんですか！？一大事
じゃないですか！」

口の中の物全て飲み込んで全力で突っ込むと慧音さんはキリッとし
た顔を作り、

「私は千草を信じているからな」《キリッ》

『はあ…汚いなあ。』 『そんなこと言われたら頑張るしかないじゃないか。』

「何括弧つけてんだよ」

「『駄目か?』」

「流行らないからね」

「『これはハヤル*、*』」

「その顔文字は流行らないし、流行らせない」

「ちえー、分かったよー。《もそもそ》ごちそうさまでした」

チルノの厳しい?指摘に口調を直して少しすねるような仕草をして、朝ごはんを掻きこんで出発の準備を整えに行く。

「…つても着替えと小袋持っただけなんだけどな…」

素早く準備を整えて2階を後にした…

「あれ、千草自転車は？」

「え！？」

しまった…ギャグパートで流せると思ってたのに！

世界はそんなに甘くは無かった…

…だがっ！まだ取り繕える！まだ何とかなる！

話符【口先の「ああ、それはあたいと戦ったときに千草が落としてたよ！」】

オワタ（^o^）ノ

…いや、まだ何とか！

「千草…」

駄目だー、オワタ、完全に俺オワタわ

「い、いやこれはですね！」

「…自転車が1台だけだとしても…？」

「なん…だと…？」

「ふふふ、ついて来るがいい。私の自転車は108式あるという」

とを見せてやる」

「カ・・・カッコイイ！」

そのままカッコワイイ状態の慧音さんについて行った

…しかし、やはりカッコワイイ状態だった・・・

「むっ、失敬な！」

「じゃ、皆さんに判断してもらいましょうー！」

例1　すごく大きいです！

「むっ、こいつを見てくれ。こいつをどう思う？」

「すごく・・・大きいです・・・」

普通の自転車の数倍の大きさの自転車を紹介された..
いや、これはまだましたったような気がする・・・

「ふふふ、その性能は時速？00kmを軽くこえ…最高高度は地面から？0mは浮くと言われるほどの性能…」

「無駄！無駄な性能ですよ！！」

ドヤ顔で言ってくるがそれを全力で否定する！

「まあまあ、少し乗ってみなさい？」

「ちよつ、押さないで…押さないでくださいって！？」

グイグイ押してくるな…どうなってんだ…いつもの慧音さんとは一味違うって訳か！？

そしてそのまま強引にサドルに座らされる

「そしてベルを鳴らしてみなさい」

「はいはい、分かりましたよ」《ぼちっ》

ジャキン（自転車の前方部から針が飛びだす音）

キュイイイイイン（そして針の先端にエネルギーが集まる音）

「一寸！？これってまさか！」

「その通り！改造自転車！【アルティメットサンダー！】発進！」

「慧音さん！キャラが崩壊してますよ！」

ガガガガガ（地下から地上に飛び出る発射口がスタンバイされる音）

ズドン！（最高時速で走り出す音）

そして一瞬で見えなくなり、慧音さんが俺の消えていった方向を見ながら

「頼んだぞ、千草（キリッ）」

「ふざけんなあああ！！！！」

圧倒的な浮遊感に包まれながら吹き飛んで行った…

第17話 バレンタインなんてなかった…（後書き）

皆…待たせたな…

NGシーン！ ゆっかりんりん！かわいいよ！ゆっかりんりん！

「あ…ふっ…」《ブルツ》

長い冬眠から起きた私は少し肌寒さを感じて小さく身震いをする。

…おかしいわね？春なのに肌寒いなんて…異変かしら？

…それなら私にできる事は限られてるわね。

「寝よ」《ぼふっ》

二度寝サイコー…！

第18話 ふ…ふとまへピチューン (前書き)

タイトル私物化計画なう

ゆっくりしていつてねー!!!

第18話 ふ…ふとまへピチューン

《ピューン》

「ああ…いつまでこいつは飛ぶんだろうか…？
ブレーキもかからない状態のままだし…」

俺こと千草は白銀の世界をすごい速度で飛んでいた。

やべっ、泣きそう…チルノとははぐれ…博麗神社と逆方向に飛び…

俺はいつたいどこへ飛んでいるんだ…？

唯一いい所と言えば妖精が弾幕を放つ前に逃げ切る事が出来るという
うことが…

どーだ！羨ましいだろ！…誰か返事してよ！

「…はあ、これはアレだな…苛めだな…」

鬱だ…超鬱だ…テンション下がるわー

「まあ、そういじけなさんな…」

「だ…誰ですか！？」

いつの間にか横には変な帽子の美人さんが飛んでいた
電磁波の乱れに…全く気付けなかった…だと…？
いや、集中してないとほぼ分からないんですけどね…

「ていうか何でこの速度について来れるんですか！？」

「いや、引っかかってるんですよ…」

「訳が分からないよ…」

さて…恒例のネタ要素も入れたし、そろそろ真面目にやりますかな？

「で、あなたは誰なんですか？」

「申し遅れました。私はレティ・ホワイトロック。冬の妖怪ですわ。」

「俺は千草って言います。…でレティさん、一体何の用ですか？」

「無論、紅魔の吸血鬼の妹を破ったというあなたの实力を見るために」

もうやだこの展開…何でこうなるんだよ…？

あれか、苛めか！？

しょうがないので理由を聞く事にしよう。

「なん」「あら、新聞では『どんな妖怪でもかかってこい』と書いていた気がするけど？」

射命丸…マジ許すまじ…

電気信号操って動けなくして電撃を死なない程度に浴びせまくってやる…

それから18歳未満は言えないくらいグロイ惨状に…くくくくく

（なんか悪い笑み浮かべてる！？え、一目見たときからすごく弱そうな人だと思ってたのに！？

いや、新聞でも言ってたようにこれが本性！？なら先手必勝！）

「冬符【フラワーザウエイ!】」

「うおっ!?!あぶねえ!?!」

至近距離でスペカは危ないって!

弾幕は大したことないけど…自転車に当たったらどうするんだよ!
?今度壊れたらなんて言われるか…

これは許されない!絶対にだ!

と言う訳で雷撃の槍を目の前に発生させて打ち込む!

ひたすらにな!弾幕を回避しつつまず1発目をうちこむ!

《バチイイ》「!?!」

雷撃で体勢が崩れた所にさらに打ち込む!

《パン》「きゃ!?!」

スperlブレイク!?!早くね!?!って言うか今のでやっと引っかかっ
てたの外れて

吹き飛んで行ったよ!?!

今まで突っ込まなかつたけどあの距離でどうやって避けてたの!?!
スペカだよ!?!これが俺の力!?!?的なあれですか!?!なにそれ胸熱!

「さて、行きますかね!?!」

今回はもうちょっとだけ続くんじゃない?!

「俺のロードには加速しかない！」

何言ってるんだろう…俺？

元ネタなど無い！…よね？

って言うか正確に言うと俺の自転車に…けどな…

「おっ！千草何やってんの！？」

「チルノ、流石にお前は規格外になり過ぎだろ…」

空中を優雅に！優雅！あくまで言おう優雅に！飛んでいたら

変身しているチルノが俺の【アルティメットサンダー（笑）】と並
行して飛んでいた

マックスの半分位とはいえ…追いついてくんな…速すぎんだろ。

でもな…冬だからって常時変身は無い！

なぜかって？そいうのはロマンがいるんだよ！

ロマンのない変身なんてお兄さんは認めません！絶対にだ！

「まあいいや、チルノさんや。ちょっとこの自転車止めておくれ」

「いいよ。凍符【p】おk、お前には頼まん」えー、なんでー？」

「このまま地面に突っ込んだ方が被害が少なそうだからだ！」

「凍らせて強制的に落とすだけなのに！」

「死ぬわ！」

こいつ…こんな寒い中で凍らされたらギャグパートにしなければなら死ぬって！

俺普通に高校生やってたんだぞ！マジで死ぬわ！

「やってみなきゃ分かんないって！」

「いっくよー！凍符【パーフェクトフリーズ Lunatic！】」《バババババ》

「危ない！危ないって！くそっやってやんよ！」《バチイ》

チルノのスペカに自転車に乗りながら応戦する。

…正直かなりキツイ。だって片手はハンドルに添えてなかったら吹き飛びそうになる。

そんな速度で弾幕ごっこやってるとかまじないわ…

しかも、キツイ原因はそれだけじゃなくて…

「はっはー！最高にハイって奴だあああ！」

(うぜええええええええええ！！！！)

チルノは氷精だから寒いところの方が強くなるのは良いとして

このウザさは異常だろ…孤独と文々。新聞でのイライラをさらに加速させるううう！

「ほらほら、そこ危ないわよ！」

「くそ！ならば奥の手！」

小袋から黒い粉を振りまく。

「煙幕？この期に及んでそんなつまらない物を！？」

「つまらないかどうかはこれを見てから判断してもらおうか！？」

磁力を発生させて黒い粉を操り剣の形にする。

そう、この黒い粉は

「砂鉄剣！」《キイイイイ》

「この間合いで剣なんか意味無いわね！」《ババババ》

俺の砂鉄剣のリーチでは届かないと思ったチルノは近づかせまいと弾幕をさらに濃くする。

しかし、その発想が既に敗北を決定的にしている！

その場で大きく砂鉄剣を振りかぶり…

「伸びた！？」

「もらった！」

「っ凍りなさい！」

チルノが砂鉄剣を掴み、凍らせる。

あいつ…削れた先から再生して掴みやがった！

…でもな

「…圧縮式【超電磁砲】」レールガン《バキイイイイイン》

バカみたいな速度のコインがチルノに突き刺さった。
…俺の勝ちだ。

第18話 ふ…ふとまへピチューン（後書き）

東方妖妖夢 一面ボス交代のお知らせ…

レティエエエ

NGシーン またもや死亡落ち！

空中を優雅に！優雅！あくまで言おう優雅に！飛んでいたら
変身しているチルノが俺の【アルティメットサンダー（笑）】と並
行して飛んでいた

「（笑）とかいうな！」

「慧音さん!？」

「頭符【百日間の地獄!】」

慧音さんのスペカ宣告と同時に周りの景色の色が消える
いや、正確には白黒の2色だけになった…

そして俺はいつの間にか十字架に縛り付けられていた…

「ここから先、1000年分の時間…お前に頭突きを加え続ける!」

「それどこの万華鏡車輪眼!？」

「1回目!」《ゴーン》

「いつがああああ!!」

「もう一発!」《ズガン》

「ブバアアア!」

「まだまだあ!」・・・

アタマガワレタ……

第1?話 ちええええええん!!!! (前書き)

今回は長いと思うよ!

皆ゆっくり読んでね!

第1?話 ちえええええん!!!!!!

「うん、はっ！」

「おっ、おきたな？」

チルノがおきたようなので腰を上げる。
そしてチルノに手をのばして声をかける。

「立てるか？」

「まあね」

チルノはそのまま俺の手を取り立ちあがった。
うん、素直が一番だね。

そしてそのまま出発した…。

あ、ちなみに自転車は羽を広げて空気抵抗で止まったから！『後付け設定乙』はい、完全に後付けです
誠に申し訳ありませんでした。

ブレーキが壊れているので羽で速度を微調整しつつ進んでいると

「なあチルノ。」

「なに？」

「ここは…どこだ？」

「あたいが聞きたいわよ…」

さつきまでいた白銀の世界からいきなり屋敷みたいなのが広がる光景に…

あまりの衝撃にチルノに質問したが分からないようだ。どうしようか？どうしようもなくね…泣きそう…

「あら、人間が迷い込んできたわ？」

ふてくされながら自転車をこいでいると2足歩行の2本尾の猫が現れた。

…ん？2足歩行だから妖怪か？2本尾と言うことは…

「猫又？」

「正解！よく勉強してるねお兄さん！澄Pを2点プレゼント！」

「澄P？集めるとなにがあるんだ？」

「10点集めると私の頭をなでる事が出来るよ！」

いらね(´、´)シ 〓 澄P

さて、覚えてた顔文字使ってテンション上げた所で本題に移ろうか？

「どっやったらこっから出れるんだ？」

「ここはマヨヒガ…一度迷い込んだら二度と出れないよ？」

「ええええええ？」

「どうしましょ？しょうがない…」

「ここに家を建てよう！」

「は？ここは私のアジトよ、さっさと出て行ってくれる？」

「『一度迷い込んだら二度と出られない』はどうしたんだよ？」

「そんな設定どこかに消えたわ！」

「超適当じゃねーか！」

そんなに適当で大丈夫か？大丈夫じゃない、問題だ。

そしてそのまま弾幕ごっこに入ろうとしていると、横から

『ちええええええええん！！』

「あ、ご飯だから帰るね。そのまますすぐ進んで言ったら多分出られるから。ばいばーい」

ちえんは にげだした

「これでいいのか？」

「いいんじゃない?」

そのまま帰っすぐマヨロがから出ていった。

【あえて言っておく】stage clear!?

「……」

いつの間にかマヨヒガから出てきたと思っただら今度は魔法の森に出てきていた。

しかし、寒い。チルノが横に居るのもあるんだらうけど夏服で来たのが間違いだっただけ…

「情けないわね！この程度の冷気が何よ！」

「お前は氷精だからだろ！俺人間！死ぬ！この寒さは人間に優しくないって！」

《ガタガタ》死ぬ！マジで死にそう…

誰か…温かい毛布を…布団を…ダブルベッドをおおおお！！

「寒い…寒い…誰かダブルウォーターベッドを…」

「ドンドン願望がでかくなってわよ？謙虚に行こうよ！」

「謙虚とか言ってる場合じゃねえ！寒い！温かさプリーズ！」

死ぬな…この寒さは死ぬ…隣は絶対零度、周りはマイナス？…

＼（＾o＾）／

「うふふふふふふ…」

「千草が壊れた！誰か！誰か助けて！」

「なによ、人の家の前でうるさいわね…」

「うふふふ、…てあなたは誰ですか？」

「…アリス、アリス・マーガトロイドよ。あなたは？」

「俺は千草！マーガロイドさんよろしく！」

「千草！間違ってるよ！マーガリンに失礼でしょ！」

どうもチルノによると間違ってたらしい。

すまぬマシンガン乱射魔さん。

それにしても寒い…さっきからずっとしつこく言わないといけないくらいさむい…

テンションを無理やりにも上げていかないといけない位寒い…

《ドオン》

「危な！危ないっす！」

そんな事を考えているとマジキチ三平さんがこちらに人形を投げつけてきた。

そして投げつけた人形が爆発してきやがる。マジ勘弁さんマジ勘弁！

「また名前をまちがえるなあああ！！！」《ドドドド》

「くそっ！？何だっというんだ！こんなのやめようよ、アリス・目がトロロンさん！」

「…闇符【霧の倫敦人形】」

「スペカ！？なんでそんなものまで持ち出してくるんですか！？アリス・マッドサイエンティストさん！」

《ブチン》

「…逝きなさい」

《ヒュヒュヒュヒュドドドドーン》

なぜかこちらの停戦要求にも耳を貸さずにスペカまで使ってくるアリス・ま（ry

一体何が目的なんだ!?

…まあそんな事はどうでもいい…まずはそのふざけた人形からブチ殺す! 『そにぶ』です! 皆覚えてね! てな訳で

「チルノ!」

「あいよ!」 《カキイイイイン》

爆発する前に全てチルノに凍らせてもらう。

あら俺超楽チン。…これは全部チルノに任せておこつ。

「チルノガンバ!」

「逃げんな!凍らせるわよ!」

「えー、電気がモツタイナイヨー」

「うるさい!さっさと戦いなさい!」

「俺絶対ヤルコトナイヨー、足手まといダヨー、ヤメトキナヨー」

「凍符【p】うおおおお!レールガン!」…チッ」

《バリイン》「…破られた…？」

怖い…怖いっすアリス（ryさん。主に目が怖いっす…
あんな怖いのには友達とかいるんだらうか？

「…っ！呪詛【魔採光の蓬莱人形！】」

さらにア（ryさんがスペカを放ってくる。

弾幕が半端ねえ！…と言うとでも思ったか？こんなのEXチルノの
弾幕に比べれば！

てな訳で交渉スタート！

「アリスさん！」

「……………」

ワアオ、無視された。畜生！何が何でも話しをつけてやる！
磁力で足の裏ををサドルに固定してコインを真上に弾き…

「超電磁砲！」「《ズドン》」

《バキイイイイン》

「…一撃！？」

すいません、一撃じゃないです…

今までずっとチルノが地味に攻撃してました。

さて、ひとまず落ちついてもらった所で交渉コンテニューだぜ！

「アリスさん！」

「……………何かしら？」

きた！ついに会話出来るようになった！これで勝つる！
…さて、まずは落ちついて…

「俺のオオオ勝ちだああああ！」

馬鹿ああああ！俺のバカ！おバカさん！何！？何なの！？
何高らかに勝利の雄たけび上げてるんですかああ！？
アレか！宇宙意思か！？宇宙意思が俺を邪魔したのか！？
こ、ここは何とか取り繕って…

「い、イヤ、さっきの「よく言った千草！あんな奴倒しちまおうぜ
！」チルノオオオ！」

「…ふふふ、ここまでこけにされたのは初めてよ…
私の全力で相手をしてあげるわ…呪詛【首吊り蓬莱人形】」

キヤアアアアキレタアアアアアアア！！！！

話し合いは不可能の模様！総員退避！退避いいいい！！
するわけには行きませんよねえ…ハア…

しょうがないのでまたサドルに足の裏を固定させ、レールガンの体
勢に入る。

「超…「…させないわ！」《パン》危な！？」

レールガン撃とうとした所で弾幕に邪魔される。

…この状況でレールガンは無理か。

ならば奥の手！砂鉄を袋から取り出して鞭の形に変形させる。

そしてそのまま周りの人形を切り刻む。

『おお、酷い酷い』

…むっ、いくらなんでも簡単すぎだな…

何かあるのか？…考えすぎだろ！はっはっはっは！

「…それはフラグね」《ヒュイン》

「ぐ！？」

体が動かない！？これはもしや…縛りか！？

SMプレイはあんまり…。ってふざけてる場合じゃないな。
砂鉄で切れるかな？

「…言うておくけど、その糸には魔力が通してあるから
物理的には切る事は不可能よ？」

「ばれてましたか…」

物理的に切る事が不可能なら…

「焼き切る！どりゃあああ！！」《バチ》

「電撃で魔力に干渉した！？」

なんか叫んでいるけどとりあえず…

「俺の…勝ちだ」《ズゴン》

音速の3倍の速度のコインがアリスさんの横を突き抜け、その衝撃でアリスさんを吹き飛ばした。

「え、アレ大丈夫なの？」

「……《プイッ》」

「何で顔そらすの千草!？」

「アリスさん大丈夫ですかあああ!！」

アリスさんの吹き飛んで行った方に全力で自転車を走らせた。

「うーん、あら、あなたたちはなぜここに？」

「よかった、気がつきましたね。ずっと起きなかったからマジで死んだかと…」

「いや、そんな簡単に死なないから！…っでずっと居たの？」

「まあ、約束の方を守ってもらったためにもね？」

「約束…？そんなのしたかしら…？」

首をかしげるアリスさん。

むっ、中々の腕だがその程度で俺は萌殺せんぞ！

…最近俺のキャラが不安定な気がする…

「ま、今決めたんですけどね！」

「何それ怖い…、意味フすぎて…逆に怖い…」

ま、俺もそんな事言われたら全力で突っ込むけどな！

そんな事もスルーして本題に入る。

「さて、じゃあ約束の件ですが…」

「してない！約束してないから！」

「ふふふ、負けた方は何を言われても従ってもらわなくちゃね？」

「な、何ですって！？」

(あれ、このパターンって)

全力のいい顔で理不尽を押し通す。

ふふふ、アリスさん。理不尽だろうがここは通させてもらおうぜ！
チルノも多分感じてるだろうけど…

「では、アリス・マーガレットさん。俺と友達になってもらいましたよ。よろしく。」

「マーガトロイドだっていつてるでしょ！？…って友達？」

何でだろう？毎回友達になってもらおうとしたら皆こんな顔してくるんだらう？

魔理沙さんの『一度全力で戦ったら友達』法則が間違ってるんだらうか？

俺…だまされた！？

そんな事を考えているとアリスさんはポカーンって顔をしてやがった。

毎回恥ずかしくなるぜ畜生！

てな訳でごり押し開始！

「ほほう、いやならもっとアレな感じな物でもいいんですよ？」

手をワキワキさせながら近づく。

ま、こんだけごり押ししておけば大丈夫だろう。

「分かったわ、おとなしく友達になってあげる」

「…素直じゃないなあ」

「何か言った？」

「イエナニモ……」

この距離で爆弾人形は勘弁してほしい。

中腰になって、倒れているアリスさんに手をのばして

「では改めて。俺と友達になってください。

アリス・マーガトロイドさん」

「喜んで、千草。」

アリスさんの手をとって立ち上がらせた。

s t a g e c l e a r !

第1?話 ちえええええん!!!! (後書き)

NGシーン 台無しだよ!

中腰になって、倒れているアリスさんに手をのばして

「では改めて。俺と友達になってください。

アリス・マジシャンさん」

「台無しだよ! 雅符【春の京人形!】」 《ドドドドド》

「零距离は危ないですってええええ!!」 《ヒューン》

人形の弾幕に吹き飛ばされてどこかに飛んで行った。

台無しにしてしまった結果がこれだよ!

第20話 ミッションを開始する。(前書き)

もう片方の連載していた』とある科学の速度支配』が本編終了しました。

たくさんの方々、応援ありがとうございました。

これからは番外編やっていくと思いますので応援よろです！

そしてこれからも『レベル5で幻想入り』の応援もよろしく願います。

…ミスで違う方に投稿してました。
すみませんでした。

第20話 ミッションを開始する。

アリスさんとの戦闘の後、「そんな格好で寒くない？友達のよしみでマフラーでも編んであげるわ。」

か、勘違いしないでよね！友達のよしみで編んであげるだけなんだからね！」

と言われて今アリスさんの家に居るんだが、

「チルノさん、今とても寒いのですが…」

「えー、遊ぼうよー？」

なぜかこちらに体を摺り寄せるチルノ。

何か幼くなつてませんか、あなた？

まさか冬になつて力が強くなっていく分、ドンドン頭が弱く！？

…いつもなら胸が当たってるゼヒヤッフィー！的な展開なんだけど

チルノだしなあ…、あと冷たい、超冷たい、感覚が無くなってきた…

「ねえ、ちよつとうるさいんだけど干草…？」

「俺のせい！？俺のせいですか！？」

「あそぼーよー？」

なぜか怒り心頭のアリスさん。そして戸惑う俺。空気の読めないチルノ。

…これ、俺への苛めですか？

俺が何をしたと！？ちよつとマジふざけんな！

アレか！初詣の時の願い事への当てつけか？

いつまで引つ張るんだよ！

俺が博麗神社の神様に八つ当たりしていると、

「決めた！あんたたち異変解決しに行ってるのにイチャイチャしてるから

あたしが見張ってあげるわ！」

「どうしてそうなるんですか!？」

チルノとイチャイチャ!？あり得んね！

だって感覚無いからイチャイチャとか不可能だから！

しかし、そんな俺の意見は

「うるさい！絶対に付いて行くからね！」

「どうしてこうなった…?」

全く状況が飲み込めないまま立ちつくす俺。
どうなってんだ?これ?

「さあ行くわよ!」

「マフラーは!？」

「何よ、図々しいわね。上海、持ってきて

そう言ってアリスさんが指をチヨチヨイと動かすと小型の人形がマフラーを待ってきてくれた。

「しかし、本当にすごいですね、それ」

「へ、そ、そんな事無いわよ」

素直に感想を言うとなぜかテンパってしまっアリスさん。
褒められる事に慣れてないんだろっか？

友達いないって思ったのにすら反応したし…よし！頑張ろっ！

「さあ出発しましょうー！」

「何で泣いてるの？まあいいわ行きましょう」

涙を拭いてアリスさんの家を後にした。

「うおおお、あつたけー！」

「どうよ！これがあたしの全力よ！」

「ハンパネエ！まじハンパネエっす！」

今までと段違いの暖かさに思わず叫ぶ。

首元だけなのにこの差！

ハンパネエ！まじハンパネエ！これは叫ばざるを得ない！

「いつたい何で!?!なんでこんなに暖かいんですか!?!」

「ふふふ、極限まで密度を高める事により空気を入らせなくしてさらに魔力を糸に練りこんだり「兄貴達がレスリングを始めたり」なんやかんやで…」

「やっちゃまった…話長げえ…後チルノ、お前途中で割り込んでくんな!無視したい…でもなんか自慢げに身振り手振りしてくるんだぜ?なんか無視したら可愛そうじゃん!…でも」

「さらに魔力をカクカクシカジカ」 「ほうほう」

「そしてまず材料から云々」 「なるほど」

「さらにさらに」 ry 「そうなんですか?」

うん、長い!

…どうでしょう?長い…マジで長い…何時まで話すんだろ??

適当に相槌打ちながら自転車をこぎ続ける。

そして果てしなく足がだるい…バイトで鍛えた【黄金の両足WWW】が悲鳴を揚げている。

流石に何時間もこぎ続けていれば足も痛くなるぞ…

「さ」 ry 「な」 ry

「あ、何か来たよ!」

「春ですよ!…!…!」

「「声でか!」「」

「営業の基本は声ですよ!」

「「そして悟された!?!」「」

「ではさようなら」

「「帰った!?!」「」

「カツコイイ!」

チルノの指さした方を見ると其処には見た事のない格好の妖精がいていきなり叫んで悟して帰っていった。：何だっただんだろっ? 春ですよーっっていますごく冬みたいな天候なんですけどね? そして微妙なテンションになる俺とアリスさん。(チルノはさっきの妖精を追いかけて行った)

…とにかく会話しなくては!

「アリスさん! とりあえずどこに行きましょうか!?!」

《ビクツ》「そっ、そうね…。(いきなり大きな声出すからびっくりしたじゃない…)」

まずは…《キュピーン》(私の勘が言っている、地下に行けと!)
千草!」

「…なるほど! ありがとっございますリリーさん!」

「いえいえ、では気をつけてください」

「ありがとうございました。…アリスさん！元凶は…ってアリスさん？何でスペカを構えるんですか？「呪詛【首つり蓬莱人形】」アリスさん？ちよっ！？危な！やめっ！？」

リリーさんに春の集まっている場所を聞いてアリスさんに報告しようとしたのに

なぜかスペカを使ってまで攻撃してくる。…なぜ？俺なんか悪い事しましたっけ？

ちよっと泣きそうなんですけど。

《ピッピッバリイン》「…っち」

『…っち』って！『っち』って言いましたよ！？

仮にも友達を殺そうとして失敗したら『…っち』ですよ！？

こいつ…人間じゃねえ…魔法使いだ…悪魔だ…アリスさん曰く
種族：魔法使い、にはこだわりがあるらしい。

「で、結局元凶はどこに居たの？」

頬を膨らませながら元凶の居場所を聞いてくるアリスさん。

畜生！可愛いな！

「このまま進んでいけばいいそうですよ。」

「…地下じゃなかったのね…」（実は私もそう思ってたのよ！）

「逆です。アリスさん考えてる事とセリフが逆です」

「っ！っ、うるさい！さっさと行くわよ！」

「アリスさん！？そんなに早く飛んだら追いつけませんから！もう少しスピード緩めてください！」

猛スピードで飛ぶアリスさん。

…ふふふ、足が震えるぜ。（疲労的な意味で）

か、勘違いしない様に書いてあげたんだからありがたく思いなさいよ！（オロロロロ）

少女&少年移動中……………

『くっ、騒葬【ステージジャンリバーサイド！】』

『無駄無駄あ！恋符【ノンディレクショナルレーザー】』

「派手にやってますねえ」

「そつね、目が痛くなりそう…」

途中で何とかなだめたアリスさんとゆっくりと進んでいると
魔理沙さんと、色分けの違う赤、黒、白の服を着た三人が弾幕ごっ
こをしていた。

けっこう白熱しているためまだこちらに気づいていない。

「…アリスさん」

「…分かってるわ。気付かれない様にゆっくりでいて
大胆な潜入術なら既に習得済みよ」

不敵に微笑みながら何かを取り出すアリスさん。
それに注目していると……

「ダン…ボール…?」

「早くかぶりなさい。見つかるわよ?」

いや、ドヤ顔で言われても…

若干困惑しつつもとりあえずかぶる俺。
そしてその近くでは激しい弾幕ごっこ。

…シユール。

「何してるの?早く行くわよ!」

そして全力で潜入しようとするアリスさん。

シユールってまじで使い勝手いいね!

とりあえずついていく事に……

「魔理沙さん…何でいきなり打ち込むんですか!？」

「私を囮にして先を越そうなんて許さないぜ！」

「…ナンノコトカナー、ワカンナイナー」

「…恋符【マス」うおおおおお！いでよ砂鉄ううう！」「やる気になつたな！」

マスタースパークを撃たれる前に砂鉄で攻撃して回避させてバランスを崩させる。

あの、やる気にとかなってないんすけど…

「行くぜ！恋符【ノンディクシヨナルレーザー！】」

「危ないから！危ないから一寸待ってください！」

叫びながらもとりあえず観察してみよう。

三本のレーザーが魔理沙さんの周りを回りながら発射されるスペカのようなのだ。

それならばと、羽を前面に突き出して光線をそらす。
今にも逃げだしたいけど逃げたら後ろで

「むむむ、中々手ごわいわね。ならこれをこつやつてこつしてこつすれば…」

とかやってるアリスさんに直撃しちゃうし…
でもこのままだと俺の電池が切れるし…
ならば一気に仕掛ける！

「おらあー!!」《パァン》

「!邪魔だぜ!?!」

レーザーが離れた瞬間に羽を核散させて魔理沙さんの視界を阻害する。

そしてその間にスペカを取り出し宣告する。

「圧縮式【超電磁砲!】」
レールガン

「恋符【マスタースパーク!】」

さつき拡散させた羽の電気も合わせて空気中の電磁波を吸収し右手に集めてコインを打ち出す。

決まった!第三部完!

「いつけええええ!」

グングン魔理沙さんのマスパを押し返している俺のレールガン! よし!完全にかつた!フハハハハ!

「私のレーザーは一発だけじゃない!恋符【ダブルスパーク!】」
《ドォン》

魔理沙さんがスペカを新たに構えて宣告する。

それと同時にもう一発マスパが発射され、俺のレールガンを相殺させる。

くっ、一枚だけのスペカが破られた…って事は…

「俺の負けですね…」

「ふふふ、まあ相手が悪かったな！」

くっそー…二発ってひどいぜ…先に言っただけよ…。

「さて結界もあいたみたいだし、さっさと侵入しようぜ？」

「くそう、もうちょっとだったのに…」

どうやら弾幕ごっこをしているうちに

アリスさんが結界を開けたようなのでそのまま入る事に…
スペカもつと作らないとな…

「くっって！待ちなさいよ！」

「む、一体何んですか？」

「何かしらじゃないわよ！」

「無視しないでよ！」

「相手してくれると嬉しいんだが…」

どうも相手をしてほしいらしい…
全くやれやれだぜ…

(どうします?)

(一対一でいいんじゃないか?)

(じゃ、あたしがあの赤いの担当するわ)

(それなら、俺白い人で)

(私はあまりの黒か…)

担当が決まったので早速相手をすることに

「さあ、死に行く準備は整ったかしら！」

((((死亡フラグだ!)))

何やら赤い服の服の人が全力で死亡フラグ建てて来た。これには敵味方関係なく心の中で突っ込みを入れる。そしてそれぞれの配置に着く。

アリスさんは赤(死亡フラグ)に

俺は白い人に

魔理沙さんは黒の前に立ち、それぞれが掛け声を叫ぶ。

「デュエル決闘!」「」「」「」

第20話 ミッションを開始する。(後書き)

7/29スペカ名変更

NGシーン 魔理沙さんとの弾幕ごっこ

「行くぜ！恋符【ノンディクショナルレーザー！】」

「あぶね！」

三方向に分かれる光線をギリギリでかわす。

…と、

《バァン》「ゲフ！」

「アリスさああああん！！！」

光線を後ろからモロに食らって
下に落ちていくアリスさん。

「…なんか悪い…」

そしてその場には微妙なムードが流れた…

第21話 これが結束の力だ！（前書き）

これが結束の力だ！（笑）

第21話 これが結束の力だ！

アリス視点

「くくく、我が漆黒の鍵盤を食らい。朽ち果てるがよい…」

「はあ…選択間違えたかしら…？」

何でこいつ選んじやっただろう？

でもとりあえず油断せずに構えておこう。

油断したら死亡フラグって皆言ってたし。

「ビビってちびらないでね！騒符【ファントムディニング】！」

(^ ^)

大量の音波が目の前に出現し、あっという間に私は被弾した…

…みたいな事は無かった。

言ってた割には弾の量も大きさも早さも大したことないし、これは…畏…？

《ピッピッピバリイイン》

とりあえずしつかりと弾幕を見ながら避けているとスペルブレイクしたようだ。

あれ、大したこと無い！？もしかして…口だけなのかしら…？

「ふふふ、中々やるな…、だがこれはどうかな？騒符【ライブポルターガイスト】！」

(^ ^ ビキ)

だ、駄目よアリス！ここで切れちゃ駄目！
落ちついて素数を数えるのよ！

2・3・5・7・？《ピチチューン》

しまった…油断していたら被弾してしちゃった…

でも、全く痛くないわね…本当に大したことないよ」あはははは！
強すぎてごめんねー！？」

(^ ^ ビキビキ)

「お願いだからビビって段ボールに隠れないでね！？」

(、・カツ！)

ありすは がまんのげんかいだ！

「騒符「…無駄！」い、糸！？」

魔力を通した糸で赤を亀甲縛りにする。

決してイライラしていたので縛ったのではない。
そんな訳がない。そしてそのまま赤に近づき…

「…む…「む？」無駄無駄無駄無駄あ！」《ガスガスガス》

「ガフツ!？」

「無駄無駄無駄無駄無駄!」《ゴンガン》

力の限り赤を殴り続ける。

決してイライラしているから殴っているのではない。

これは私の『殴符』【あなたが無くまで殴るのをやめない!】である。ちなみに泣くではなく無く、である。

しかし殴り続けているとそのうち赤のメッキがはがれてきたようです。謝り倒してくる。

「痛い痛い痛い!降参!降参だから勘弁して!」

「…っち、しょうがないわね。じゃ、ばいばい」

「え、私このまま!?!せめてほどいてエエエエ!!--」

そんなの知らない。

少し頭を冷やしてもらったためにそのままにしておいた。

いや、全然怒ってないわよ。馬鹿にされた仕返しとかじゃないんだからね!

アリスWIN!

魔理沙視点

魔理沙だぜ！

さっきの選択会議で決定したように私は黒い奴と戦うようになったんだが…

「む、東の方から電波が…」

とか言いながら西に飛んで行っちゃった。

これはどうすればいいんだろうか？

不完全燃焼だぜ！いらいらするぜ！てな訳で八つ当たりでマスパだぜ！

《ドオオオオン！》

…ふう、なんか一発やったらどうでもよくなったぜ。

魔理沙不戦勝

千草視点

さて、例により俺は白い人と戦うことになったんだが…

「うひゃひゃひゃひゃひゃ！」

「ふふふ、いい感じに飲まれてるわね」

くっwwww!？頭では分かっているのになぜかあのヴァイオリンの音色を聴いていると笑いが止まらないんだwww。特に面白くないのにどうしてwww!？

「ちなみに私の演奏を聴いた者は笑わずにはいられないのよ…?」

「何それ怖いwww」

「さて、このままゆっくり倒してあげるわ…?」

「くw、wまwずwいw。wいwきwがwでwきwなwいw」

息が出来ないせいで演算も出来ないwww。

そんな俺にゆっくりと近づくと近く白い人www。

くっ!?!どうすればwww

「これで終わりよ。騒符トオオオオオオオなんてええええ!!」

「えw—w体w何wがw?w」

目の前に迫って来ていた白い人がいきなり極太光線によって吹き飛ばされたwww。

極太光線つてことはwww!?

光線の飛んできた方向をみると其処には魔理沙さんがスッキリした顔でたたずんでいたwww

さすがやでwww流石魔理沙さんやでwww

そのまま勢いで魔理沙さんの方に自転車をこいでいくwww

「魔理沙さああああんwww!」

「なんで満面の笑みで突っ込んでくるんだ!？」 《ボシユウウ》

「痛ったああああ!！」

激痛が!体が燃えるような痛みがああ!!

…いや、実際に燃えてるんですけどね。

…って草取れてる!さっきので燃え尽きたのか!よっしゃ!これで
勝つる!

《ドドドドドドドド》

なんだこのプレッシャーは…!?!?
後ろ!?!?

「…千草?今なら半殺しで済ませてあげるから大人しくしてなさい
?」 《ゴゴゴゴゴゴ》

「あ、アリスさん…?何で殺意の波動に目覚めてるんですか?」

あ、あれ?俺何かしましたか?

…まずい。心当たりがあり過ぎて困る。

と、とりあえず何とか逃げないと… 《グツ》

あ、あれ!?!動けない!?!魔力系か!?!なら電気で…

「言うておくけど、それはさっきの糸の5倍堅くなってるから
さっき位の電撃じゃビクともしないわよ?」

「あゝ、なんだ、ドンマイ千草。」

「あ、諦めないでくださいよ…。」

駄目だ。どうあがいても助かる方法がない。
せ、せめてもの抵抗に！

「電撃！」《ビリビリ》

「きかないわね」《ぺちん》

「！？」

え、ちよっ！？電撃が弾かれた！？素手で！？
もう駄目だぁ…おしまいだぁ。
では最後に…

「優しく…して…」…《シュン》……「げはあああ！！」

千草さんの意識がログアウトしました。

第21話 これが結束の力だ！（後書き）

千草の心当たり

- 1・アリスさんの名前をまちがえ続けた。
- 2・魔理沙さんに駆け寄っていった。（アリスさんはきつと魔理沙さんの貞操を守りに行った）
- 3・理由なんてなくても殺される。

第22話 謎の美少女剣士現る！byとある半人半霊の庭師（前書き）

タイトルで誰が出てくるか丸わかりだよ兄貴！

いや、兄貴書いたんじゃないけどね！

第22話 謎の美少女剣士現る！byとある半人半霊の庭師

…「どこに行っても無駄だよ？」

「うるせえ！これでも食らえ！」《バチ》

「痛いなあ」

「っ！どうなってやがる!？」

なぜか今俺はどこかの学校で包丁をもった幼女に追いかけてい
る。

さっきまで結界の前に居たような気がするんだが？

もちろん、俺も窓でも割って逃げ出そうとしたんですが、全力の超
電磁砲を当ててもびくともしない。

それにあの幼女全力の超電磁砲で吹き飛ばしてもすぐ復活して包丁
で襲ってきやがる。

「ほらほら〜逃げないとあなたが最後の一人だよ？」

「何の事だよ！そしてなんで俺は追いかけてらんだよ!」

「…命乞い？みっともないよ？」

「ふざけんなああ!」《バアアアン》《コテ》

嘘だろ!?!このタイミングで電池切れ!?!まてっ!?!まずは冷静に
助かる道を…

俺（電池切れ、動けない） 幼女（包丁持ち、後3m位の距離）

…俺オワタ＼（＾o＾）／

そのままゆっくりぺたぺたと近づく幼女。

その手にはしっかり包丁が握られていて、そしてその包丁をゆっくりと振りあげて…

「アツーーーーー！！！」

《ビクツ》 「な、何だ！？なんでいきなり叫ぶんだ！？」

「魔理沙さん！？幼女は！？包丁は！？学校は！？」

身を思い切り起こして叫ぶと斜め後ろ辺りには正座の魔理沙さんが

いた。

…ん？魔理沙さんがこのポジションで俺がその横のいるってことは…

「うあああああ！畜生！畜生！何で！何で俺は叫んだんだ！…

くそがつ！うあああああ！…」《ドンドン》

思わずその場にうずくまり地面を叩く。

膝枕じゃないか！ふざけんな！全男の夢があああ！！

目から全男の夢が…。いや、ここでまた寝込めばまだ！

「ぐふっ」《フラツ》

「ど、どうしたんだ！？いつたい何が！」

《ボソツ》「膝枕してくれたら体調が良くなる気がする」

「…よし、分かった」

キタツ！これで勝つる！もうこれ最終回でいいや！

最終回以外にあり得ないだろ！男の夢達成！ヒヤッホオオオオ！！！！

あれ、なんだ！？このプレッシャーは！？…いや、このプレッシャ

ーを…俺は知っている！

これは…

「…千草？」

「…アリスさん。一つだけ言わせてください。」

「…何かしら？」

さて、スーパーシンキングタイムだ！
まず心当たりから並べよう。

- 1・魔理沙さんの貞操の危険。
- 2・自分：調子乗ってました。
- 3・前回の続き。
- 4・理由なんてなかった…

この間、わずか3秒。

そして土下座まで0，1秒。

「すみませんでしたあああああ！！！」

「…許さない。来世まで殺しつくす。」

だめだ。頭の中で処刑用BGMが流れ続けている。

…だけど！ここで諦められるわけがない！男の夢の為に！

「ア「呪詛【首吊り蓬萊人形 Lunatic】」…何も言っていないです」

《ピピピピチューーーーーーン》

どうしてこうなっちゃたのかな…？

「っは！死んでたまるか！」

「おお！息を吹き返した！」

今度は体はそのままに目だけ開けたが魔理沙さんの膝枕はなかった。仕方ない。仕方なかったんだ。だってこれ以上やったら…即刻死に直結する。

…だから、切り替えよう。

今いる場所は…階段？えらく長いな。

自転車もここにあるって事は2人が運んでくれたのかな？

ならお礼くらいは言ってもバチは当たらないよね？

「ありがとうございます魔理沙さん」

「礼には及ばないぜ」

「ところでアリスさんは一体どこに？」

俺がボソツと尋ねると魔理沙さんは呆れたように

「お前も物好きだなあ。そんなにあいつのことが気になるのか？」

と返してきた。

気になる…か。確かに殺されそうになる位なら機嫌をでも取ったほうがいいのかな？

でも、友達の間だし、そう言うのはあんまり良くないよね！
てな訳で自然体でいることでFA！

よし、魔理沙さんへの返事は決定したぜ！

「友達ですから！」

完璧！当たり前障りのない完璧な答え方！

みんなもまねしていいよ！

それを聞いた魔理沙さんはなぜか大きくため息を吐きながら門の内側のほうを指差して答えた。

「『さつさと異変解決してくる。あなた達はまってて』だってさ。
完全に死亡フラグだからさつさと行ってやろうぜ？」

アリスさんエ…。さつさと行けばなんとかなるさ！

あの人がそう簡単にやられるわけないさ！

でもさつさと行かないと干嘛やかんやで俺の命が危ない気がするぜ！

てな訳で少年少女移動中……………

「長い！長いでやんす魔理沙君！」

「お前どっからその眼鏡と服取り出したんだ？」

む、いまいちネタが通じないか？

やはり幻想卿に一気にゲームを流行らせないと…

でも壊れてるゲーム以外はもうないし、なんとか直せる人とかいないかな？

「で、もう着いたわけだが…」

「早！流石ご都合展開！楽でいいね！」

いつの間にか門の前まで着いたようだ。

作者の表現力不足のおかげだね。

ありがとう作者！

「門は飛び越えるものだけ？」

「分かってますって」

そのまま門を飛び越えて館に潜入…

「ふっ！」《スパン》

「見つかった!？」

門の上を通りぬけようとしたところ辺りで斬撃のような弾幕が襲いかかる。

やはり段ボールを被ったのが駄目だったか。カモフラ率0%だったし。

仕方ない、脱ごう。《ポイツ》

そして相手の白髪の少女のほうを見つめて自転車から降りて構える。

「さて、おれ…何…してんだ？」

「は？私はただ侵入者を撃退しているだけですか？」

俺の質問に首をかしげる白髪の少女。

ああ、分かんないか？そっかそっか。なら教えてあげよう。

「お前の横の人だよ」

「ああ、この人なら侵入しようとしてたから私が後ろから倒したんですよ。」

あ、そっかー、お前がやったのか。
そっかそっか。

「お……な……よ……」

「なんですか？聞こえませんかよ」

どうやら聞こえないようでこちらに耳をむける白髪の少女。
分かりやすく大きい声で言ってやるう。

「俺の友達に何してんだよ！！！！！！！！」

気づくとすでに相手の懐に全力で飛び込んでいた。

第22話 謎の美少女剣士現る！byとある半人半霊の庭師（後書き）

NGシーン アリスさん、ひどすぎます。

だめだ。頭の中で処刑用BGMが流れ続けている。

…だけど！ここで諦められるわけがない！男の夢の為に！

「ア「呪詛【首吊り蓬萊人形Lunatic】」…何も言っていないです」

《メキッ》

「ここは！？」

「もうすぐあの世だよ。」

目の前には赤い髪の着物をきたお姉さんが船を漕いでいた。

第23話 プチギレ(前書き)

もうすぐ夏休みですね。

暑いですね。

リア充うざいでしょう。

第23話 ブチギレ

「俺の友達に何してんだよ!!!」

気づくと相手の懐に飛び込んでいた。

そして全力で電撃を放つ。

「っ!?!」

だがその電撃を体をよじって回避される。

そしてこちらに長刀を振り下ろしてくる。

それを反発する磁力を発生させて軌道をそらし、避けられないように全方位に電撃を展開しようとする。と白髪の少女はスペカを取り出した。

「っ!?! 獄炎剣【業風閃影陣】!」

相手がスペカを発動すると同時に大量の弾幕が発生する。

そのままでは当たると判断し、いったん後ろに飛び退く。

そして飛び退きながら小袋から砂鉄を取り出し、鞭のような形に固めてそのまま白髪の少女に叩きつける。

が、弾幕の壁に阻まれて砂鉄が届くことはなかった。

(邪魔だな…吹き飛ばす…)

ポケットからコインを取り出して上にはじき、電気を溜める。

そして落ちてきたコインを全力で打ち出す。

《パアアアア》

「っ！？」

すると一撃でスペルブレイクしたようで一気に周りの弾幕が消える。道が開けて視界が広がることとスペルブレイク後の硬直で相手が動けないことを確認すると翼を六枚すべて解放する。

「な、千草！？おまつ！それは冗談じゃ済まないぜ！？」

横で魔理沙さんが何か言っているが知った事ではない。

今はおれの友達を、アリスさんを傷つけたあいつを吹き飛ばすことしか考えられない。

ポケットからコインを取り出して、真上にはじき、右手に全電力を集中させる。

スペルカードではない殺傷力のあるの全力で。

「やめっ！…っ！こんの大馬鹿があああ！！」《ガスッ》

「っ！？」《グシヤ》

横から何者かの衝撃を顔面にうけてすこし顔をそらす。

それと同時に集めていた電気がすべて霧散し、羽も消える。

そして今起こった事の確認の為に魔理沙さんに質問する。

「何…を？」

「『何…を？』じゃないぜ！お前今何しようとしてたんだよ！？」

「何って、そりゃあいつに仕返しを…」《ガンッ》「お前は何言っ
てんだ！弾幕ごっこじゃなかったら

普通に死ぬんだぞ！死ぬってことがどういことかわかってないのか！？」

死ぬ…って、へ？俺は何を…いったん整理してみようか？

1・アリスさんが倒れていた。

2・俺キレた。

3・レールガンで吹き飛ばす寸前

レールガンってかなり殺傷能力高いし、魔理沙さんが止めてくれなかつたら…

《ブルツ》自分の仕出かそうとしていた事の重大さが今更になって分かってきて、少し身震いする。

「魔理沙さん、ありがとございました」

魔理沙さんにお礼を言うと魔理沙さんはやれやれと言った表情で額に手を当て、ため息とともに言い放った。

「…つたく、実はお前すつごい馬鹿だろ。チルノともタメはれる位はにさ？」

「ははは、すいません。何にも見えてませんでした。」

「お前なあ…はあ、まあいい。さっさと行こうぜ？」

「そうですね。ささつと行きましょうか？」

そして自転車をこごととまたがって…

「待ちなさい！何で私はスルーされてる！？」

「バレた！？さっさとスラるぞ！」

「イエッサー！全速全壊！！！」

「字が間違ってるわ！」

「間違っていないんだよ！では、アデュー！」

「待ちなさい！」

追いつかれないように全速力で自転車をこいで逃げ出した。

第23話 ブチギレ（後書き）

NGシーン！前回の続き

「で、何で前回の続きなんですか？」

「いや、なぜか作者が『こっちのほうがおもしろい』っていつて続けるらしいんだよ」

「いったいなんだというんだろう？」

まさかここから大帝国の反乱とかあったり…するわけないか。

これからいつたいたいどうなるのか！？

そしてこれは続くのか！？

それはまさに神のみぞ知る…

第24話 決戦前の下準備（前書き）

皆さん、更新遅れて申し訳ありませんでした。

今後はこんなことがないように頑張っていきたいと思います。

第24話 決戦前の下準備

…「さて行つたか？」

この俺千草は今白髪の少女を振り切つてまた門の付近に帰つてきている。

なぜかつて？アリスさんを迎えに来たんだよ。言わせんな恥ずかしい。

さうで、アリスさんどこかな？さっき見た感じはあんまり怪我とかはなかったけど…

「どこですか、起きてたら返事ください。」

《ガタガタ》

「!？」

今後ろで何か物音が!？

ゆっくりと後ろを振り返つてみたがそこには潰れて拉げてとても人が入れそうな

スペースなどないダンボールしかなかった。

…え!？なにになに…ふう、アリスさんも人が悪い…どうせ中に人形でも入つてるんだろ？

しょうがないなあ。そう思つてダンボールに手をかけて一気に…

「オリヤアアア! 《スポツ》!？」

あれ!？居ない!？…じゃあ《ガタガタ》「ぎゃあああ!…」

マジでゆゆゆ、幽霊…そんなわけないじゃない！

あるわけないよそんな《ガタガタン》「すみませんでしたあああ
！！！」

…つく！なにも居ないじゃないか！

ガタガタンって何の音！？一体何の音だったの！？

…幻聴か？あー幻聴ならしょうが《トントン》「わひゃあああああ
あ！！！」

肩！肩たたつかれた。怖い怖い怖い！後ろ振り向けねー！！

『ぶつくすつ、ふふふふ』

「ぎゃあああああ！！なんか聞こえたあああああ！！」

電磁波に乱れもないし幽霊！？

誰か！誰でもいいから霊夢さん呼んできて！！

むそうふーいん！むそうふーいん！誰かあああ！！

『ちーぐさー、こごよこごー』

「ぎゃあああああああ！！」

なんか聞こえたあああああ！！もう嫌だ！！アリスさん早く出てき
て！！！！」

『こごって言うてんでしょー、早く出してー』

「…はっ！？もしかこの声はアリスさん！？

…やっぱりね！実は分かってたんですよ！さうてどこに居るのかな
く？」

『「」だったって、「」』

「どこに、って靴が埋まってる？
土のなかに埋まったの？どこっしょ！」

とりあえず埋まっていた靴を掴んで引きあげると
スポツと軽い音を立てて抜ける。

一応言っておこう。足が上に出ていたということは地中で逆さまに
なっているということだ。

つまりその状態で引っ張り出すと…

「…ドロワ？」

「何マジマジと見てんのよ！」

「おおっふ！？すみません！」

あわててアリスさんの足を離す。あ、このままだと頭から落ちるん
じゃ…

「それには及ばないわ」《スッ》

「な、片手について、そこから片手だけで跳躍！？
そして空中で一回転して着地しただとオオ！？」

「やりすぎたわ…《ガクツ》」

「力尽きたああ！？」

華麗な着地を見せたかと思うと一瞬でその場に崩れ落ちるアリスさん。

無茶しやがって…

「もう…だめ…立つことすら不可能だわ…後は…頼んだわよ…？《ニコリ》」

「そんな…アリスさん…分かりました。後は任せてください《ニコリ》」

「ふふふ…ありがとう…《ガクツ》」

抱きよせていた手から力が抜ける。

…くそっ！絶対にアリスさんの死は無駄にしない！《バツ》

決意を固めてその場で立ち上がる。絶対にこの異変の元凶を許さないぞ！さっそく出発だ！…その前に

「アリスさん、ここじゃ風邪ひくかもなので自転車の後ろに乗ってください」

「はい」《スチャ》

アリスさんに乗せて敵の本拠地つばい館？に出発した。

少女少年移動中…

《バババババ、ズキーン、ドドドドドド》

しばらくアリスさんを後ろに乗せて走行していると本館が見えてきた。

…弾幕の音がする。超嫌な予感するんだが…行くしかないという現実…泣きたい。

そんな事しててもしょうがないので自転車をそこらへんに停めて降りる。

「アリスさん、ここら辺から歩いていこうと思うんですけど降りれますか？」

「ふにゃ！？お、降りれるわよ！？あんまり馬鹿にしないでね！」

なぜかアリスさんに声をかけると顔を真っ赤にして怒られる。

俺なんかしました？…もしかして俺、嫌われてます？友達に嫌われるとか…目から心の汗が止まらない

「よいしょっ、と。…何で泣いてんの？」

「泣いてません。これは心の汗です。」

「嘘でしょ？」

「泣いてません。これは心の汗です。」

「…う」「心の汗です」「じゃあもうそれでいいわ」

ふう、なんとか納得してもらえたか。

まったく強情で困る。やれやれだぜ。

そんなこんなでさっさと館に潜入することに。

「さあ行きましょうか」

「なんか今すごい失礼なこと思われた気がするんだけど？」

「気のせいですよ！さっさと行きましょう！」「《ギイイ》

《トトトトトトト》

門を開けた瞬間に大量の弾幕が視界を覆い尽くす。

「っ吹き飛べ！」《パァン》

が、なんとか電撃で弾幕を相殺して危機を回避する。

手慣れてきたもんだぜ、ふう。…て言えるようになりたいなあ…さ
っきのマジで危なかったよ。

で、今戦ってるのは魔理沙さんか？それなら安心じゃないか。

後は全部魔理沙さんに任せておこう。

「まあ、応援だけでもしましょうか？」

「そうね、人形も使って派手にやってあげましょう」

「ごそごそとアリスさんが何体か人形を取り出す。

つく、なかなか派手じゃないか。ならばこっちだって…」

《バツ》

アリスさんに当たらないように少し距離を取り電翼を六枚全解放して上下にばっさばっさと振り回す。

ふふふ、流石にこれ以上は無理だろう。

《パァン》

そう思っているとどこからかクラッカーを取り出して人形に打たせだすアリスさん。

まずい…このままでは負ける…ならば奥の手！

《ドドドドオオオン》

電撃の槍を前方に大量に打ち出す。

これにより音の演出も可能になったのだ！

これで勝つ「横断幕」だど！？」

…《がくっ》

「私の勝ちのようね？」

「くそ！くそ！くっそおおお！！」

『お前ら五月蠅い！』

「そんなことより魔理沙さん後ろおおお！！」

『は？《キイイーン》あ、《ピチューン》』

「魔理沙さああああん！！」

『さて、その白黒はやられたけど貴方達はどつするのかしら？』

よそ見をした結果なすすべもなく弾幕の餌食に…

やっちゃたぜミ…もしかなくても俺の出番ですかね？

勘弁してほしいんですが…さつきから思いつきりはしゃいで電気使
いまくつたんですけど…

まあやるしかないですよ？展開的に。

というわけでしょうがないから戦闘の意思表示に前に出る。

『あなたが戦うのね？せいぜい楽しませてね？』

「お手柔らかにお願いします」

『なら全力で行かせてもらっわ』

「人の話聞いてました!？」

そして弾幕ごっこが開始された。

第24話 決戦前の下準備（後書き）

「で、何であんたは死んだんだい？」

「そうですねー、あえて言うなら男の夢の為に」

「男の夢ねえ…一体どんなことしたんだい？」

ぐいぐい来るなこの人。

まずいな、膝枕して貰おうとして死んだなんて言えないぞ。

「そ、そうだ！そう言えば貴方は何者なんですか？」

「ん、あたいかい？あたいは死神だよ？」

「死神イイ！？やつべえええええ！！半端ねえええええ！！

かつこいい！！超かっけえエエ！！」

作戦1！

ほめ倒し！

定番だがこれでなんとかなるといいな！

「いやいや、そうでもないって。

基本的に24時間営業だし、上司はうるさいしさ…」

お、なんか想像と違うけど話はそらせそうだ！

このままどんどん愚痴を聞いてなんとか話をそらそう！

…あれ、赤い髪の人後ろに幼女が…「でさ、その上司が幼女のくせに偉そうでさ」「あの「でさらに説教も長くて…」「ちよっ」更に

これが生真面目で少しでも
サボったらずくに説教が始まって……」「うし」「ちらにちらに……」「
小町。」

「この声…映姫さま…?」

「はい」

その映姫と呼ばれた少女の表情は表面は笑っていたが
心の底では怒っているような表情をしていた。

第25話 命がけの友達作り（前書き）

実は私、イーजीシューターなんだ…

だから、もしも弾幕の形式間違えてたら御報告ください。

…1カリスマにつき難易度がワンランク上がる仕様になっております。

第25話 命がけの友達作り

「じゃあ先に行かせてもらおうわ、亡郷【亡我郷 - 宿罪 -】」

「密度濃っ!?!」

のんびりとした声で発動されたとは思えない密度の弾幕が左側から回り込むように

弾幕、いや弾壁と言った方がいいんじゃないか?というレベルの弾幕が降り注ぐ。

幸い左側から降ってくるので右へ行けば安全だと思いきさつと右へ… 《ドシユウ》

「レーザー!?!…っ!吹き飛べっ!」 《ドンッ》

レーザーは消せる気がしないので回り込んでくる弾幕を節約の為に最小限のみ吹き飛ばして

急所のみ防御して出来た道を通り込んで切り抜ける。

すると一撃目が終わり、二撃目が放たれる。

「二度も引つかかってたまるか!超電磁砲【レールガン】!」 《ドオン》

嵌められる前に全力の超電磁砲を叩きこんでスペルブレイクさせる。よし、このまま電気が切れる前に押し切ろう。【残り電力45%】

「…一撃!?!…ここからは本気で行かせてもらおう」 《ゴウッ》

「扇子っ!?!ちよっ、何そんなかつこいいもの出してるんですか!?!」

ならこつちだつて!」《バツ》

「羽っ!?!?…なかなかやるじゃない?」

「そつちもな!」

「あんたたちは何を競つてんのよ!?!」

「はっ!?!?」

アリスさんに注意されて気づいたが、
いつの間にか話がそれていたようなのでまた戻すことに。

「ふふふ、われは西行寺 幽々子…貴様を葬るもの名だ…」《カリスマツ》

「ならば我も名のろう…我は千草。

時代遅れの亡霊は木の下で眠っていて貰おうか…?」《カリスマツ》

「なんとというカリスマ…!」

カリスマは効果音で表す物。

てな訳で再開。【残り電力42%】

「亡舞【生者必滅の理 - 毒蛾 -】」

「よっしゃ、ばちこい」

「カリスマブレイク!?!」

スperl宣告と同時に大量の蝶の形をした弾幕が幽々子さんの周りを回転するように展開される。
む、横から打ちこまれる弾幕って避けづらいな。これは集中しないと…

《ゴウッ》

「危なっ!?!」 《ドオン》

横からくる弾幕に集中していたせいで前方から反射的に電撃で相殺する。

しまった、貴重な電気を一気に使っちゃった。 《ドドドド》

「…って言うだけの時間をください!」

「だが断るわ、うふふふ」

「緊張感ないわね…」

いや、西行寺さんの口調はのんびりしてるけど
弾幕は結構キツイものがあるんですよ!

《ズドン》 「危ねっ!」 《ズガン》 「ちよっ!」 《チャン》 「ドン
ゴン!…ってやってる場合か!」 《ゴウッ》

この際チマチマやるよりさっさと終わらせた方が良いと思い
その場で超電磁砲を発射し、スperlブレイクを…

「まだ終わらないわよ?」

「くっそっ！もう一発っ！」《ドン》《パアアアアア》

今度は確実にスペルブレイクする。

耐久力が上がってる？扇子を出した影響か？そう言えば着弾した瞬間に扇から何か出ていたような気もせんでは…。「あらあら？考えことなんて余裕ね？」《ドドドドドドド》

「そう言う訳じゃないですよっとおおおおお！…！」

華麗に立ち回ろうとした結果が弾幕に囲まれて強行突破だよ！畜生！ダメージ覚悟で突っ込んで回避したさきで体制を立て直して雷撃の槍を連打すると、幽々子さんがスペルを取り出す。…幽々子さん、胸から取り出すのはやめた方がいいかと…おっと、鼻から不謹慎が…ティツシュを突っ込んでおこっ。

「ソクナニムネガイイノ？」

「怖っ！？今は目の前の敵より後方の味方の方が数倍怖い！」

「ヤツパリムネナノネ？」

「なんて言ってるんですか！？ねえなんて言ってるんですか！？」

「じゃ、次に行くわね？華霊【ディープル】「ちよっ！アリスさん放置ですか！？」ふふふ、なんとかなるものよってな訳でゴー！」
《ドドドド》

「ムシカシラ？ユルサナイワ」《ドドドド》

後ろから弾幕ごっこじゃないリアル即死弾幕、そして前からはスペ

力弾幕か。

「…上等っ！かかってこいやあああ！！！」

「ナラシヌガイイワ」

「ならば遠慮しないわ！（ほんとに大丈夫なのかしら？）」

後ろから来る即死弾幕^{ナイフ}を磁力で微妙にそらして前に来たところを掴んで電気を少し通して

非殺傷用にしてから幽々子さんに投げつける。

そしてたまに来る即死弾幕^{ばくだん}はそれはもう必死に電磁波でレーダーを作り感知した瞬間

それを掴んで大玉弾幕に投げつけて相殺した。

そしてホーミングしてある程度まで動くところを中心として一気に蝶の形の弾幕が飛び出してくる

ような弾幕は根性で回避した。

「ふははは！無駄無駄！」《ポイポイツ》

「つく！？これが人間の底力！？」

これだけの密度の弾幕で絶えずプレッシャーを送り続けているのに！？」

「ナンデヨケラレルノ？」

「何時も何時も半殺し位なら成ってんじやああ！！」

リアルナイフが怖くて幻想郷で男がやってらっれかあああ！！！！」

「…辛かったのね？」

「っぐ！？て、敵からの同情など要らぬわあああ！！」

不意打ちの優しさ一瞬クラツと来るがなんとか耐える。

あれは罠、そう罠だ！罠に違いない！そう思いこむことになってな
んとか留まる。

そう簡単に私は落ちんぞおお！うおおおお！！

「…ハンカチ使う？」

「ありがとうございます」《ボロボロ》

無理無理、この状況は泣くわ…

少年号泣中……………

「じゃあ、仕切り直しで…」

「スペカ時間切れになっちゃったから次行くわね？」

「よっしゃ！ばっちこい！」

ひとしきり泣いたところで仕切り直しとなった。

さて、次のスペカは何かな！？俺頑張るぞ！【残り電力32%】

「幽曲【リポジトリ・オブ・ヒロカワ - 幻霊 -】」

蝶の形した弾幕が幽々子さんの周りを回ったかと思うと…

「伸びた！？弾幕が伸びた！」

「ふふふ、集中しないとすぐ当たっちゃわよ？」

「なら当たる前に吹き飛ばすまでよ！超電磁砲！」

弾幕が回避不可能になる前に弾幕の薄い所に潜り込んで
電翼2枚吸収の超電磁砲レールガンをあててスperlブレイクを…

「またかよっ！？」

「その程度で私のスperlをブチ抜けるとでも…？」《カリスマツ》

「本日二回目のカリスマ！？弾幕がさつきとは段違いだ！」

マズイマズイマズイマズイ、何がマズイってさつきはまだなんとか
弾幕の薄い部分で凌げたけど
今度はそこに移動することすら許されないんだからもう電撃で相殺
するしかない。

スperlブレイクしようにも電撃は相殺されて超電磁砲は溜めている
時間が無い…ならば！

ポケットから白紙のスperlカードをとりだして何時も使う名時馴染
みのある弾幕を思い浮かべる。

そしてそのままスperl宣告する。

「超電磁砲【レールガン】！」《ドオオオオン》

スperl宣告した瞬間コインが表れ、音速の三倍の速度で飛んで行きスperlブレイクする。

よし、大体予想通りに超電磁砲のおかげで道が開ける。

「らああああ!!!」《バアアアアン》

超電磁砲で開けた道に雷撃の槍をブチ込み続けてスperlブレイクする。

【残り電力25%】

「なるほど、スペカであれば力をあまり消耗しないということかしら?」

でもそんな事やってたらスペカ無くなるわよ? うふふふふ」

「ならさっさと倒すまで! てい!」

まずは先にあの邪魔な扇子を切り裂くために砂鉄を袋から取りだして鞭の形に固めて

そのまま相手の扇子に叩きつけ様と

「ちよっ! 畜生! 吹き飛ばすな!」

「オートで発動するからそんなこと言われても困るわ。 桜符【完全なる墨染の桜 - 開花 -】」

「くっそっ!」《バチィィ》

「無駄よ」《カキン》

砂鉄剣は扇子から出てきた蝶の弾幕にかき消されて届くことはなか

った。

そしてスperl宣告とともに大量の弾幕が発生し、やけくその電撃の槍はたったの一発と相殺された。

もはや全力でない電撃の槍など電気は無駄遣い以外の何でもない。

つまり俺の手札は必然的に限られてくる。

超電磁砲と全力の電撃の槍、電翼、そしてもう一つの切り札…こちららは殺傷能力が高すぎるから使えないから、結局は超電磁砲と全力の電撃の槍しかないんですよ。

しかも俺は回避がそんなにうまくないから全力で避けても5秒生き残れるか生き残れないか位。

この状況から俺が取れる行動はただ一つ。

「逃げ切る！」《ドオン》

「なら押し切る！」《ガガガガ》

この時点で残り電力23%。

超電磁砲の使用料は5%

電撃の槍の全力は3%

槍にしない放電も同じく3%

電翼は発生に5%一分毎に1%

超電磁砲なら4発、電撃の槍と電撃は7発分しか電気が無いこの状況。

だがもうそろそろラストスperlだと言っている俺の勘が正しければなんとか乗り切れる。

…そう思った俺がバカだった。

「くそっ！何だよこの弾幕！？避け辛いとか安置が無いとかそんなチャチなレベルじゃねえぞ！」

《バチィ》

「あらあら、早速使っちゃっていいの〜？」

節電しなくていいのかしら〜？」《ドドドドドドオン》

「そう思っなら弾幕少しは緩めてくださいよ！」《バチッ》

「だが断る！そんな訳で全力で逃げてね〜」

「くそ！なら…」

多少のダメージは割り切って受けていく方向にする。

服なんざ飾り！男は度胸！そう自分に言い聞かせてなんとか迫りくる弾幕を掠りまくる。

【残り電力22 16%】

（そのまま戦い続けてもいずれ限界が来る。

貴方はどこまで耐えられるのかしら〜？）

「うおおおおお！命をオオオ燃やせえええ！！」《バチィ》

（さ〜て、どれだけでできるか楽しみね）

体をよじって、横っ跳びして、時には電撃で打ち消して回避する。

が、ダメージはそこまで無くても電力はじりじり削られていく。】

残り電力13%】

完全にジリ貧。このままでは負ける運命しかない。

「千草！後ろ！」

《ドツ》「ガッ……」

復活したアリスさんがギリギリで教えてくれた事により体を擦ってダメージを軽減するが

それでも一瞬呼吸が止まるほどの衝撃を受ける。

それと同時に何かが俺の中でぶちきれぬ。そしてコインをポケットから取り出して打ち出す。

「……《ドオン》……」

「……っ！？超電磁砲？ついにやけくそかしら？」

「……もういい、やっぱりジツと耐えるだけ俺には無理だったって事」

「じゃあどうするのかしら？諦めるの？」

「……うう……です」

そつと現時点で最強かつ、最後のスペルを宣告する。

「圧縮式【超電^{レールガン}磁砲】……！」《ドツゴオオオオン》

「……!?」

スペル宣告とともに周りの静電気やら何やらをすべて吸収した超電磁砲が発射され、軌道上の弾幕すべてを蹴散らして真っすぐ幽々子さんに向かって行き、そのままオートガードの弾幕に直撃する。

（っ！？さっきまでと威力が段違いね。だけどこれなら全力でガードすれば何とか防ぎきれぬ。

それにあちらもそろそろ限界のようだし

「ぐっううう！！！！」

反動で少しづつダメージが蓄積される。

このままなら確かに負けるだろうが…

「そう言う訳にはいかねえんだよオオオオ！！！」 《ドオオオ》

「つつつつ！？」

電撃を上乗せした圧縮式超電磁砲がじわじわと浸食し始める。
そしてその場でもう一段回電撃を上乗せして。

「いつつつけえええエエ！！！！！」 《ドン》

《ミシイ》 「！？つ！ハアアア！？」 《ガキイン》

「なっ！？」

突破寸前で弾幕を打ちこむ事で回避される。

これで持ちスペカは白紙一枚。作ってるのがもうないのを勘づかれるまえに早く作らないと。

でもどうすればあの堅いガードを貫ける？マジで無理ゲーなんじゃ…。

「さて、もう打ち止めかしら？」

ワァーオ。これ完全に見切られてるんじゃない？

どうしましょっ？どうしましょったらどうしましょ！？電力も残り

4%

電撃一発分しかないし…あのフランドールを倒した圧縮式超電磁砲ですら防がれるほどの防御力を貫く程の貫通力か、弾幕を張られる前に吹き飛ばすほどの速度。なにそれ欲しい。

「さて、そろそろ行くわよ？」

「出来ればもう少し時間を…」

「だが断る！気合い入れて避けてね？」 《ドドドドド》

「クソッ！」

電磁加速で自身の速度を上げる。出来るだけ長持ちするように最小限の加速のみを施し後は気合いで回避する。

うおおおおお、回避回避回避いいいい！！自分を信じるオオオオ！！！！

「当たらないわね〜ハア。少し、全力を出させてもらっわ…？」 《パン》

「速っ！？ 《パパパン》 うおっ！ 《パパパン》 ちよっ！？ 《スパパパパン》 もう無理！ 《ドン》 ゴフッ 《ドドドドド》 あばばばばー！」

一度被弾し、そこから連続で弾幕に被弾しまくる。

当たる瞬間に電磁バリアを張っている微妙に耐久が上がっているせいでピチユる事も出来ない。

しかし衝撃により体力だけはガンガン削れる。それはもうすごい速度で。

(まず…意識が消えたら…フルボッコに…)

「千草！あんたそんな中途半端なまま死んでいいの！？友達作るなら百人位作りなさいよ！」

「百人ね〜、違う種族がそんなに仲良く出来るのかしら？」

「っ！？」

薄れ行く意識の中、なぜか場違いのような声援が送られる。

そしてそれになぜかスペルを中止してまで反発する幽々子さん。いったい何でだろう？

「結局、大きな力をもつ妖怪と脆弱な人が仲良くなんて出来る訳がない。

妖怪のお遊び程度ですら脆弱な人にとっては致命的となる。

それは何も妖怪と人に限った話ではない。

本来人は集団を作る。そしてそれは異端を弾くという事でもある。

弱い人の集団には同じ人でも強者は入ることはできない。

結局強いもの達が弱い者に歩み寄ったところで本当の和の中には入れない。

所詮強いものと共に歩む事が出来るのは同じく強い者のみ。

そしてそのバランスすら危ういもの。

そんな中で本当に百人の友を作れるのかしら？」

「……………」

正直、幽々子さんがここまで真面目になるほどの何かがあったというのは雰囲気で見分ける。

しかし、何かがあるのが分かってもその何かの内容は全く分からない。

むしろ幽々子さんからすれば十数年しか生きてない若造になにが分かるものか。

そんな風に考えられても全くおかしくない。それでも吐き出さなければならぬ程の何かがあった。

そういう事なんだろう、としか俺には思いつかない。

これがあつてるのか間違っているのかも分からない。

…だけど！

《ググツ》「モチの…ロンです！」

「!?!?…その根拠は？」

「そんなの…ない…です」

「今拠もないのに言ってるの？気休めにすらならないわね」

幽々子さんが呆れ果てた様に中断していたスペルをゆっくりと掲げる。

確かに根拠がなければ幽々子さんが負った深い傷には何にもならないだろう。

…なら。

「根拠なら今から作ります。俺と友達になってください幽々子さん」

「は!?!?簡単に言わないで貰いたいわね？」

私が千年以上も賭けても達成できなかった事をそんな簡単に…」

「言います！千年賭けてもダメだったって事は千年あっても諦められなかったってことでしょう？」

「なら千年ごしのその願いは俺が叶えます！幽々子さんの千年を無駄にはさせません。」

「何度でも言います、俺と友達になってください幽々子さん。」

「言いきると同時に右手を差し出して一歩前が出る。」

「ふざけないで！そんなのっ！今更何だったのよ！完全なる墨染の

桜 - 開花 - ！！」《ドドドドド》

目の前を一気に弾幕が覆い尽くす。

スperlカードとして宣告していない！？

「という事は死なないように調整されていない殺す気の弾幕と言う事か？」

「このまま何もしなければあっという間に被弾しまくり、最悪死ぬだろう。」

「だが、避けない。」

「な、あんで避けないの！？いくら弾幕ごっこでもそんなに当たったら死ぬわよ！」

「死にません。幽々子さんと友達になるまでは」

「っ！？その姿勢がいつまで続くかしら？」《ドドドド》

「友達になるまでです」

「右手は差し出したまま弾幕を打ち続ける幽々子さんに近づく。」

『伸ばした手は、引いちゃいけない。』
昔友達に言われた言葉をそのまま実行する為に。絶対に手は引かない。
たとえどれだけボロボロに成ろうと。

「っ！？ほんつとにっもう！」《シュルル》

アリスさんが折れかけた右腕を魔力糸をからませて固定してくれる。
これで、もう手を引くことはない。もう幽々子さんは目の前に居る。

「…幽々子さん」

「！？」《トトト》

「何度でも…いいいます。」

「来ないで！来ないでよー！」《ト…ト》

「俺と…」

「もっ…やめてよ…」《ト…ト》

「友達に…」

「もっ…」

「なっってください」

「やめ…」

「お願い…しますね？」

「……はい」

友達が一人増えました。

「よろしく…」《ドサッ》

第25話 命がけの友達作り（後書き）

「大体小町、貴女と言う人は…」

「ハイ…ハイ」

（長くなりそうだなあ…、もう一時間くらいたったんじゃないかなあ）

携帯を開くと、意識の無くなった時間からだいぶたっていた。

長いじゃ無くて永い。…それにしても俺どうすればいいんだろう？
まじで死んだんだろうか…。

そんなんことを考えているとこちらに緑髪の人が顔を向けてくる。
一体どうしたんだろう？

「次は貴方の番ですよ？」

「なぜに!？」

まだまだ永くなりそうだ。

「美鈴、うるさいわよ?」

「あ、すいません咲夜さん」

【白玉楼】

「そのままが良いので聞いてください」

「あ、はい」

この丁寧なしゃべり方は幽々子さんでもアリスさんでも魔理沙さんでもないし…

ああ、あの白髪の子か！なるほどなるほど！流石の名推理！

「まずは幽々子様のご友人と知らずに襲ってしまい申し訳ありません」

「いえいえそんな、俺に謝るんならアリスさんに謝つとかなないと殺されますよ?」

あの人には何度殺されかけた事か」

「大丈夫ですよ。もう半分死んでますから」

何を言っているんだこの人は？半分死んでるとか厨二!?

エターナルフォースブリザードか？エターナルフォースブリザードなのか!?

よし、かく言う俺も厨二病患者の友人だった男！対応には慣れてるぜ！

「ふふふ、やはり貴様も冥界の住人だったか…」

初めて会ったときからそのような気配がしていた」

「（雰囲気が変わった？）ええ、確かにここは冥界ですが」

引っかけてみるとやはり重度の厨二病患者の様だ。

今いる場所すら錯覚している。そのうち【効果：相手は死ぬ】のオリジナル技を開発するに違いない。

そしてその名前はきつと長ったらしいんだろう…。

「では仕事に戻りますので用があれば呼んでください」

「分かりました。仕事がんばってください」

「ありがとうございます。それでは」《ガラガラ》

音から察するに出て行ったようだ。

謝る為だけに来たんだろうか？なんて律義な…。

そしてまた暇に…《ガラガラ》「お邪魔するわよ」ならなかった。

この声はきつとアリスさんに違いない。…この重傷なのに襲われな
いよね？

いや、そういえばさつき幽々子さんにもたれかかった…。

サアアアア（血の気の引く音）

「千草、大丈夫…ではないわね。なにか欲しいものある？」

あれ！？優しい？ああ、なるほど冥土の土産か。

「強いて言うなら命が欲しいです…！」

「そんなに危険な状態なの！？」

あれ、気遣ってくれてるのか！？
いや、アリスさんが殺す分が無くなるかもってことか…。

「どうせやるならひと思いにお願いします…。」

「え！？それってどどどど、どういう事？」

なんだろう動揺してる？

もしかして…じわじわ鬨り殺す以外はあり得ないってこと？

落ちつけ！落ちつくんだ俺！落ちついて生き残る選択肢を…。

1・絶望

2・絶望

3・絶望

絶望しかない…。

「もう駄目だあ…お終いだあ…。」

「なにが！？何がおしまいなの！？」

またもや同情するアリスさん。

ここまで気遣ってくれるという事はもしかしたら生き残れる！？

絶望の運命を覆せる！？たとえ選択肢を一つでも間違えればそく死

亡でも乗りきって見せる！

まず最初は…

「すみませんでした！」

「本当にね…。」

あ、オワタ？
やっぱり駄目か？

「体も動かせないような重症になるまで無茶して…」

「…反省してます」

痛いところつかれてしまった…。
やっぱりかっこつけすぎたかな？

「あっちが拒否してたらどうするつもりだったのかしら？」

《グサツ》

「そうじゃなくてもあっちの弾幕が止まるのが少しでも遅かったら
どうなってたかしらね？
体も動かせない千草君？」

《グサグサツ》

「えっと、その…気合い？」

「はあ…国宝級の馬鹿ね」

《グツサアア》

「これが自分の性分ですから…」

「死んだら元も子もないけどね」

「結果としては成功しましたし…」

「これからもこうやって出たとこ勝負するの？」

あ、だめだ。

完全論破だわこれ。

「俺が…間違ってた…」

「今回は運が良かったけど次から自分の体を優先すること！」

「はい…」

「じゃ、安静にね」

「はい…ありがとうございます」

《ピシヤリ》

鬱だ…寝よう…。

魔理沙視点

《バン》

「おいっスー魔理沙さんのご登場だぜ！…って私が来てやったのに寝てやがる」

「グーグー、スヤスヤ」

「それにしてもわざとらしい寝言だぜ。実は起きてるんじゃないか？」

「グツスリ」

「なんかむかつくな、私が来てやったていうのに」

「ムニヤムニヤ」

「…《キュピーン》」

千草視点

《パチツ》

「お、目が開けれる！復活早いな！流石ご都合主義…
つてなんか頭が痛い。何で？《キヨロヨロ》…はい？」

「おかしいな？魔理…沙さん？何で？え、俺なんかしましたっけ？」

確か寝る前の最後の記憶はアリスさんと喋ってたような…？まずい！アリスさんに見つかったら死ぬ！
有無を言わずに一瞬で殺される！たえ何があっても死ぬ！

「魔理沙さん！何があったか知りませんが起きて！そして布団から出て行って！」

俺の命のために！ハリーアップ！」

「う、ん、千草？そんな…私との熱い夜を忘れたのか？」

「この怪我でそんな事が出来るか！さっさと出て行ってください！」

「いいのかな？そんな大きな声を出しても？」

アリスとやらに見つかったらどんな事になるかな？」

「貴様！？自分の身を犠牲にしてもこの私を追いつめるというのか！？」

「目的の為なら手段は選ばない女、それが霧雨魔理沙だぜ？」

こ、こいつ本気で俺を貶める気だ…。

まずい、このままでは俺は社会と物理的に死ぬ…。

どうする…体は動かせないし…なぜか電撃も脅しに使う位もないし…脅し…？

「魔理沙さん。今すぐに出ていかないとこのならば俺のスペルカードが…」

「ん…これはなになー？」

俺のスペカはいつの間にか魔理沙さんの手の中に。
ご丁寧に真っ白のスペカまで持っていてやがった。

「魔理沙さん、思春期の女の子が同じく思春期の男の布団に入るのはだめだと思っただ（キリッ）」

「清々しいまでの開き直りっぷりだな。あと、私は千草なら……」

「ごめん、最後の奴詳し《パタパタパタ、ピシャリ》「千草」、調子はど、…お邪魔しましたわ」

幽々子さん！？違いますよ！誤解です！待って！やめて！説明させてええええ！」

「おっと、私はもう行くんだぜ。アデュー」《バタバタ》

「逃げんなあああああ！くっそ、《ズキン》うおおおおお！」
《ズダン》

動かない体も体内電流を操作して何とか動かして幽々子さんを追いかける。

一歩歩くたびに激痛が走るがアリスさんに知られたら…死。

なので激痛に耐えて一歩一歩踏み出して部屋を一部屋づつ調べる。

「此処かっ！？」《ボタン》

《シンシーツ》

「今度こそっ！」

《オオベヤーン》

「いてくれ!？」

《トイレン》

「畜生!」

《トトトトトトト》

「包丁の音?」

ようやく人の気配がすると思つて周りを見渡すと
割烹着をきて調理をしている厨二病患者の方がいた。
そしてその傍らにはすごい量の料理が並んでいた。

「なんで起きてるんですか!？血で包帯真つ赤ですよ!？」

「そんなことより幽々子さんはどこに居るか知りませんか？」

「そんな事つてレベルじゃないですよ!死にますよ!」

「(社会的と物理的に死ぬから)俺の命一つ分じゃ足りない誤解を
産んでしまつたんです!

(魔理沙さんも隣にいたから)もはや俺一人だけの問題じゃないん
です!だから!居場所を!」

「(この威圧感!？なにかとんでもない事があるとでも言うの?)
…分かりました。幽々子様は何か会つたときは大体あっちの方の縁
側に居るのでそちらに居るかと」

「ありがとうございます！このお礼は必ず！え〜と…」

「魂魄妖夢こんぱくようむです。お礼期待してますよ」

「俺の全力を持ってお礼しますね妖夢さん！」

今度ここに遊びに来た時は銀のアクセサリーでも持ってきてあげよう
と密かに決意して
妖夢さんの指差した方に行った。

幽々子視点

（まさかそんな関係の人がいたなんて…。
いや、別に友達にそんなの関係無いじゃない。一体何を考えて…）

「ご機嫌いかがですか？幽々子さん」

「千草！？そんな体で何で起き上がったの!？」

後ろから聞きなれた声を聞いて後ろを振り返ると私との弾幕ごっこ
で傷だらけになり
起きているのも不思議な程の傷を負った千草が立っていた。

「さっきの誤解を解きに来ましたよ」

「誤解とかはいいから早く部屋に帰って横になってなさい！」

「（社会的にも死ぬから）そうはいきませんよ。
そのために無理してきたんですから」

鬼気迫る表情でこちらを見つめる千草。

決意は固いようでも説得は諦めて自分の隣をポンポンと叩いて此処に座れ、とジエスチャーする。

すると小さくうなずいて私の隣にすわり、話し始めた。

千草視点

よし。何とか話を聞いてもらえそうだな。

完璧且つパーフェクトな説明をしてやるぜ。

「幽々子さん、まずはですね。魔理沙さんが隣に居たのは悪戯でしたね……」

《ピクツ》「悪戯してたんだ、ふん。手癖悪いのね」

あれっ！？なんか幽々子さんに誤解の色が見えるんですが…気のせいじゃないかな？

今の説明のどこに不備が！？

な、何とかしなくては！

「い、いや！俺がやってたんじゃなくて魔理沙さんがいつの間にか

にですね！

大体この怪我じゃ何もできませんし！」

「あら、その怪我じゃなかったら何かしてたのかしら？」

「いやいやいやー！！そんな事しませんって！」

「…ホントに？」

「…ちよつと嬉しかったです」

「…えつち」

「…すいません」

だって、起きたら隣に女の子が居るなんて…たまらんですたい。

「まあ良いわ。この件は無かったことにしてあげる」

「ありがとございますー！いやー良かった良かった。一時はどうなるかと…」

「ねえ、千草？」

「はい？なんですか？」

安心して一息ついていると幽々子さんが話しかけてくる。
何だろう、雰囲気が変わった？

「もう一度聞くけど、本当に私なんかと友達になってもいいのかし

ら？」

「いやいや、もう友達で「あの時はまだ話してなかったけど、私の能力は【死を操る程度の能力】」。相手に有無を言わせずに即死させる事が出来るという恐ろしい能力よ。」

「こんな能力を持つ者が近くに居て怖くないの？」「…だから？」

「だからって？そんな簡単な問題じゃないわよ？死ぬのよ？死が怖くないの！？」

「どんな強力な力を持っていようが幽々子さんは幽々子さんでしょう？」

別に貴女が過去に何かあったとしても俺にはその事の重さなんて分からないし

幽々子さんが語りたくないのであれば知る必要もない。今は今、過去は過去

過去は未来の糧にするだけのもので足枷になってはいけない。俺はそう思ってます」

どうやらシリアスのようなので全力で説教タイム。

説教と言っても上さんとは比べモノにはならないけど。

むしろ言える人は居るのだろうか？見てみたいぜ。

「一寸した事で暴発するかも…」

「俺が何としても止めます」

「どっやあって？」

「どっせってでも」

「無茶苦茶ね？」

「強引なのは御嫌いですか？」

「…悪くないわ」

「お気に召して何よりです」《スツ》

笑顔とともに立ち上がり手を差し出す。

うっん、リア充みたいな行動だ。憧れるね。

「案外キザなのね」

「かつこつけてるんですよ」

「あらあら、意外ね？」

「男の子にはかつこつきたい時があるんですよ」

「じゃあそれに乗っかってあげる」《ポスツ》

「っ！？あ、ははははは…」

あ、忘れてた…今、俺かなり重症じゃない…。

こんな状態で立ち上がらせでもしたら相手の体重もかかって手が折れそうに…

まずい、早く離してもらわないと！

「ゆ、幽々子さん？一寸だけ手を離して…」

「じゃあ立ち上がったから…」《グイッ》

「っ！…！っ、ぎゃあああああああああああああ！…！…！」
《パタッ》

「っ！…？千草？…嘘…息…してない…？」

「してるけど！してますけど腕があああああ！…！」

「あっそ〜れっそ〜れっ」

「痛ったあああああ！…！やめて！離して！もげるもげる！…！」
《グイッ》

あまりの痛さに立ち上がろうとした幽々子さんを引きはがそうと全力で手を引っ込める。
それがさらなる悲劇を生み出すとも知らずに…

「きゃっ」「《ぽふっ》

「ノオオオオオオオオ！…！痛い！痛い！痛イイイイ！…！…！」

《ぽふっ》ってレベルじゃないよ！

そんな平和な音が俺には全てを終わらせる終焉の鐘の《ズルッ》

「えっ！…？」

足が滑って幽々子さんが俺にのっかる形で倒れる。

つまり、幽々子さんの体重と自分の体重をかけた落下衝撃を受ける事に…。

一応確認しておこう。

今俺は正に瀕死の重傷を負っている。よし、みんな分かってもらえたな。

「オワタ」《ドン》

バランスの崩れた俺はなすすべもなく倒れる。

第26話 異変の終わり（後書き）

すまない。

今回かなり遅れたうえに後書きもないんだ。

本当にすまない。すみません。誠に申し訳ありませんでした。

第27話 白玉楼の一日(前書き)

今回かなり短いです。

むむむ、今までが長かったからに違いない。

反動に違いない！だからしょうがない！しょうがないんだあああ！
！

第27話 白玉楼の一日

「大丈夫？また傷増えてるけど？」

「そう思つのなら傷が増えるような事しないでくださいよ幽々子さん」

結局あの後弾幕ごっこで脆くなっていた骨に追い打ちをかけたあの事件で更に

骨折箇所が増え、慧音さんの家にも帰れないので白玉楼に泊めてもらう事になったのだが

何かと幽々子さんの悪戯を受けて更にダメージが蓄積した。すごい勢いで。

「私が何をしたって言うのよ？」

「例えば電気信号を自分でいじらずに動けるようになりだしたときにいきなりタツクルされました」

すごい勢いのタツクルを喰らってしばらくは意識を失っていた。

フランドールのタツクルとは違って全力で怪我をさせようとさせる意思が伝わって来るような見事な

タツクルだったぜ…、だからこそ骨も折れたんだがな。

「そ、そんなことあったかしら？」

わざとらしく目をそらして吹けもしない口笛を吹こうとしてやがるぜこの人。

何十回も同じような事しやがって…今度という今度こそは許さない

ぜ！

「本来もう治っててもおかしくないペースで回復してたんですけどね」

「あれだけの怪我を負って一週間で全快はあり得ないですよ。異常よ異常。腕の骨折なんか1日寝てたら治るって何？」

「治るんだからしょうがない。としか言いようがないですよね」
きつとフランドールのタックルやら何やらに強化されてるんだろう。後は電流を少し操って細胞を活性化させて回復力を底上げしてるのが現実なんだが実際面倒だったんで言っただけだね。

「で、さっきの続きですけど…」

「逸らしきれなかったわ」

そう簡単にO H A N A S H I は終わらない。
今まではぐらかされ続けた分も含めて今回は全力でいかせてもらおう。

「幽々子さん、何でまたこんなことをしたんですか？」

「そ、そう言えばもうすぐご飯の時K「さっき食べたばかりだと思
うんですけどね？」そうだったかしら？」《アセアセ》

「ねえ、幽々子さん。今逃げようと思いましたよね？」

「そんな事無いわよ？」《アセアセ》

「しました…ヨネ？」

「ちよっ！？後半おかしかったわよ！？落ちついて！落ちついてちよっ！？」

「ソナナドウドモイイカラオハナシシマシヨウ？」

「一旦冷静になりましょう！ねっ！ねっ！！！」

「オハナシ、オハナシ、フフフフ」《ガシッ》

「いや！やめて！引きずって行かないで！！一体どこに連れていくもり！？」《ズルズル》

抵抗する幽々子さんを引きずって連れていく。

まるで体の怪我や体調の悪さや抵抗もないかのような体の軽さだ。

こんな気持ちになれるなんて…！

もう何も…コワクナイ！！！！

「あれ、千草さん何処に行くんですか？」

「ああ、一寸そこまで」

「妖夢！助けて！千草が私にひどい事を…」「行ってらっしゃいます。夕ご飯までには戻ってきてくださいね？」

妖夢！？今助けてくれないと私死んじゃ「行ってきます。一寸遅れるかもなので夕飯は遅目をお願いします」

やめてええええええ！！！！誰かっ！誰かああああ！！！！」《ズルズル》

「そんなに怖がらなくても…ちょっとオハナシスルダケナンダケド
ナー？」

「いやあああああ！！！！」 《ズルズル》

白玉楼は今日もにぎやかだったとき。

第27話 白玉楼の一日（後書き）

「さて、説教も終わったことですし、判決を言い渡しますね」

「何も三途の川でやらなくても…」

「作者がそこに書くまでが長いからやめとくって言うていたので」

「サボんなよ作者」

『サーセンWWW』

「まあ、結論から言つと天国逝きですね」

「あれま、そんなものなんですかね？」

俺は閻魔さまの天国逝きという判決に結構驚いた。
俺も若いころはやんちゃしてたからなあ…。

「幻想郷にきてから貴方は一人の吸血鬼の人生を変えた。
この事と貴方が罪に対して向き合っている事を考慮したうえでの判
決です。」

何か質問等ありますか？」

「いえいえ、それで俺はどうすればいいのでしょうか？」

「三途の川を渡ってから天国と書いてある看板のついている門をく
ぐってください」

「分かりました」

「じゃ、逝ってらっしゃい」

「うおっ！何時の間に此処まで進んで!？」

「説教中にはもう着いてたよ？」

「なんだって…全く気付かなかつたぜ…
まあいい、とつとと逝ってくるか。」

「ではお世話になりました閻魔様」

「はい、天国ではもつとたくさんの善業を積んでくださいね」

「…善処します。それではさようなら」

「はいさようなら」

俺は軽く会釈してそのまま駆けて行った。

映姫視点

「逝きましたね」

「そうですね、どうします映姫様？もうお休みになられますか？」

「いえ、まだ仕事が残っていますので」

「そうですね、ならあたいはもう休み」小町、貴女は少し怠けすぎ

る」

ええ！？今仕事したばかりじゃないですか！！」

「いいえ、少しあちらを見てみなさい」《スツ》

「はい？」

三途の川の対岸を指差して小町にそちらを見るように言う。

「なんですか？あれ？」

「作者の勝手な都合で死んでしまったさっきの人の片割れ…というのは少し違います」

まあこの際細かい事は放っておいてまずは次々に送られてくるあの方々を処理しましょう」

「あゝ、頭が痛い気がするので今日は早退しても「無理です。さあやりましたよ」か？」

嫌ああああ…」

嫌がる小町に無理やり船を漕がせて仕事を再開する。

まだまだ仕事はこんなにあるのだから休む暇などないのだ。

NG長編 地獄編 完

第28話 異変の終わりは誤解の始まり（前書き）

最近めつきり執筆スピードが落ちてきてやがる。
兄やら母がパソコンを占領して来てるからだな。

俺のせいじゃない。《キリッ》

そんな訳で本編へゴー。

『いい訳かつこ悪い』

うん、分かってる。分かってるけど、言わせてくれよ。
言わなくちゃやってられないんだよ。

第28話 異変の終わりは誤解の始まり

「…む、なんだこの違和感…」

あの説教事件から三日後…怪我也治りもうすぐ慧音さんの家に帰るという状況の中、それは起こった。

なぜか起きたと同時に何か強烈な違和感を感じる。

しかし朝起きたばかりの頭なのでどうもその違和感を明確に発見できない。

一体どういう事なの？

「あ、おはよう千草」

「あ、おはようございます幽々子さん」

不意に横から声をかけられたがなんとか大した混乱もせずに返事を返す事が出来た。

ん？横から幽々子さんから声をかけられた…？今まだ布団にくるまつたままなの？

だんだんと意識と違和感がはっきりしてくる…ああ、つまり幽々子さんが俺の隣で寝ていると…

「出ていってください」

「つれないわね」

「いや、冗談抜きで出て行って下さい」

「え、まだ寒いし」

「いや、冗談じゃ無くてこういう状況はあれです。思春期の男子にはキツイです」

「それなら思春期の劣情を私にぶつけれないんじゃないかしら？」

「はいはい冗談は置いて、さっさと出て行って下さいね」

「冗談じゃないんだけ」

「秘儀っ！布団めくり！！」《バサッ》

説明しよう！！

秘儀、布団めくりとは自分側の布団の端を掴んで外側に転がることにより

回転力を利用して一気に布団をもぎ取るという凶悪な必殺技である。で、その必殺技を利用して一気に幽々子さんから布団をもぎ取る。

「嫌ー、布団の熱がすべて無くなるー！寒いー！！返して！！」

「居間に行けば妖夢さんが暖かいご飯をつくってくれてますよ」《もぞもぞ》

幽々子さんに適当に言いつつ布団に包まって温まる。

まだ眠いのもう少し寝ようかな…少しだけなら迷惑にもならないだろう…

そう思い更に深く布団に包まる。温かいぜ…。

「ちょっと隣いいかしら？」

「いや、今来たみたいなき感じに言われてもダメです。入ってこないでください」

「ケチね。貴方がそんな人だなんて…ヨヨヨ…」

「もう俺寝てて良いですか？」

「なら寝込みを襲うわ」

「セイツ」《ピシツ》

「痛っ、何するの？」

幽々子さんがでこピンされた額を抑える。

あまり力を入れてないからそんなに痛くないはず。なので幽々子さんにぐっと顔を近づけて話す。

「良いですか、よく聞いてください」

「ふえ！え、えええ！！分かったわ！！」

「女の子がそんな風に『襲う』なんて言っちゃいけません！花も恥じらう乙女なんですから」

「おんにゃの…！！は、はふう…」

「幽々子さん？何で倒れて…」《ドタドタ》このタイミングで誰だよ！？空気読んで！！」

なぜか赤面して倒れた幽々子さんとその隣で布団の近くに居る男。

完全にアレな感じだよ！！まずいまずい！！これは完全に変態扱いされる！なんとかならないのか！

しかし現実是非情である。足音は止まらないし幽々子さんはまだ倒れたままだ。

そして俺の未来はこのままでは真っ暗も真っ暗…正に谷底…！！

《ガラツ》「清く！！正しい！！正義のパパラッチ！！！！」

射命丸…文！！！！見…参！！！！さあ観念して取材を…ほほう…」《ニヤリ》

「お前かよ畜生！！！！」

この状況でいちばん来てほしくない奴がきやがった。

まずいつてレベルじゃないぜ…確定したよ…俺はこの後アリスさんに殺される。

なんか俺が女の子と近づいてたらあの人襲ってくるんだよね…物理的に。

ならばやられる前にやる！！電撃で吹き飛ばす！！！！

「はい、チーズ！」

「えっ！？」

いきなりカメラを構えられて思わずピースを作って固まってしまっ

《カシャ》「ではさようなら！」《ピュ》

「逃げんなゴルアああああ」

しまった。完全に証拠写真を撮られて一気に逃げられる。

だが俺もこのまま逃げられるわけにも行かないのでカメラを磁力で引き寄せてもぎ取るうとする。

「そのカメラは置いていってもらうぞ!!!」

「くっ!!! 全力で逃げる!!!」 《グググ》

「逃がさない!!! 此処でお前との因縁に決着をつけて見せる!!!」
《グググ》

射命丸から全力でカメラを掴んでもぎ取るうとするが
相手は天狗、磁力で足を床にくっつけていなければもぎ取られてい
る。

電磁加速とかはできても力の方はあんまり強化できないからなあ…

「その油断が命取り!!! 《バツ》ではさようなら」 《ダダダ》

「逃がすかつ!!!」 《バチツ》

部屋から走り抜けて廊下に飛び出すまで、2秒。

廊下から飛び出して効果範囲外に射命丸が逃げ出すまで、1秒。
磁力を全開にしてカメラに飛びつくには十分すぎる時間だった。

「あやや!!! 貴方どこ触ってるんですか!!!」

「カメラしか触ってねえよ!!! 誤解されるようなこと言ってんじや
ねえ!!!」

「チツ!!! せつかくの面白ネタが!!!」

「お前のネタのせいで死んでたまるか！！！」（社会的にも物理的にも）

射命丸が全力で飛んでいるがあのような時のように目を回す様な俺ではない。

幽々子さんの弾幕ごっこ、幽々子さんのタックル、幽々子さんの筋肉バスター。

あれ、なんかまとものがあんまりないか……。ちょっと違うのを連想してみよう。

アリスさんのパイルドライバー、アリスさんの超人十字架落とし、アリスさんの魔技 グランドクロス。

何時の間にこんな大技を習得してんだ……。いや、最初から習得していたのか……？

なににせよ俺の命があぶねえ……。なんとかせねば……。

「その油断が命取り！！」《グルン》

「っ！！おまつ！！こんなところから落とすなよっ！！」

「大丈夫！貴方なら此処から落ちててもきつと生き残れる！！

そして私の新聞のネタになってください！」

「畜生おおおおお！！！！」《ヒュウウウウガサツ》

射命丸のカメラにしがみついていたがいきなり空中で回転＋暴風のコンボでたたき落とされた。

あの野郎……死ぬかと思っただぜ。

とりあえず射命丸を追いかけるためにも状況確認せねば。

「えっと、周りは……森？いや、坂道っぽいから山？」

山はちよつと迷うかも…下山するか…？いやいや、下山したら死ぬ。社会的にも物理的にも…よろしい、ならば前進だ」

此処に居てもしょうがないので近くにあった川に沿って登山していった。

???視点

「今日も天気が良いね〜散歩にも気合が入るってもんだよ」

そんなことをつぶやきながら今日も発明品の材料を探すため日課の散歩を続ける。

発明の為には材料も必要だしね。

「あややや、良いところに居てくれましたね」

「文?どうしたんだい?」

「いや、ちよつと写真を現像して貰おうと思ってね」

「あれ?前に渡したやつは?」

「あやややや、それがちよつと調子が悪くてですね…」

「はあ、もしかして壊したの?」

「そ、そんなことありませんよ！これ中身どんなふうになってるんだろうとか思っ

一寸叩き割ったとかそんな事はありませんよ！！」

まさかそんな事をするとは…泣けるぜ。

流石にそれは開発者として胸が痛くなる…トウバード3号エ…。かわいそうに…今度からは解説書に分解された中身を書いて置いておこう。

「まあ良いや、カメラ頂戴。さつさと現像しとくから」

「一寸機嫌悪くなってます？キュウリ持ってきましようか？」

「はいはい、それは後で持ってきてくれればいいから今はカメラね」

「結局貰うんですね、ではカメラをお願いします」

「んじゃ、後で来てね」

「分かりました、お願いしますね」

「あいよ、また後でね」

文からカメラを受け取ってもうすぐ来るキュウリの食べ方を考えながら

スキップしながら自分の研究所に戻って行った。

「バカな…何故俺がこんな目に会っているんだ…」

「一寸！聞いてるんですか!?!」

川に沿って山を歩いているときなり『止まりなさい!』とか声をかけられて

振り返るといきなり犬耳をはやして更に尻尾まではやした女の子に縄で拘束されて

なんか長々とお話を聞かされる羽目に…訳がわからないよ。

「ところでもう行ってもよろしいでしょうか?」

「だめです!！そうやって不用意に此処、【妖怪の山】に近づくと食べられたり通報されたりするし上げられたりするんですよ?」

(くっ、なんてしつこいんだ…ここを何とか切りぬけなければ

俺が死んでしまう…マジで二重の意味で。ここは力づくで…)

力づくで…逃げる!そのための演算を開始する。

幸い地面がすぐそこにあるので煙幕のように使いつつ縄も切る事にしよう。

だが妙に反応されても困るのでゆっくり演算しつつ話でもして注意をそらすことにしよう。

「えっと…貴女は何て名前でしたっけ?」

「あ、申し遅れました。犬走いぬばしり 椀もみじと申します。

…って何で私は自己紹介させられてるんですか?これっきり会わないと思うんですけど…

貴方が私の忠告を聞いてくれれば」

最後の方は少し口調を強めて起こった様にいつてきた。それにしても犬走…言いにくいから椀さんと呼ぼう。

「椀さん？俺は多分椀さんとまた会うとおもいますよ？」

「は？いやいや、何言ってるんですか？ちゃんと私の話聞いてました？」

バカを見る目でこちらを眺めてくる椀さん。

よ、よし！ちゃんとこちらに注意してるから大丈夫！！だい…じょう…ぶ…？

大丈夫！大丈夫だから！！俺は大丈夫！俺は強い子！！

「いや、なんか多分またここに予期せぬ形で来る気がするんですよ」

「何を言ってるんですか？どうやったらそんな事になるんですか？まったく…」

「よし…なぜか目をつぶって話したのが癖みたいだし今のうちに逃げておこう…」

アデュー、そしてまた会いましょう。椀さん」《コンコン》

縄は後でとけばいいとしてさっさと逃げ出すことに…逃げる逃げる。もしも今逃げたのがばれたらなんかやばいと俺の勘が言っている…。

「…で、ですから…」

「(さっきから椀さんこれしか言ってるこないよ。きつとよっぽど心

配してくれてるに違いない。

…俺はこんな人をだましていいの？ 答えはイエスだ。俺の命の危険があるからしょうがない。

自分の命より思いものなど…あんまりない！！」《コソコソ
ーリ》

「…が…なので…なんですよ。分かりましたか？ あれ、いない？」《ポツーン》

俺のいなくなった山道。

そこにたった一人椀さんだけが取り残されていた。

近くには謎の段ボールがうごめいていたが椀さんは気づかなかった…。

??? 視点

「…これは何？」

目の前で何かが…いや、段ボールという事はわかる。

しかし、なぜかガタガタ風で動いているのではなく

ゆっくりとだが確実に前に進んでいる。

私の発明品にも命令を出せばある程度自力で動くものはあるが

この段ボール、外部に受信機のようなものはない。

つまり内部に何かあるのではないかと私は推測する。

そしてそれを確かめるために私はこの段ボールを持ち上げて中身を

みる。

自身の科学的好奇心の為に。さらなる科学の向上の為に。
私はこの段ボールを…あける。《カポツ》

「なっ！目の前がいきなり明るくなった!？」

「あなた…誰？」

ロボットだと思って自分の中で真剣に考察していた自分がばからしくなった。

千草視点

「なっ！目の前がいきなり明るくなった!？」

「あなた…誰？」

目の前が明るくなったと思ったらどうやら段ボールを
作業着にスカートを組み合わせたような服装に

ツインテールとつば付きの帽子が特徴的な女の子はぎ取られたよう
だ。

ちなみに前進中にとられたためにほふく前進のポーズで向き合うこ
とに。

とりあえず挨拶は返して名乗っておこう。

そんな風な結論に達して取り合えず立ち上がって土をポンポンを払
いながら、

「俺、千草って言います。一応人間やってます。貴女は？」

「あ、ああ、私は河城かわしろにとりって言うんだ。
種族は河童。人間とは盟友だから悪い様にはしないよ」

「ありがとうございます。ところでこちらへんで黒い翼を生やした
変な帽子をかぶった性悪な天狗はいませんか？かなり性悪な
奴なんですよ」

どうやら友好的な感じなので

射命丸の最大の特徴の性悪をできるだけ強調して説明する。

しかしにとりさんはなぜかこちらの顔をずっと見つめてくる。

ま、まさかこれが「あ、あんたもしかしてあの幻想郷に着た途
端に

文の新聞に取り上げられてた外来人かい？」

あ、フラグじゃなかったです。

そしてなんか射命丸の事を知ってるみたいだ。

これはかなり良い感じじゃないかな？

よし、もう少し深く切り込んでいこう。

「そうですけど、射命丸さんからなにか聞いてるんですか？」

「『いや、どんな妖怪もかかってこい！』とか言ってたしもっと凶
暴な感じで

近寄ったらいきなり襲ってくるような感じかと思ってたんだよね」

「ちよっ！！それはでたらめですよ！違います！それはあいつの妄
想です！！」

凶暴だなんてとんでもない。俺、戦いとか嫌いっすから。《キリッ》
冗談抜きで否定しているにとりさんは怪訝な顔をしてまた話した
す。

「え、でも確か『ロリコン』って書こうとしてやめたような後も…」

「嘘です！！すべて嘘なんです！！俺は幼女には興味ありません
！！！！」

自分、幼女とか恋愛対象にならないっす《マガオツ》
いや、本気と書いてマジとよむ本気^{マジ}で。

「ホントに？」

「ホントです」《キリッ》

何でこんなに俺は疑われるんだろう。

顔はキリッという様な顔を作っているが心が痛いぜ。

だが俺のメンタルはこの程度では全く無問題！問題なしだぜ！！

「涙吹けよ」

「泣いてないですよ…」《ボロボロ》

落ちつけ…これは目から汗が出るだけなんだ…

涙じゃない…そう、これは涙なんかじゃないんだ。
だから落ちついて…

「涙…拭けよ」

「だ、大…丈つ夫！行ける！！よしっ！どんと来い超常現象！！」

「何それ？まあいいや、なんか涙止まってるし。で、なんの話だっけ？」

「え…つと、（あれ、なんの話だっけ…なんかすごい重要な使命があった様な気がするんだけどな…」

えっと…何か俺の命にかかわる様な事だった気が…まあいいや！）とくに重要なことはなかった気がします！！」

「そうかい？なら一寸家でお茶でも飲んで行かないかい？久しぶりに盟友と出会ったんだからお茶位は出してあげるよ」

「わーい、やったあ！」

わざとらしく喜んでにとりさんについていった。

イン・ザ・にとりハウス

「さてと、とりあえず一寸飲み物持ってくるね。

そこらへんで座つといて」

「座る場所が無いです」

「そんなの遠慮せずにこうやって作ればいいんだよ！」

機械のパーツやならまだしもそして時々すぐ危なげなスイッチが

あるんだよ？

それを蹴り飛ばして強引

あれ…機械？幻想郷で機械なんて珍しくないか？いや、珍しいというよりほとんど見かけなかったような…あれ？何でこんな所に？あれ？あれ？あつるえええええ？

「あらら？どうしたんだい、そんなテレビ見てたらいきなり前髪が顔を隠すくらい長い女が出てきたときの様な顔して。外の世界ではそんなに珍しいものでもないんだらう？」

「いや、最近は幻想郷の暮らしに慣れてたもので機械なんてほとんど見てなかったんですよ」

ゲーム機も最近は見えてなかったからマジで混乱しただけだ。

そうだ、ゲーム機を見てれば此処まで驚くことなんてなかったはず、俺は文明人。

そう、俺は文明人なんだ。いや、別にこだわるほどのものでもないけど。

「ところでにとりさん、何持っているんですか？」

「ん？ああ、キュウリ味のお茶」《ゴゴゴ》

「よし、味には突っ込みません。その代わりにまずキュウリ味なのに何で紫色してるんですか？」

そして更にもう一つはそれがどうしてそんな威圧感のある効果音を出しているんですか？」

にとりさんが冷蔵庫を開けて持ってきたのは

ペットボトルに入った謎の液体だった。色がきめえ。

「まあまあ、きっと大丈夫だって。一寸見てみ？《カポツゴクゴク》プハッ。」

ほら、なんにも起こらなカハッ!？」

「うおおおおおい!!にとりさん!？貴女がつくつたんじゃないんですか!？」

「…ふ、ふふ、やっぱり…今回もダメだったよ…」

「ちよっ!!貴女それ俺に飲ませようとしてたんですか!？いや、そんなことはどうでもいいから早く解毒剤を!」

今は自分の心配よりもまずは目の前の瀕死のにとりさんを何とかしよう。

きっと俺はそのために此処に来たんだ!!（違います）

「そんな…毒じゃないんだから…そんなの要らなガハア!!」

「にとりさああん!!」

この後、にとりさんは一命を取り留めたが俺は…

「ねえ、これはどういうことかしら?」

「これはですね…「言い訳しないで…?」「はい…」

残念だが新聞は発行されてしまい、それは当然アリスさんの所にも新聞は届いた。

後は……言つまでもないだろう。

第28話 異変の終わりは誤解の始まり（後書き）

NGシーン。もしも文がにとりハウスに来ていたら。

「そんな…毒じゃないんだから…そんなの要らなガハア!!」

「にとりさああん!!」

《ガチャ》「にとり、一寸いい、失礼しました」《サササ》

「まてやあああ!!カメラはどこだああ!!」

文が家から出ていくのを追いかけて

そばに居たにとりさんを置いて全力で文を追いかける。

全ては俺の尊厳と命の為に。

そして一人、にとりさんだけが誰も居ない部屋にポツンと倒れつづやく。

「あれ…私…一人ぼっち？」

第2?話 そうだ…博霊神社に行く。

「ではお世話になりました」

「また来てもいいのよ?」

「また来ますよ、今度はタツクルしないでくださいね」

「反省してるってウあ」

「嘘つけ。じゃあ行きますね」

「まあ一寸待って下さい」

「はい?」

荷物をまとめて人里に帰ろうというところでなぜか妖夢さんに呼び止められる。

何だろう?…まさか、フラグ?春?スプリング?来たか?俺の時代来たか?

おいおいマジかよ?俺は何時フラグを立てたんだ?

「いや、違いますよ?」

「なん…だと…!」

何故毎回考えが読まれるのだろうか…そんなに俺顔に出るのかな?まあ良いけどさ…というかじゃあ何で呼びとめられたんだろう?…はっ!これがツンデレ!?

「いや、今から宴会に行くからです」

「ですよね、ってやっぱり宴会はあるんですね」

「恒例みたいなものらしいですよ」

二回目の宴会か…宴会ってなんか横腹が痛くなるフレーズだな…フレンドールのタツクル的な意味で。

だが俺の耐久力は以前と比べモノにはならないぜ？ふふふ、全く怖くないぜ？

嘘です、超怖い…マジこええ…きつと俺が『はっ！全く効かないぜ！！』とか言い出したら

『ならもつと強くできるね！』とか言つて俺にスペカを打ちこんでくるに違いない。

適当に痛がっておこう。俺も死にたくないからな。

「さて、では行きましようか？」

「あれ、何時の間に準備を？」

「千草が何か考え込んでいる間によ」

「そんなに長い間考え込んでました？」

「いえ、もうほとんど準備出来てましたから」

「えっと…妖夢さん？本当にその大荷物を用意してたんですか？」

「ええ、まあ昨日から少しづつ…」

不憫や…不憫やで…涙が止まらない…

妖夢さんめっちゃええ子なのにかわいそう過ぎて涙が止まらない…
それなのに疲れた様子を出さないなんて…マジええ子やで…。

「よしよし」《なでりなでり》

「ちよっ！千草さん!？」

「よーよし、いい子いい子」《すりすり》

妖夢さんの制止も聞かずに頭をなで続ける。

なんか、さ、頭をなでたくなる小動物みたいなオーラが出てるんだ
よこの子。

だからなでる。これが俺クオリティー。

「ちよっ！あっ……………」

「ほーれほれほれ」《さわさわ》

「むむむ…そおい!?!」《ゴッ》

《ゴギイッ》「カツハッ」

「…フッ、またつまらぬものにタックルをしてしまった」

「…残像だ」

「はっ!?!?」

残像回避余裕でした。

ならゴギイってなんの音か？幽々子さんが門を粉みじんにした音だよ。

ちなみに何十何百も受ければみんなもきつと回避できるよ。

速度はかなり不味いけどタツクルだから直線的な動きだからね。

結局避けるなんて楽勝ってわけよ！

「さて、幽々子さああああん？俺、言いましたよねえ？

今度やったら…どうなるか」《ススス》

「で、でもね千草…」

「まあ時間がもつたいたないので今日は勘弁しときますよ」《モフモ

フ》

「ほっ…」

もういかないといけないので幽々子さんへの制裁はまた今度にして妖夢さんをなでていた手を妖夢さんの持っていた大荷物にまわして掬いあげる。

「さて、じゃあ行きましょうか？」

「ふえっ！え、はい！」

妖夢さんが驚いたように声を出すのでそちらを向いてしまう。

むむむ、いきなりなでるのはいけなかったかもしれない。

妖夢さん顔すごく紅くなってるよ。

というか今更だけどいきなり頭をなでるとか何それ怖い。

うっわ、引くわー、マジひくわー、それはないわー。これはリアル

焼き土下座レベル。

とか考える前に行動するのが俺クオリティ。

「すみませんでした」《ズツズツズ》

「え！？何時の間に土下座を！？…というか別に良いですよ？あれ位」

「いえいえこれは俺のケジメですから」《グリグリ》

更に地面に頭を擦り付ける。

これが俺の反省の深さと傷付けられた妖夢さんの傷の深さだ！！
額から出血しているがこの程度では妖夢さんの心の傷と比べられない。

というか謝るくらいならするなよ、という意見はまあ置いておいてくれ。

やったもんはしょうがない。

「妖夢、なかなか鬼畜ね…千草の頭を擦り付けてるところはもう真っ赤よ〜」

「ち、違っ！というかもう頭上げてくださいよ千草さん！！」

「うおおおおお！！俺の土下座は後二回変身を残してるぜ！！」《グググ》

叫んでさらに力を込めて頭を地面に擦るつける。

それはもう地面にめり込むくらいに。

「なっ！！本当に頭がめり込んでる！？」

「千草さああん！？お願いだから頭をあげてええええ！！」

「前が見えねえ…後何も聞こえねえ…」

地面に埋まりすぎてもう何も聞こえない。

「…っ！？頭どころかもう腰まで埋まってる…！？」

「千草さああん！！…もういいから土から出てきてください！

！…！！」

行けるとこまで行く。

これが俺クオリティー。

「痛い！！痛いですって！！」

「反省してください！！…あれ、反省したらだめなのかな？」

俺の頭の傷を治療しながら怒りだす妖夢さん。

ちなみに幽々子さんはもう待ちきれないと言って先に博霊神社に向かつて飛んで行った。

まあ多分さつきはやらなかったが治療の後に俺に怒られるのが嫌で逃げ出したに違いない。

そして残って治療してくれている妖夢さんも何か考えこみだしてしまった。

やはり此処は俺の土下座しかないようだな…。《スツ》

「土下座はなしですよー!!」

「うええ〜、じゃあどうすればいいんですか〜？

へいへいゆー、教えちゃいなよお〜」

「そ、そうですね…では頭を…」

「頭を…?」

打ちつければいいのだろうか？

もう、しょうがないなあ〜。

此処は【必殺土下座人】の二つ名を持つこの俺が伝説の音速三回転首ねじり土下座スペシャルを…。

「頭を…な、なでてください」

「え!?!」

えっと、撫でる？

意味は確か…

- 1 てのひらで軽くさわり、さする。「犬の頭を ・でる」
- 2 物や風などが軽く触れる。「高原の風が頬を ・でる」
- 3 髪に櫛くしを入れる。

「化粧鏡を取出し鬢を ・でて」 荷風・腕くらべ

- 4 大切にする。いたわる。いつくしむ。

「善を ・で悪を罪するは天なり」 読・雨月・貧福論 g o o
辞書から引用。

さて、どれが正解だ？

「えっと、千草さくん？反応が無いと私すごく恥ずかしいんですけど？」

「えっと今一寸考え込んでましてね。

ところで結局どついう意味なんですか？」

「うええ？頭をなでてと言ったのにどついう意味でとらえようとしてるんですか？」

いや、だからさつきも言ったんですけど…

まあとりあえず説明するのも面倒だからメタ発言で乗り切ろう。

「えっと、上を見てくれると嬉しいなってます」

「上？」

「地の文とも言います」

「？なんのことですか？？」

だめだ、やはり無理っぽい。

ならばしょうがないので口頭で説明しよう。

「1 てのひらで軽くさわり、さする。「犬の頭を・でる」

2 物や風などが軽く触れる。「高原の風が頬を・でる」

3 髪に櫛くしを入れる。

「化粧鏡を取出し鬢を・でて」荷風・腕くらべ

4 大切にする。いたわる。いつくしむ。

「善を・で悪を罪するは天なり」 読・雨月・貧福論

g o o

辞書から引用。

さあどれだ!？」

「いや、普通に一番ですよ」

「ファイナルアンサー?」

「え、ふ、ファイナルアンサー!」

妖夢さんが発言した瞬間に包帯の余っていた部分をちぎって

「残念!!!10万の小切手は破られてしまいました」

「ええ!??」

「そして不正解の罰ゲームが確定です!!」

「ええ!??」

「観念するがいい、ふはははは」

「うえええええ!??」 《ススス》

バカだなあ…この狭い部屋で後退りして逃げようとしてもすぐに壁にぶつかるときにきまつてるじゃないか。ほら、もうすぐ壁が…

《ポフツ》「あっ！」

案の定壁に詰まって動く事ができなくなる。そしてそんな状況でも全く手を緩めずに距離を詰める。

「やめっ！！来ないでええ！！！」

「叫んでもどうにもならんぜよ、ふひひ」《スウツ》

「いやあああ！！」《バツ》

罰ゲームを実行しようとして手を伸ばすとそれに反応して妖夢さんは手をクロスして目をつぶりこれから来るであろう衝撃に耐えようとする。しかし、俺はその手をゆっくりと妖夢さんの頭にもっていき…

《なでなで》

「ふえっ？」

そのまま頭をなでる。

そして妖夢さんは想定していた状況と違いに思わず変な声を上げる。

「妖夢さんどうですか、罰ゲームの感想は？」《なでりなでり》

「え？これが罰ゲームなんですか？」

「そうですね、さあ感想どうぞ〜」《ススス》

「そ、そうですね、悪くない気分です」

「それは良かったです」《モフモフ》

罰ゲームじゃないだろうって？

細げえことはいいんだよ！！

「そう言えば妖夢さん、何で頭を撫でてほしいなんて言ったんですか？」《モフモフ》

「そ…それはですね…言わなくちゃだめですか？」

「ん〜、ふと気になっただけですから言いたくないなら良いですけど…」

「と言つても思ったか？無理やりにも聞くわ！さあ教えてもらいましょうか？」

「え、ええ？うう、分かりましたよ。」

「恥ずかしいからあんまり話したくないんですよ」

「顔紅くなってる…これはもしかかなり不味いのか…
流石に無理やりはまずいかな？」

「だがやめない。さっさと話してもらおうか？」

「げ、外道！」

「なんとも言うつが良い!! ささっ、早く早く!!」

「うっっ、それはですね…」

恥ずかしそうにしながらも話したす妖夢さん。

これは長くなるに違いないと俺の勘が言っている。
心してかからねば…。

「昔祖父に撫でられてたのと同じような感覚だったんです。
だから撫でもらおうと思って…」

「え…短…え？」

いやいや、きつと言葉で語れない何かがあったんだろう。
それは悪い事を聞いてしまったな…やはりここは土下座しか…。

「あの…また土下座するのはやめてください」

丁寧に断られてるのが実は一番心に来るよね…。
いや、俺だけ? そんなはずはない…はず、だよな?
というか土下座以外でどう解決すればいいんだ…もう俺には…土下
座しかないって言うのに…。

「あの…出来たらまた…頭を撫でてくれませんか？」

「はい? え、あ、はい! 俺で良いならいつでもいいでしょ!」

おおおおい! 噛むなよおい!!

妖夢さん顔真つ赤だよ!! 必死にこらえてるのが丸分かりだよ!!

かくなるうえは此処からナイスフロローを…

「今のはたぎっ！！」《ブバツ》

妖夢さんの口から大量の唾液が噴き出された。

そしてその空気に耐えられなくなり荷物を抱えて白玉楼から駆けだした。

第2?話 そうだ…博霊神社に行く。 (後書き)

なんと言うタイトル詐欺。

これはひどいってレベルじゃない…。

第30話 再開とは様々な障害の果てにあつたりなかつたり（前書き）

『NGシーンにかなりの時間掛かっているのにクオリティーが低い件』

それは気にせずに本編を見ようぜ！

『安心と信頼の低クオリティー』

第30話 再開とは様々な障害の果てにあつたりなかつたり

「良かった…まだあんまり開始から時間経ってないみたいだ」

走る事数時間。

やっと博霊神社に辿りつく事が出来た。

この荷物持つてあそこから歩いてくるとか妖夢さん何時間かけてくるつもりだったんだ…？

全力疾走してこれなんだから…間に合わないんじゃないか…？

まあ荷物はこうしてもってきたから大丈夫だろう。

さっさと荷物を渡して宴会に参加しよう。

幽々子さんは何処かな？

「あ、お〜い、千草〜」

「お、チルノ」

「久しぶり…って程でもないか」

声をかけられた方向をみるとリリーさんと一緒に座って飲み食いしてるチルノがいた。

すっかり仲良くなつて…お兄さんは嬉しいです。

まあここでうれし泣きするのもあれ何で少し軽口でも叩いときますかな？

「リリーさん、家のチルノが何か迷惑をかけてませんか？

この子位の歳の子はヤンチャ盛りだから心配で…」

「一寸千草！それだとアタイが常に周りに迷惑かけてるみたいじゃ

ない！」

「あれ？なんかおかしいところあった？」

「ないですね〜」

「ですよね〜…って何言わせとんじゃあああああ！…！」

「おいおいチルノ、他のみんなに迷惑だろう？」

「早速迷惑をかけてますよ〜」

「うなああああああ！…！」

よし、良い感じにからかえたので次に行こう。

多分チルノはリリーさんがなだめといてくれるさ。

俺はさっさと幽々子さんにこの荷物を渡さなくてはならないからな。

『千草あああああ！…！』

「この声は…まさか…」

この可愛らしいはずなのに俺の恐怖を引きずり出してくるような声…

これは…不味い！

急いで周りを見渡すが何処にもあの無邪気な悪魔の姿は見えない。

気にしすぎか？気にしすぎだよな？ははは、そうだ！そうに違いな
い！良かった良かった。

「千草ああああ！…！」《ヒュウウウウ》

「落下音?…上か!?’ 《バツ》

「下だ!’ 《ズボツ》

「〒 ; ;!?’

フランドールが股下から飛び出してきた事により下半身にすさまじい衝撃が走る。

そしてその衝撃は涙腺が崩壊するには十分な痛みを千草に与えた。

「……っ!?フ、ラン…ドール?下っからとっび出して、くるのは…やめような?’

へたしたら…俺、死ぬから…なっ、なっ」

「ん?よくわかんないけどわかった」

股を抱えながら唸るだけだからかな?

絶対わかってないよ…でも、息子が絶命寸前なんだよ?

息子にダメージを受けると痛すぎて言葉がつまくだらないんだよ…

いたい…痛いよ…息子が…悲鳴を上げてるよ…誰か…助けて…って

やっってる場合か!

フランドールはもう行ったな?さっさと幽々子さんを…

「あら千草、もう怪我治ったのね」

「あ…アリスさん…」

不味い…これは天が俺に嫌がらせをしているとしか思えないシチュエーションだ。

フランドールの悶絶頭突き アリスさんの即死弾幕のコンボは不味

いと言っているだろう？
だから早く誰か助けてくれ！！

「ところで何でそんな荷物持ってるの？」

しかし現実には非情である。

荷物の事をつ込んできやがった。

これは無難且つ手短に済ませてにげ出すしか…ない！（断言）

「これは幽々子さんに届けるように妖夢さんから預かったんですよ

いや、奪ったんだけど聞こえの良いように言っておこう。

まあ、とくに地雷もない無難な受け答えだったな。これでつまらなくなつてさつさと帰って行くだろ。

俺マジ策士。完璧すぎる。

《ピクツ》「ふーん、女の子に囲まれて良い御身分ね」

あつるえ〜？おかしいな？

俺何でせめられてんの？というか女の子だらけなんて言ったら

人型妖怪のほぼすべてが女の子なんですが？俺はどうすればいいんですか？

だが、ここでそんな事を言つと血祭りヒヤツパーなのでなんとかうまいいい訳を…

「ねえ？何をそんなに考え込んでるのかしら？」

オワタ…なんかもうオワタとしか言えないぜ…

なんでこうもタイミングが良いんでしょうかこの人は！

これは悪意とかそんなもんじゃない…圧倒的…殺意…っ！

だめだ…こいつと戦うな？いや…相對しているすることすらおぞましい…
それほどの…殺意…っ！！
そしてそれを感じ取り逃げる俺。

《スツ》

「っ!？」

しかし…遅かった。

逃走用の演算にかかった時間は1秒もかからなかった。
だが…遅い。

その速度ですらアリスの前では遅すぎるのだ。

そして0.1秒かかったかどうかの時間で縛られる千草。

「ねえ千草、何で逃げるのかな？かな？」

「あ、アリスさ〜ん？口調が連続ループものアニメの某ヒロインみたいになってますよ〜。
落ちついて〜、おちついてくださ〜い」

「ねえねえ、そんなことはどうでもいいの？」

この人マジ怖いよ…怖すぎて体からいろんな液体が出るよ…
このままだと俺が悪いとか悪くないとかそんなの関係なくフルぼっこだよ。

なにか…何か生き残る方法は…
このときの千草の脳は一瞬で地球を30周するほどの速度でフル回転していた。

なにか…何かないのか…俺の生き残る方法…っ！

今は宴会中…まだあまりみんなに酒は回っていないはず…

誰かアリスさんを抑えられるほどの力を持ち、なおかつ俺を助けてくれそうな人は居るか？

しかし…この時の千草…圧倒的他力本願…っ！！

だがっ…そこに一筋の光が差し込む…と良いなあ…あっ！魔理沙さん！助けて！！

『す・ま・ん』

ノオオオオオウツ！！

ばれないように口パクで伝えてそそくさと帰りやがった！？

畜生っ！もうどうしようもないぜ！？ないのぜ！？誰か！誰かああ！！？

みんな顔をそらして逃げないで！？

ヘルプミイイイイ！！！！

「ねえ千草？さっきからキョロキョロしてるけど、何してるのかな」
「？」

「いや、何でもありませんよ！ないですよ！あるわけありませんよ！！！！」

こうなったらもう自分しか頼れるものが無い…。

なにか脱出に役立つものは…あれしかない！

「あ、あれはなんだ！？」 《バツ》

「？」 《スツ》

「っらああああああああああ！！！！」 《ブンツ》

その場にあつた日本酒をアリスさんの方に投げる。

このままならアリスさんの服がぬれてしまつて一旦服を取りに帰るはず。

あたいつたら天才ね！！

「あら危ない」《スッ》

「くっ！？につがつすつかあああああ！！！」《バチ》《パリーン》

「っ！？」《ビシャッ》

「っしゃ！」《グッ》

よしっ！避けられときはどうなるかと思つたが電撃でコップを打ちぬき割つて

事なきを得たぜ！…さてよ、これ…アリスさんが帰るより先に俺を殺しにかかつてくるんじゃないか？

「千草？何してるのかな？」

「あ、ははっ、あははは！お終いだ！全部お終いだ！！」

だめだあああああ！！！アリスさん！そこはキャッー！！と
か言つてさっさと帰りましようよ！！

畜生！もう俺はどうすればいいのかわかんないよ！！

だめだ…もうどうしようもないや…諦めた。もう駄目だ。生き残ることなんてできないんだ。

「いつそひと思いにどうぞ…」

「良い度胸ね、ひと思いに貫いてあげるわ」

アリスさんが人形を取り出す。

スペカを取り出すしぐさが無いという事は全力でくるようだ。

このままだと像が蟻を踏み潰すようにあっさりと殺されるだろう。

…だから、抵抗する。《バチィッ》

「さて、貴方の電気信号の動きを止めさせていただきました。

動くことはおろか喋ることも能力も使えないと思いますよ」

相手の電気信号の動きを強制的に停止させる事によって全ての動きをとめる。

全ての感覚を奪い取る事が出来る…はず。

さつきから演算を大急ぎで組み立てたがしゅっちゅうアリスさんと一緒に居たという事と

電気信号の動きが怒りで単調になっていたからできただけで

初対面の相手に使うのはかなり時間がかかるからあまり実践的ではない。

能力なしで戦うなんて無理すぎるでしょう。

「じゃあ気絶しててもらいましょうか？」《パチッ》

電気信号の演算をしつつ残りの演算能力で小規模の電流を発生させアリスさんにそっとな押しあてて気絶させた。

「ふう、頭痛てー…アリスさんは神社の中にも運んどけばいいかな？」

アリスさんを背負って神社の方に運んで行った。

博霊神社賽銭箱前

「霊夢さん、布団貸して下さい」

「先刻はお楽しみだったようね」

「何を言ってますか!？」

お楽しみどころか死ぬところだったわ!

何処をどうすればお楽しみできるんだよ!

スリル以外の何でもないわ!! 怖くて夜も眠れないよ畜生!!

「まあ冗談は置いて服もぬれてるし

着替えさせといてあげるからこっちに寄りなさい」

「あの、何故に賽銭箱を指差してるんですか」

「もう、分かってるくせに」

まずいな…お金持ってきてないよ。

レールガン用のコインでも入れとこうかな…

よし！今度持つてくることにしてコインを入れておこう。

「ほお〜れっ」《チャリ〜ン》

「毎度あり〜」

上機嫌な霊夢さんにアリスさんをあずけてその場を後にした。

「そろそろ見つかってもいい頃だと思っただけだな〜」

『そう上手くはいかないんだよね』

う〜む、さっきから歩いてるんだけどなかなか見つからないぜ。

みんなの楽しそうな雰囲気は妬ましい…ああ妬ましい…。

一体幽々子何処に行ったんだ？

『ここが踏ん張り所だよ、頑張りな』

「そうですね…俺頑張ります…」

はあ…そう言っても心が折れそうだよ…割と本気で。
くそう…悔しいのう…悔しいのう…あれ、俺は誰と話をしているんだ…？

となりに誰も居ないのに…っ!？

「もしや…幽…霊…なのか？」

『いやいや、幽霊じゃないよ』

「や…やっぱり聞こえる…怖っ!ちょーこえええええ!!!」

『テンション上がりすぎじゃないかい？』

「むしろテンションを上げていかないと恐怖に押しつぶされるわ!というか正体を現せ!表してください!表して下さいませんでしょか!？」

これが安心と伝統の三段活用ってやつだ…多分。

さて、こっでこれで幽霊も出て来てくれるだろう…きつと。

『私の姿を見たいか？』

やはり聞こえる。まだ居るみたいだ。

よし、下手に出まくるのはきつと良くないから此処はナチュラルな感じで行こう。

「あゝあゝ、君は特に包囲もされていないが

早く姿を現した方が私の世間体の為だ。さあ早くしたまへ!

さあ！さあさあさあ！！さもないと俺が変な人扱いされるぞ！さあ早く！」

みんなの視線が背中とかに突き刺さる。
だから早く迅速且つ高速でお願いします！
さもないと俺が死んでしまうから！！

『自分の身可愛さに人に出てこいなんて良い性格じゃないか。
あと変な目で見られたくないんだっいたら話しかけなきゃいいんじゃないか？』

「いや、それもあるけどこっちは見えてるのに
そっちは見えないなんて卑怯ですよ！正々堂々と姿を現してもらいましょうか！さあ早く！」

『…へえ、卑怯…、卑怯か』

あれ？なんか死ぬ気がする…！
いけない！このままではいけない！そんな気がする！
だ、だが訂正したらしたでなんか理不尽な暴力が俺を待っている。
そんな気がするよ…そんな気しかないよ…
しかし俺もこんな時の解決法は熟知している！…といいな。
平謝り？ハハツワロス。

「で、結局姿は見せないんですか？」

「だが見せない。それが私のアイアンディデー」

「そんなもん捨ててかかってこいよ！…あれ？」

テンションを上げすぎて気付かなかったがいつの間にか誰も居ない様な所に来てしまったぜ。

こんな所に用はないぜ！さっきまでの場所でさえ見つからなかったのに

こんな所に居るわけがないのさ！…さてよ、本当幽々子さんは此処に来ていたのか？

まさかまだ来てないんじゃない？…うん！きつと来てないんだよ！

だから俺は一寸此処で休憩しよう！きつと誰だつてそーする！俺だつてそーする！

だから…俺はっ！此処で休憩するんだ！！なに、少しだけ…少しだけ休むだけだから…

だから…もう良いよね…？ゴール…してもいいよね…？

『ダメだろ』

「ですよねー」

どうやらゴールは許されない様だ。

しかし逆に考えればさっさと見つければ休憩できるんじゃないかな？いや、それ以外に考えられない。考えたくないんだ。

で、だ。此処も逆に考えればすごいそうじゃないか？と思っただんだ。

他の所も捜し尽くしたし。だから…俺は…この場所を…探索するんだ。

ゆっくり行こう。ゆっくり且つ鈍足で更にすっばんがごとき速度で探そう。

「ところでどこか心あたりとかないですかね？ノーヒントはきついですよ」

『じゃあヒントその一…』

「しつとるんかい！」

意外なところで情報を入手してしまった。
ふふ…俺、ついてるな。

『綺麗な桜の下には死体埋まってるんだよ』

「つまり…どういうことだっばよ？」

『もう少し考えるそぶり位見せてもいいと思うんだけどね』

「あんまり頭良くないんですよ」

後考えるのが面倒だから。

すぐく面倒だよね、頭使うのって。…という冗談は置いておいて考
えようか。

まあ多分桜というワードからきつとこころ辺に桜の木とかあるんじ
やないかな？

そして死体というワードから亡霊の幽々子さんが居る。…といいな
だがきつとこんな時の推理はあたるはずさ。

俺は体は大人、頭脳は子供の愛称で親しまれるこの俺の推理が外れ
るはず無いさ。

フフフ、推理部とか作っとけばよかったかな？

「さあ！早く行くぜ！」

『きつと推理はあたってるとー！』

「あれ？推理したとか言いましたっけ？」

『気にするな！そんなことより早く行こう！』

そつだ！俺は：俺には！こんな所でゆっくりしてる時間はないんだ！
こんな事をしている間にも楽しいはずの宴会の時間は過ぎて行つて
るんだ！！

はやく探さなければ！

『頑張りな〜』

少年探索中・・・

「よし！ヒント2いつてみよう！！」

『早っ！？もうちょっと頑張ってみようよ！』

俺の嫌いな言葉ランキング第一位がぶつちぎりで無駄な努力なんです！

だからヒントを！全力で頭を下げてでもいい！プライドなんて無駄だ！
！そんなものはとうに捨てた！

『ヒント2！』

「イエエエエエエエイツ！！」

どんなものだろうか？

ふふふ、楽しみだね。俺の推理力が試されるね。

まあ俺に掛かればどんな問題も1+1みたいなものだけ。

さあ来い!!

『ヒント2。1 + 1 = ?』

目から鱗が落ちるとはこのことに違いない。

…落ちつけ、1 + 1の様なものと言ったが本当に1 + 1が来るとは思わなかったよ。

良く考える。まずは『1 + 1 = ?』というヒントを解読しなければ。さすがにそのまま2なんて言う訳はない。2ってどんなヒント? そんなヒント訳がわからない、

だからきつとこの答えは【田】または【1-1】、もしくは…

『おゝい、冗談だぞ?』

「えっと、仮に田だとしてそれはどういう…」

『聞こえちゃいないね。嘘は嫌いだけど冗談ならこんなにうまくいったのか私。』

いや、冗談はなかなか良いものかも知れないね』

「うゝん…うゝん」

『もうそろそろネタばらししてあげようか。おゝい、千草』

「ブツブツ…ブツブツ…」

『あらら、全然聞こえてないね。やっぱり冗談や嘘はいけないね』

そう言うのと体を実体化させて全力で千草の脇腹に拳を…叩きこむ!

《ズンツ》

「　　っ!？」《ヒューン》

何々!？なにが起こってるんだ!？

なぜ俺の脇腹に鈍い痛みが走っている!？

さらに何故俺は吹き飛んでいる!？

そしてさっきのヒントはなんだったんだ!？

畜生!訳がわからな! 《ズドォン》

やれやれ、この音と前が見えない事、そして頭の痛みから推理するに道に突き刺さったな？

ふう…何でこうも今日についていないのかな？

前にも増して運が悪くなってる気がするよ。

…そんな事は置いといて早く頭を地面から掘り出すか…。

「よっこい…正一! 《ズボツ》…あ、見つけた」

「あらあら、何でここがわかったのかしら?」

探し続けた人ってさ、きっかけがあれば割と簡単に見つかるもんなんだぜ?

第30話 再開とは様々な障害の果てにありたりなかったり（後書き）

NGシーン。

霊夢さんは博霊の巫女ですから。

「あの、何故に賽銭箱を指差してるんですか」

「もう、分かってるくせに」

まずいな…お金持ってきてないよ。

レールガン用のコインでも入れとこうかな…

よし！今度持つてくることにしてコインを入れておこう。

「ほおくれっ」 《ポイツ》

《シュ》 《カツ》 「何のつもりかしら？」

「な…何が…ですか？」

不味い…コインを投げてる途中に打ち落とされたからそれをチエックされたらおしまいだ…。じ、磁力でそつと引き寄せ… 《カカツ》
は…針！？

なんてももの投げてきやがる！

「あれ…？その面白そうなものは何かな…千草？」

「う…う、があああああ…！！！！」 《バチィ》

地面に反発する磁力を全力で発生させてその場から離れる。

この速度で逃げれば流星に追いつけまい！後の事は考えずに今はただ逃げる！

他の100万人が生きている未来なんかより俺が生きている今が一番重要なんだ！

みるみるうちにレイムさんの姿が小さくなっていく。

よし、これで完全に逃げられ…

『…符【…想…印】』

何かが聞こえたと思った瞬間に七色の玉が出現してこちらに向かってくる。

こいつは夢想封印！？

一発でも喰らったらそのままずる後の玉に打ちこまれる危険性のある

凶悪なスペル…だったような…最近は何ら喰らって無かったから良くわからないぜ。

…あれ、何時の間にそんな近くに弾幕が…《ピチューン》

第31話 これが…俺の本当の力…？（前書き）

『タイトルが中二な件』
心はいつも14歳。

『黙れハゲ』
ハゲてねーよ！！

第31話 これが…俺の本当の力…？

「あらあら、何でここがわかったのかしら？」

地面から頭を引っこ抜いて顔を上げるとそこには探し続けていた幽
々子さんがいた。

「どうかこの人見かけないと思ったらこんな所に居たのかよ。
どれだけ苦勞して表の方を探しても見つからない訳だよ畜生！」

「まあそんな事はいいのでこれ荷物です」

「ん、ありがとう」

「次からはもつと見つけやすい所に居てくださいよ」

「それは無理だ」

「秀囲気が…変わった!？」

「これはなにか深い事情が…」

「だって…千草を困らせたいから!」

「ははっ、しょうがないな…って言うかああああ…!!…!!…!!しよ
うもない!とんでもなくしょうもないじゃないか!…畜生!少しシ
リアスになっちゃったじゃないですか!…」

「俺の心配を返せ!返せええええええ!!…!!」 《ドンドン》

四つん這いになって地面をたたくきながら叫ぶ。

くそ！くそつ！1年に数回しかできないシリアスをこんな所で！

こんな所でええええ！！！！シリアスをするとかく疲れのに！畜生おおおお！！

「まあまあ落ちついてこれでも飲んでください」

「あ、ありがとうございます」《くくくく》

妖夢さんから変な味がする水を受け取りそれを飲み干す。

あれ？妖夢さん？何故に妖夢さん？何でここに居るの？俺かなり全力で走ってきたよ？

先に白玉楼でたよ？なぜ？ホワツツ？

「どうしたの千草？何故ここに妖夢が居るのかわからないと思っ
ているような顔して」

「なぜそうも正確に俺の考えが読み取れるんですか！？」

…まあいいや、そんな訳で説明プリーズ妖夢さん」

「ああ、それなら千草さんの自転車を返すついでに漕いでいこうか
と思ったらすごいスピードで
此処まで来たんですよ」

…おかしいな、俺の自転車で来たというには傷が少ない。

俺は羽を使って止めたが妖夢さんはどうやってとめたんだ…あの自
転車を。

「あら千草、そんな妖夢がどうやって自転車を止めたかわからない

と言わんばかりの表情をして」

「畜生！何でわかるんだ！と言いたいところだがグツジョブ幽々子さん！そんな訳で説明プリーズ！」

「え？止まりましたよあの自転車」

「ああ、そういう事か。おk理解した」

つまりまた男女差別か。

ふふふ、やってくれるじゃ無いか？あの自転車もまた俺には厳しいんだね。

はあ…不幸だ。これくらいは言ってもいいよね？俺これもダメだったらまじ不幸。超不幸。

泣けてくるレベル。

「貴女が不幸なのには理由があるって言ったらどうする？」

「なんか出てきたあああ！？」

目の前にいきなり変な帽子をかぶった金髪の女の人の顔が！？

しかも良く見ると上半身しかないじゃん！？

うわああああ！！幽霊！？半霊、亡霊ときたら幽霊かよ！

…あれ、どこかで見たような顔だな…確か前に会った事があった様な…まさか夢で！？

まさか俺は魔法少女！？男なのにゾンビ且つ魔法少女だったのか！？チエーンソーで戦うのか！？

「あら、紫じゃない？遅かったわね」

「まあ、一寸やることがあったのよ」

幽々子さんに話しかけられると口元を扇で隠しながら返事をする幽霊（仮）。

どこことなく仕草が胡散臭いさを醸し出したりして

…胡散臭い…扇…変な帽子…このワードから導かれる答えは…。

「もしかして…八雲…紫さん」

「そうよ、久しぶりね。こっちに招待して以来かしら？」

やはり俺に超電磁砲としての力を渡し、幻想郷に送りこんだ張本人八雲紫そのひとだった。…マジかよ。

送り込んだらそのまんまにしゃがって、そのせいで死にかけたわ。

プロローグ参照

…まあ、良いけどさ。

「ところで、さっきの話一寸詳しく教えてもらいましょうか？」

「いいわよ、私は心が広いから」

「わ〜、ぱちぱちぱちぱち〜」

一寸イラつときたのは内緒。

だが此処で機嫌そこねると多分メンドイから適当にでもほめておこう。

さて、聞かせてもらおうか？不幸の根源の説明を…

「その前に此処には他の人もいるし一寸スキマへご招待するわ」

《パカッ》「…激しくデジャブ…」《ヒュウウウウ》

突然足元に現れた亀裂が開き、足場が無くなった俺はそのまま重力に従って

その中に飲み込まれた。

この展開…久しぶりだな…。ふふふ。

紫視点

「じゃあ、幽々子また後でね」

「あら、私には教えてくれないのかしら？」

「残念だけど彼の判断を鈍らせるといけないからね」

「判断…？何か面白そうな匂いがぶんぶんするわね…」

いけない…幽々子が悪い顔をしているわ…

早々に切り上げて逃げる事にしましょう。

「ねえ紫…」

「あ、あんなところに…」

「ん？」《スッ》

こんな事でだまされてくれる幽々子に感謝しながら私はスキマに潜った。

スキマの中 千草視点

《ヒュウウウウウ》 「俺は…過去の自分を超える…!!」 《バサッ》

あの時（プロローグ参照）のようにただ落下はせずに電翼を出してゆっくりと落下する。

ははっ！これでまたあんな思いは「あ、一人追加ね」 《ドサッ》 「っ!?!」

いきなりの上からの衝撃に驚き、演算が中断され勢いよく落下する。

《ズドン》

「あらあら、案外情けないわね」

「うつつ…そんなこと言っても無理ですよ…」

あと途中から乗ってきたくせにすごく図々しいと気づいてください
…」

ちなみに今の体勢はもちろんラッキースケベなど無く

うつ伏せに倒れている俺の上に追い打ちをかけるように紫さんが座っている状態だ。

「まあ、結論から言うとしたらあなたの能力なのよね」

さっきのダメージがぬける間もなくいきなり語りだしたから何かと
思ったら

俺の能力とか言い出したよこの人…やっぱり頭がおかしいんじゃないか…

「ドリ符【安心と信頼の金ダライ】」《ゴオン》

「何故!？」

「貴方の胸に聞いてみなさい？」

「まあまあそれは置いといてさっきの説明の続きを…」

「いやいや置いとかないわよ…」

「まあまあまあ…」

「いやいやいや…」

このやり取りを数十分後……
結局折れた紫さんに補足して貰う事に。

「貴方が此処に来るまえに飲んだ薬の作用は【飲んだ本人の夢を實現させる】という素晴らしい薬だった」

「マジで？」

「マジよ」

ちよっ！？勿体無いじゃん！！畜生！それならもつと何かすごい能力にしときゃよかった！

「しかし、その薬はじつは試験段階で更に凶悪な副作用があったのでした」

「うおおおおおい！！」

この野郎…そんな危ない物を平然と飲ませてたのかよ…
そして俺のツッコミを受けてけらけら笑ってやがる…鬼だ…悪魔だ。
妖怪だけどね…。

畜生…っ畜生！かっこつけるんじゃないかった…っ！やはりプロロ

ーグ参照

俺ってホントバカ…。

「で、その副作用と言うのが【不幸を集める程度の能力】を発現させるというものだった訳ね」

「何それ悲惨…」

まあ風薬でも副作用があるんだからあんな夢の様な薬なら副作用もすごいものになるんだろっけどさ…

そういう事なら先に言っとか…いや、行っても止まらないか、止まらないよな？それが俺って奴だもの…ってかっこつけてみる！《キリッ》

「コロコロ表情を変えるのね？」

「それが俺クオリティー」《キリッ》

再び顔を引き締めて返事をかえす。

決まったな…これは俺が女でこれをやられたら惚れることはなくむかついてぶん殴るレベル。

そしてそこから恋愛に発展させる練習は何十回もやった訳ではないが、来い！

「で、さっきの続きだけど…」

「無視とかひでえ…」

その発想はなかったぜ…

しかし、予想外だからと言っても、修正できない程じゃない。

「あの…」「周りの不幸を肩代わりしてるのよね、無意識で」

ガン無視ですかそうですか。

良いぜ、ならこっちだってやってやるうじゃないか…。

「紫s」しかも貴方が電撃を使う度に「y」薬の効果が増幅するわ…」

上書きを上書きした所で更に上書きされたぜ…

そりゃ言葉も出ないわ畜生お…しかも二回目はまともに発音もさせてもらえ無かった。

撃沈だよ、完全に負けたよ。貴女の勝ちだ紫さん。全く勝てる気がしない。

だから今はおとなしく話を聞いておくことにするぜ。

「そ、こ、で、なんとその不幸を取り除く薬が此処にあります」

「あるんかいつ!?!」

スキマを発生させてその中からカプセルの様なものを出したかと思つたら

不幸能力が治る薬だつて?

そんなものあるなら最初から出してくれよ。

「ではありがたくいただきます」

スツ（俺が紫さんの持っている薬に手を伸ばす音）

ガコオン（タライが頭にぶつかる音）

ゴロゴロ（頭を抱えて痛みにもがき苦しむ音）

「な。何で？」

「説明はまだ終わってないわよ？」

「タライを落とす必要はあつたんですか？」

「無いわ」

「無いんかいつ！」

遊ばれてる！

俺絶対この人に遊ばれてるよ！

この人さつきから扇で口元隠してるけど体が小さく揺れてるし
クスクスとか音が微妙に聞こえてるんだよ！

「で、この薬で副作用を消すのだけれど」

「何か不都合が？」

薬を飲むだけで消せるならさつきと消してほしいんだけどな。
まさかそんな死ぬ訳じゃないだろうし。

「一緒に発電能力も消えるのよ」

「やっぱりねっ！…え？」

命じゃないんだ…命じゃないけど、この能力がなかったら幻想郷でどう生き残れと？

つまり不幸か命って事か？そんなの命に決まってるじゃないか？
全く紫さんも人が悪いな…。いや、妖怪が悪いってか？まあそんなのはどうでもいいや。

今回は縁が無かったね。俺ドンマイ。

「じゃあまた今度の機会と言う事で、ていう顔してるわね」

「そんなにわかりやすい顔してるんですか俺！？」

こいつはひどいな。

どんだけ心を読まれるんだろうか俺は？

もうこれも副作用で良いだろ…不幸な気分になってるからさあ。

「大丈夫、能力が消えたら私が責任を持って外に送り出してあげるわよ」

「つまり能力を失って外で平穏な生活を送るか、幻想郷で不幸つきあつて行くかってことですか？」

「まあそんなところね」

毎日命が危なくなる生活と平穏で安全な生活。

普通なら安全に生きたいけど…何で俺はこんなに悩んでるんだ？

ウヌウ…むむむ…

「そんなに悩んでるならお試しコースに行くといいわ」

「お試しコースってな」考えるより、感じろってことよ」「それって

どついう《スウツ》

ああ、なるほどね」《ヒユウウウ》

理解した。

つまりスキマツアーですね、わかります。

第31話 これが…俺の本当の力…？（後書き）

嘘予告！！

スキマツアーの先は元の世界だった。

しかし、そこにはしぶとくも生き残る妖怪の罾があった。

その罾に千草はどう抗い、そして幻想郷に帰ることはできるのか。

『俺の友達に…手を出すなああああああ！！！！』

次回『第32話 幻想と現実の境界で見た物』乞うご期待。

わかってると思っけど嘘ウサ。

第32話 引き際を弁えないと大変なことになります(前書き)

夏休み…終わった…畜生!

だが、テストも終わった!!

作者のテストの点数もな…

今回R - 15です。

ちなみに嘘予告は99%の嘘と1%の真実でできている。

第32話 引き際を弁えないと大変なことになります

《ヒュウウウ》「飛んでるぜ、いえ〜い」

正しくは落ちてるぜ、そんな訳で皆の心の親友こと千草さんは今汚い妖怪の罠に掛かって

いつものように空を飛んでる俺はどうすればいいと思う？

電翼を使って飛行したいところなんだが能力がほぼ使えない。

きつとスキマ中での紫さんが能力で使えなくしたんだと思うけど…いや、理由なんかどうでもいいか。まず俺がこの状況から助かる方法を考えなければ。

下はいろんな明りがみえてるから此処は元の世界か？

という事は冷えきった現代社会で他の人の助けは期待できないよな？

「で、一通り現状整理もできたしそろそろ助けが来てもいいんじゃないか？」

しかし、現実是非常である。

ドンドン地面が近づいてくる。いや、俺が地面に近づいているのか。とりあえずできる限りの磁力を発生させて着地の衝撃を緩和させる。両手を全力で上下に振る。俺は鳥！空を優雅に飛び立つ鳥なのさ！

「うおおおおおおおおおおお！！！！」 《バタバタバタタ》

俺は…飛べるんだあああああ！！！！ 《ドガツ》 《バキツ》 《ズドン》

所詮両手を振った程度で抵抗できるはずもなく、そのまま落下。その衝撃が体を突き抜ける…はずだった。

「痛い…けど、思ったより痛くない」

どうやら大木の木の枝に引っ掛かりまくった後に地面にタックルした様で致命傷は受けてないと思う。

これもフランドールと幽々子さんのタックルのおかげか…感謝しておこう。

さて、まず此処がどこかって言う事だな。立ち上がって周りを見渡す。

うつすらと色が禿げている鳥居。ボロボロの御神木。科学が発達しているというのに明りがほとんど無いという違和感。

そしてどこか違う世界でのトラウマを感じさせる賽銭箱。おk把握、完全に神社ですね。

なんて言う神社だろうか？お世辞にも良い見栄えとは言えないけど…、もう寂れてるのかな？

それでも今夜の寝床として貸して貰おう。

しかし、能力が消えたせいかな運がすごいぜ！

『タチサレ…』

鈍く腹の奥に響くような声が聞こえ出す。

しかし、周りを見渡しても暗くて見えない。

やはり能力があっても無くても俺は俺だったのさ。

ていうか怖っ！！超怖っ！！なんだよ！！今夜の寝床位提供してくれよ！！！！

くそっ！くそっ！！畜生おおおお！！！！！！

「悪霊がなんぼのもんじゃアアアア！！！！！！

こちらら数々の修羅場（主にアリスさん絡み）をくぐっとなんじゃあ
ああ！！！！！！」

本殿の方に全力で走り出す。

いくら寂れてると言っても流石に神様の居場所には行けないはず！

！！

よし！！この完璧なプランならいける！！

『チョツ、マ、マテエエエエ』

「待てるかああああ！！！！うおおおおお！！名も知らぬ神社の神様助けて！！」

後ろから聞こえる声を無視して全力で走り続ける。

名も知らない神様！！貴方が俺を助けられないというのなら俺はこの神社を逃げ回るだけだ！！！！

「助けてエエエエ！！この神社の神様ああああ！！！！もしくは近隣の住人の皆様ああああ！！！！」

『ハヤツ！？ス、スピードオトシテ！！』

「ゆっくりしたら捕まえるんだろうでしょうが！！！！うおおおおおおお！！！！」《バアン》

本殿の扉を勢いよく開けて中に入る。

きつとここなら神器的な何かがあるはず。

なんならお札とお祓い棒でもいい！！だから霊夢さんと呼んで来い！！

しかし本殿の中は外よりも暗くて何も見えない。

「どうすればいいんだよ！？」

『ゲホツゴホツ、オ、オイツメタゾ。サアデテイケ!』

「バルス!」《バチツ》

目を閉じてから今の精一杯の電気を発生させる。

これがラピユタの雷だ!!

『メガツ!!メガアアア!!!』

「うおおおおおお!!!」

本殿を飛び出て更に奥に進む。

もしかしたら神主さんか巫女さんがいるかもしれないという儂い期待を胸に秘めて。

『ソ、ソツチハダメエエエ!!!』

「つまり行けつてことですな分かります!!!」

行くなと言われれば行きたくないのが人の性。

そして相手が悪霊ならば逃げるのも人の性。

だから俺は逃げつつ向かうぜ!行ってはいけないと言われたところに!!!

「うはっ!明り発見!!貰った!!!」

『マツテエエエ!!!』

人の気配のする建造物発見!!

窓があいて、湯気も出てるという事から何か料理をしているのか？
流石に料理中にはその場を離れることはあるまい！！このまま飛び
込むぜ！！

「ダイナミック お邪魔しまああああす！！！」 《バシヤアアア
ン》

腰まで伸びる艶のある綺麗な緑色の髪は少し濡れていて
驚いているせいか隠すこともしないしなやかに伸びる肢体。
そしてその引き締まった体とは裏腹に胸は大きく形も良い。
その全てがほんのりと紅く染まり、色っぽさを醸し出している。
そして観察を一通り終えると、正気に戻り、血の気が引く音が聞こ
えてくる。

「すみませんでしたああああ！！！！」 《ババツ》

「キヤアアアアアアアアアア！！！！！！」

湯気って言うってもお風呂のだったんだね。

そしてタイミング悪くお風呂に入っていたという訳ですね。

いや、わたくし的にはとてもいいものを見せていただいたんですが
ね。

とても眼福です。

「で、言い訳はあるかい？」

「あ、悪霊に追われていて…」 《グリグリ》

「ほう…、それで？」

「…完全に私が悪かったです」 《ゴリゴリ》

さっきの理想郷から一転、石床の上で石が割れるほど頭を擦りつけた土下座の状態で

先刻の被害者の女の子を含めた三人の女の人達に囲まれて事情聴取されております。

頭が痛いです。視線が痛いです。そして何より心が痛いです。

「なあ、あんた。これ犯罪だよ？わかってる？」

「はい、すいませんでした…」 《ビキビキ》

「しかも嫁入り前の女の裸を凝視してたそうじゃないか？」

「見惚れてました」 《パキッ》

石床に少しヒビが入る。

しかしそんな事は気にせずに土下座する頭を更に押し付ける。

さっきチラッと見た時の緑髪の子の恥ずかしそうな顔が目焼き付いて目から離れない。

心が…心が痛いよ…。

「本当に申し訳ありません…」《バキッ》

「また石床割ったね、これで何枚目だい？
つたく、此処から少し早苗には聞かせられない話だから部屋に戻っ
ていな」

「分かりました、神奈子様」《スッ》

「で、ここからが本題に入る」

緑髪の子が居間を出て台所の方に出ていくと神奈子と呼ばれた青い
髪の女性がこちらに詰めよって来る。

ここからが本当の地獄だ。警察かな…幻想郷から出た途端ご厄介に
なるなんて…ハハハ。

最後に良いもの見れて良かったよ。ありがとうございました。

「すまん!！」

「ひよ？」

いきなり目の前で神奈子さんが頭を下げてきた。

どういふ事が分からずに変な声を出してしまう。

…っ!?!つまりこれから『この虫野郎!』とか言いながらオーバ
ーキルされるのか!？

畜生!!一枚目から魔法カードだったら良いのに!!

「実はな、お前を追っていた悪霊いただろ？あれな、そこにいる諏
訪子ってやつのは仕事だったんだよ」

「神奈子だつて賛成したじゃん！全部私のせいにならないでよー！」

…えっと、一寸整理して考えよう。

Q 俺が風呂に入ったのはなぜ？

A 変なのに追われて逃げ込んだ先が理想郷だったのさ。

そしてその変なのがその金髪の諏訪子と呼ばれていた幼女らしい。
…つまり、俺は嵌められてたつてことか？

「…フフフ、フツハハハハハ、フウーハツハツハツハー！！！」

「「！？」」 《ビクッ》

突然立ち上がり笑い声を上げる。

そしてそれに驚いて固まる二人。

だが、それを無視してそのまま少しずつ二人に近づく。

《ユラリ》 「なんだ…そう言う事だったんですね？」

《ガクガク》 「い、いや、これには深い訳が…」

「シャラップ！！！」

《ビクッ》 「ヒイツ？」

神奈子さんの反論を言いきる前にかぶせて中断する。

今の俺は怒っていいはずだ！

《ユラリ》 「いやあ…まさか騙さていながらクドクドと説教される
なんてね？」

《ブルブル》「そ、それは…」

俺は…悪くない…、たとえ相手震えていても…悪くはない…！
少しづつ二人との距離を詰めていく。
そして近づくにつれて二人の震えが大きくなる。

《ユラリ》「さあ…お前らの罪を数える…」

《ブルブル》「で、でも、早苗の風呂覗いただろ!？」

《ピシィッ》

神奈子さんの一言で、時が止まった。

いや、実際には時が止まった様な錯覚に陥った。
確かにそれは俺が俺が俺がうわああああ…!!

「覗き魔〜覗き魔〜!や〜いや〜い!」

「神奈子!?!そこらへんで…」

「N・O・Z・O・K・I・M・A!!覗き魔〜!!」

《ピシィッ》

そして…時は動き出す。

《ユラリ》「君が…」

「いけない!?!神奈子早く謝っテ!」

「は？一体なにを言ってるんだい？」

「泣くまで……」《ユラリ》

悪い子にはお仕置きが必要なもの。

だからこれは必要悪、間違った教育は間違った価値観を育てるんだよ。

「殴るのをやめない！！」《グバツ》

教育の時間だぜ！！

第32話 引き際を弁えないと大変なことになります(後書き)

幸運なことにも早苗さんのお風呂タイムに乱入した千草!

その時の文を作るのにかなり時間がかかったのは内緒だぞ!!

『乱入はいいが登場の仕方が良くないな。』

真の紳士は全裸で正座しながらじつくりと眺めるものだ』

前書きと後書きに時折出てくるこのキャラは本編にできることができ
るのか?

以下次回!!

第33話 BBA無理すんこつわっ何をするやめ…へっチューン

早苗視点

「もう…もうやめっひっつー!!」

「ここか？ここがええんのか？」

ど、どどど、ど、どという事!?

お話が長くなってるからお茶を入れて来たらこの会話が聞こえてきたんですが

神奈子様は一体どういう事になってるんでしょうか？

もしかして…これが俗に言うお楽しみタイムってやつでしょうか？止めなければいけないと分かっている自分が居るのに耳を扉につけたまま動けない私も居る。

と、とりあえず状況を整理しないといけないし私は此処で聞き耳を立てておくことにします。

「も、もうホントに、駄目だ、ってえ！」

「だが断る!!」

神奈子様が危ない気がする!!

これは早く飛びこまないと色々な意味で大変な事になりそうです。一旦深呼吸して気分を整えて…

《ガラッ》「神奈子様あああああ!!」

《ゴキイ》「へブウツ!？」《ゴロゴロ》

目標をセンターに入れてタツクルを当てるだけの簡単なお仕事です！
確実に仕留めた音がしたからこれで大丈夫のはず。
私だけじゃなく神奈子様にもまで手を出すなんて信じられない。

「早苗さん！？」

なぜだろう攻撃したはずの人物の声が横から聞こえてくる。
今タツクルを当てたから私の下敷きになっていると思うのだけれど…
少し怖いけど少しづつ目を開けていく。

「さ…早苗エ…」

「神奈子様あああああ！？」

確実に仕留めたはずが
私のタツクルに当たっていたのはよく見知った顔…というか神奈子
さまでした。

千草視点

「もっ…もっやめっひっっ！！」

「どこか？ここがええんのか？」

口ではああ言ったが女性を殴るのはかなりの抵抗があるのでくすぐ

る事に。

【指先の漫才師】とまで呼ばれた（気がする様なしないような）俺のくすぐりテクニクを受けるが良い！！

「も、もうホントに、駄目だ、つてえ！」

「だが断る！」

結構エロいセリフだがこの人に言われても興奮しない不思議。さて、もうそろそろ泣きそうなので手を離して…殺気！？

《ガラツ》「神奈子様あああああ！！！！！」

突然扉が開いたと思うとこちらに向かってタツクルが飛んでくる。かなりの速度で飛んで来ている為当たったら痛そうだなあ…お仕置きの為にも避けて

神奈子さんに当てよう。そうしよう。《スツ》此処までの行動にかかった総合時間0.2秒。

《ゴキイ》「へブウツ！？」「《ゴロゴロ》

鈍い音とともに神奈子さんが吹き飛んで行く。

うわ、超痛そう…さて、俺にタツクルしようとしていたのはどこの誰かな？

いつの間にか諏訪子さんが居なくなってる事を考えると大体分かるんだけどね…。

「早苗さん！？」

見事に違ったよ…流石の洞察力だぜ俺。

で、何で早苗さんは突入してきたんだろう？

「神奈子様ああああああ！？」

「早苗エ……」

骨が折れてるんじゃないかってほど弱々しい声を出す神奈子さん。
そんなに威力があったんだろうか？ フランドールや幽々子さんの程
の迫力はなかったけど……

もしかして普通の人がそんなもの喰らったら死ぬのかね？

もしかしてそんな威力のタックルを俺に当てようとしたの？

もしかしなくても俺って嫌われてるの？……泣けるぜ。

「わ、私はもう駄目だ……、早苗……誰よりも……幸せになるんだよ……」

「か、神奈子様ああああああ……！」

「いや、起きましょーよ」

「いや、腰が……」

『歳が……』の間違いじゃないかな？

でも言ったらブツ飛ばされる気がするから言わないことにするぜ。
へタレで「めんね〜」。

その代わりに事態に収拾をつけてくるわ。

「じゃあさっさと寝て明日にでも病院に行けばいいじゃないですか」

「ん」

「『ん』じゃないですよ？おんぶで連れて行けど？」

歳を考えて欲しい。

何処からアウトか明確な線引きは無いけど少なくとも貴女はそういうキャラでやっちゃダメだろ。

「そんな…あなたは目の前に困っている人が居ても見捨てるのかい？」

「脅迫ですかそうですか…」

いいぜ、やってらんよ！俺やってらんよ！

どうせやるならあっちにもダメージ与えるくらいのきつつい奴をくねてらんよ！！

相打ち覚悟でやってらんよ！！！！

「…はあ、分かりましたからジツとしててくださいいね」

「さんきゅ〜」

男は度胸。何でもやってみるもんさ。

だから恥も外聞も捨てて全力でやってやる。

「ふんぬらばっ！！」《バツ》

「うわっ！？なにをするんだい！？」

「聞こえない見えない何も感じない！！」

寝転がる神奈子さんにお姫様だっこをする。
かなり嫌がつているが俺も恥ずかしいのでできる限り抵抗をやめて
くれると嬉しい。

というか無理やりにも続けるぞ。この際ヤケだ！

神奈子さんにも俺と同じ位の屈辱を与えてやるまでやめんぞおおお
！！！！！

「早苗さん、寢室はどこですか？」

「さ、早苗！！早くこの暴拳をとめ……」

「そこを出てすぐです」

「早苗！？早苗！早苗！！早苗エエ……！！！！」

早苗さんに指示された通りに廊下を進んで寢室に向かっていた。

寢室

「お婆ちゃんもう寝てくださいね」

「すまないねえ……って誰がお婆ちゃんだ！？」

「ナイスノリツツコミー！！」

「イエーイッ！」

「イエーイツ！」《パチンツ》

少し漫才をした後二人の健闘を称えあう様に二人でハイタッチをする。

なかなかイイネツ！ノリが良いよこの人。

「と、まあ前置きはこころ辺にしましてそろそろ本題に入りますね」

「本題って何のことだい？」

「トボケないで良いです。何故あんな事をしたのか、それだけは教えてもらいますよ？」

そう俺が言いきると神奈子さんは顔つきを変えてきた。

さて、どんな深刻な問題が…

「…眠い…」

《ズデン》

こけた。それはもうすごい勢いでこけた。

この人何を言うのかと思っただら眠いとか言ってきたよ！？

年齢ネタか？お婆ちゃんだから眠くなるんですか！？という訳でデストロイ。

「おいコラテメコラ待てコラ」

「悪かった！謝るからちよつと待って！！」

「じゃあ早く話してもらいましょうか」

拳を堅く握り高く振り上げて近づくと話してもらえらる事になった。一寸した脅しだがまあこうでもしないとほぐらかされそうだったから良いよね？返事は聞いてない。さて、今度こそ真面目な話をして貰おうか？

「わかったよ。言ってやるけど今から言う事を絶対に信じてくれよ？」

「承知しました」

そう答えるとまた神奈子さんは神妙な顔つきになりった。

流石に何度もボケる気は…《くぱあ》ああ、こっちですか。そうですか。

じゃあ最後に挨拶だけして帰りますね。

「さようならあああ」《ヒュウウウウ》

「私達は…」

挨拶をしながら足元に突然発生したスキマに吸い込まれるように落ちて行った。

神奈子さんが何かを言ったが最後までは聞こえなかった。

紫さん空気読んで下さいよ…。

第33話 BBA無理すんらうわっ何をやるやめ…へビチューン（後書き）

今回更新が遅れて申し訳ありま「違うな…」

たとえBBゲフンゲフン熟女であろうとその態度はいけないな。

紳士とは常に女性に対して優しさと余裕をもった態度で接しなければ…」

キヤラ変わりすぎだろ…

第30話から第32話までの間に何があっただよ…。

まあ語ってる間に謝罪を…「くそっ！何でおれはあっちに行けないんだ!？」

液晶が邪魔だ!!今すぐ取り除け!!!

BBAの傷ついた乙女心を癒やせるのはこの私だけなんだ!!

早くっ！早く入れてくれえええ!!!!」 (^ ^ ;) <駄目だこいつ…早く何とかしないと…。

この度は更新が大幅に遅れて大変申し訳ありませんでした。

第34話 幻想と現実を経た結論（前書き）

な、難産ってレヴェルじゃなかったぜ…
皆さん大変ながらくお待たせしました！！

第34話 幻想と現実を経た結論

「へろ」

「『へろ』じゃないですよ!!」

みんなのアイドル千草君は汚いスキマ妖怪の落とし穴、もとい落としスキマに落とされて

例の如く地面に叩きつけられて例の如く脚を挫きかけました。

そしてそれを笑顔で見つめる紫さん。

うん、皆なら分かってもらえると思うんだけど毎回ひどいよね、この仕打ちとその後の対応。

7、8mくらいの高さから落とされるんだぜ？そしてそれを笑顔で見つめてくるんだぜ？

この人絶対に人間じゃねえ!!…妖怪だったぜ。

「とつかどうという体の構造したら能力も取り上げられた普通の人間があの高さから落ちて

怪我1つ無しで居られるのかしら？」

露骨に話を逸らそうとしてきたな。

ならこつちだってそれなりの対応をさせて貰うまでだ!

「バイトの経験を生かした結果、無傷で切りぬける事ができました」
《キリッ》

「それどんなバイト？ねえそれってどんなバイトなの？」

「怪しい船に乗ってその中でジャンケンしてもう少しで勝つと」
「それで眼鏡に裏切られて」
「落とされた地下で工事中に班長とチンチロしたのち色々あって地上に脱出して位ですよ？」

「」

絶句…ククツ…面白いつ。

…うん、もちろん嘘ですごめんなさい。

そんな体験してません。まさかここまで喰いついてくるとは思わなかったんです。

そこそこ反省してます。

「と、まあそんな事は置いといて…」

「おいておくのね、結構大事そうな事だと思うのだけれど」

嘘だからね？本当に信じてないよね？

いつも通り心でも読んでさっさと答え合わせして欲しいわ、まじ空気読んでほしいわ。

「で、【湯煙漂うスキマツアーお試し編】ポロリもあるよ【】に参加しての感想は？」

「何で知ってんですかアアアア！？」

こいつは不味い事になったぜ…。

このままでは俺は犯罪者扱いを受ける事に成っちゃう…

やべえ…やべえよ…

「大丈夫、多分言わないわ」

「多分ですか！？確定じゃないんですか！？」

なんかこの人すごく喋りそうなんですけど！？

嫌な予感しかないんですがどうすれば！？どうしようもないよ畜生！！

全部この人のさじ加減だよ！！紫さんの手のひらの上でブレイクダ
ンスだよ！！

オールナイトフィーバーだよ！！

「はいはい慌てない慌てない、一休み一休み」

「それどこのとんち名人。というかマジで他言無用でお願いします
！！」《ドゲザア》

「本当に申し訳ないという気持ちで…胸がいつぱいなら…！

どこであれ土下座ができる…！

たとえそれが…肉焦がし…骨焼く…鉄板の上でも…」《じゅわあ
ああ》

古き良き日本人の風習、『困ったらとりあえず土下座』を実践した
結果

提案されたのは焼き土下座でした。きつちりとアツアツの鉄板とま
でストップウォッチ出してくれました。

絶対にこの人原作知ってるわ…騙されたフリしてるだけだったよ…。

「やってやる…！やってやんよ…！！」

叫んで自分に喝を入れてから鉄板の上に土下座する。

すさまじい熱が全身を襲うがその熱に耐えて永遠の様に感じる時間を歯を食いしばって過ごす。
がんばれ俺負けるな俺!!! たった10秒なんだ!!! 長いと感じるのは脳の錯覚だ!!!

「あ、ストップウオッチセットしてないから一寸待ってね」

「うおおおおおい!!!」 《ガバア》

すごい勢いで顔をあげて突っ込む。

「なんだってええええええええええ!?!」

その場から跳ね起きながら叫ぶ。

俺の永い時間は何だったんだ。

しかし紫さんは反省をしている様子もなく言いました。

「むしろそれで済むのがおかしいって言ってるのですわ」

「そ、それはきつと… 体質… かと」

昔から丈夫だったんだけど幻想郷に来てからもっと丈夫になった気がする。

Q、何でだろうね？ A、タックルとかのおかげ。

「さて、本題に入りますわ。

幻想と現実の両方を体験し、貴方は安全で退屈な現実か危険で刺激的な幻想か、どちらを選ぶのかしら？」

「強引ですね」

そう呟きながらも

紫さんの問いに少しでも考えて答える。

「俺は…」

紫視点

「さて、本題に入りますわ。

幻想と現実の両方を体験し、貴方は安全で退屈な現実か危険で刺激的な幻想か、どちらを選ぶのかしら？」

「俺は…」

私の問いに少しでも間をあけて彼は答える。

さあ、私が満足できる答えにこの子は辿りついてくれるのかしら？

「俺は…両方をお願いします!!!」

…聞き間違いかしら？

『どちらか？』と聞いたのに『両方』と答えた気がするのだけれど…。

聞き間違いだと信じたい私はもう一度聞くことにした。

「も、もう一度いってもらえる？」

「俺は両方を選びます!!!」

「私はどちらか選べって言った気がしますわ？」

「いや、両方で」

高らかと宣告してくる千草。

この子と話していると頭が痛くなってくるわ…

もう話はいいから理由を聞く事にしよう。

まあ多分私の満足のいく答えを聞かせてくれる事はないだろうけれど。

彼が彼なりの説明を始めた出した時、私は既に彼への興味を失っていた。

「で、その理由は？」

「あつちに戻って分かったんですけどやっぱり楽しいんですよ、現実も」

じゃあさつさと何処にでも行ってくれ。

私は家に帰って藍にお茶でもいれて貰うことに決めた。今決めた。絶対にそうする。

「でも、あつちに行って気づいた事があつたんです」

顔つきが変わった…？

良い話が聞けるかもしれない。そんな期待がまた自分の胸に宿るのを感じた。

「空から落下した時に死ななかったのは紛れもなく皆のタックルを喰らったからで」

良い話…？じゃない気がする。

「変なモノ に追われてた時、一瞬で冷静な思考に戻れたのは
普段からほぼ全殺しの目に会ってるからだと思っんです」

疑惑は確信に変わった。

感謝の方向音痴だわこの子。

焼き土下座前まで大丈夫だったのにどうしちゃったのかしら？

「色々皆の行動に恨みとか持ったときもありましたが、全部俺の為
だったんですね！！」

駄目だこいつ…早く何とかしないと…。

絶対により得ない選択肢を全力で信じ切ってる。

その証拠にこの満面の笑顔。なんの疑いもなく信じきったこの笑顔。
騙されてる。絶対に騙されてる。…ならせめてここで私がその幻想
をぶち殺す。

「それ…本気で言ってるとしたら…今すぐに抱きしめたくなる位に
哀れね…」

「哀れ？なんのことですか？」

本当に…哀れね。

騙されている事に気づかずに信じきった人間は。

「貴方…騙まされてるのよ」

「知ってますよ？」

「そつそつそつd…え?」

知っていた?

彼は知っていたといったの?

そんなはずはないはず…

もしも本当に知ってるとしたら何故騙されてると知っているのに信じようとしているのかわからない。

そんな意味のない事は効率的ではない。私ならばそんなバカなことはしない。

だからこそ何故そんな事をするのか興味がわいた。

「知っているなら何故貴方はまだ信じるのかしら?」

「そんなの疑うより信じた方が楽しいからに決まってるからですよ」

訳が分からない。

楽しい楽しくないで命を懸けるなんて愚かの一言に尽きる。

「愚かでもなんでも、後悔はしたくないんです」

心を読まれた!? 一体どういう事なの?

今までと何が変わっているというの!?

「何にも変わってないですよ」

何が此処まで彼を変えたというの?

「そんなに身構えなくても大丈夫ですよ」

「っ!?!?」

指摘されてはつと体勢

この私がただの人間に恐怖した!?

能力も無い、ただほんの少し体が丈夫なだけの人間にこの私が恐れて身構えたとも言うのか!?

「じゃあ、続きを語ってもいいでしょうか？」

「っ!…構わないわ、続けて頂戴」

心を乱すな…たかが人間、私ならどうにでもできる。

そう自分に言い聞かせて話の続きを聞く事に専念する。

「自分はね、後悔だけはしたくないんですよ。

過去にとらわれて未来を台無しにしたくない。

嘘だと分からないなら、疑うのでは無くて信じたい」

甘い。嘘だと分からないのなら分かるように成るまで洞察力を磨くべきだ。

「ただの人間にそこまでの時間はないんですよ。

それならいつそ自分は純粋な道化師ひょうろになりたい。そう思ったんです」

もう隠しごととは不可能ね。

ならそのまま思った事を口に出す方が混乱を少なくできる。

「そうそう、隠し事なんてどっちも嫌な気分になるだけですよ」

「そうね、もう無駄な事はやめるわ」

なんの事はない。
さらけ出すだけ、全て素直に考えた事を言うだけ。たったそれだけの簡単なお仕事。

「さあ、続けましょうか」

「そうね、早く続けましょうか」

私がそう言うとまた彼は語りだした。

「それで、俺はまだ何にも返してない。謝ってない。
そして何より、俺はもう一度友達に会いたいただけなんです」

「それで、結局貴方はどうするのかしら？」

冷静さを保つために口数を少なくして結論を急かす。
早くこの議論を切り上げてこの場を離れなければ私はもう自分を維持できる気がしない。
俗に言うキャラ崩壊が起こる。例えば『魔法少女スキマ マジカ』
とか言い出してしまいそうだ。

「そんな世界も素敵じゃないですか」

「素敵な訳ないじゃない!!」

そんな世界線、スキマの中にしまっちゃおーね。
なんて言うか!! 私は全力で投げ捨てる!! スキマに入れる価値もないわ!!

と、私が大激怒していると彼は笑いながらまた口を開く。

「緊張はほぐれましたか？」

その一言で、私はすべてを理解した。

今までの拳動はすべて私と単純に楽しい会話がしたかっただけ。たったそれだけの為に自分を作っていた。そう言う事だったのだ。そしてすべて理解した瞬間に私の目から一筋の液体が流れ落ちた。その液体が涙だと気づくのにそう時間はいらなかった。

「って、そんな訳ないでしょうがあああ！！！」 《くばあ》

「ですよー、ではさようなら」 《ヒュウウ》

彼の足もとにスキマを発生させていつものように落とした。

能力は戻しておいたから地面と正面衝突とかはしないだろう。…多分。

そしてさっき入れた目薬を懐にしまう。全く、本当に調子の狂う相手だったわ。

…だからこそ、面白いのかもしれないけどね。

第34話 幻想と現実を経た結論（後書き）

おまけは投げ捨てるもの！！！！

今回は無しです。すいま千円！！つ【子供銀行】

第35話 キャラ紹介

名前 中島千草 1
なかじま ちくさ

身長 178cm

体重 65kg

能力1 電流を操る程度の能力

最高電圧は10億ボルトで、御坂と同じで

同じように本物の落雷を呼び寄せる、磁力により砂鉄の剣をつくりだす事も出来るが

落雷は相手へのダメージが大きすぎるので千草は使う事を躊躇している。

更に御坂は使っていないが、電翼を生やしたり

生体電流を操作して相手の動きを止めることもできる。

が、薬でつくられた能力なので御坂よりも蓄電量が少なく、よく電池切れになる。

能力2 不幸を集める程度の能力

開発の副作用。

文字通り周りの生き物全ての不幸を自分の身に溜めこみ

1〜2年程でたまると一気に自分の身に襲いかかる。

例えばいきなり岩石が降ってきたり、地面が崩れ落ちたり

云万分の1の確立を正確に引き当てる。(ただし、不幸になるものに限る)

ちなみに近くに居ると不幸が吸い取られるのでめれなく幸せになれる。

特徴 黒髪で短髪のやや筋肉質。

昼間は元自分が所属していた学校の夏の制服を着ている。

夜に自分で制服をあらって能力を使って乾かして毎日繰り返し使う。

性格はそこそこ温厚な方だが

釣り態勢が無く、挑発に乗せられやすい。 2

また、友達に危害を加えられると全力を持って加害者を排除しようとする。 3

幻想入りする前は一人暮らしでバイトで生計を立てていた。

大量のバイトで荒稼ぎしていたため、お金が余って漫画を買いまくってネタを仕入れた。

また身体能力はトップアスリートを子供扱い

再生能力は瀕死の重傷から3日で完治する。人間じゃないぜ。

フラグ体質だが、自分は友達と称しているので相手からの猛烈なアプローチがない限り気づかない上

自分がモテるわけがないと思いきんでいたので告白されても『ドッキリ?』と聞き返してくる。

もはやいぢめの如く何度も相手の心が折れるまで聞き返してくるのでタチが悪い。

住居 人里の慧音の家 4

スペカ紹介

圧縮式【超電磁砲】
レールガン

空気中の電気などや自分の電翼をコインに集めことによって攻撃力と速度に特化したスペカ。

しかし、電気を集めるのに時間がかかるのでその間に軌道を予測してレールガンのコースから外れる事が出来れば回避可能である。

超電磁砲【レールガン】

そのままレールガンをスペカにしただけである。

自分の電力を消耗しないのでちよくちよく出てくるであろう。

紳士の

紳士による

紳士の為の

紳士タイム

紳士タイム

変身条件 頭に異常な衝撃を受け続けると紳士タイムに突入する。

概要 戦闘力が跳ね上がり、紳士力はあがった戦闘力の2乗分上がり、何時も笑みを浮かべている。

さらに読心術が得意になり、嫌でも相手の心の内が頭に叩き込まれる。

そして威圧感、センス、回復5重 オーバー、逆境、長いので以下略

とにかく、絶好調である。

第35話 キャラ紹介（後書き）

1 『野々野球しようぜ』の人とは全く関係ない。
そしてその様なネタでからかうと全力で切れる。

2
第7話参照。
チルノに釣られる千草エ…。

3
第23話参照。
アリスに攻撃され、ブチぎれて全力で妖夢に襲いかかっている。

4
第2話参照。
慧音に事情を話すと、慧音が同情して家に住ませてくれる事になった。
しかし、最近ずっと住ませてもらっているのも悪いと思っている。

第36話 宴会、そして誘拐（前書き）

今回メタメタ短いです。
すまぬで御座候。

第36話 宴会、そして誘拐

三人称視点的な何か

「さて、このままでは落ちてしまいますね」

嗜好の紳士こと、自分千草は紫さんのスキマで落ちてすごい速さで落ちております。

このままでは地面に落ちた時に周りに居た女性に怪我をさせてしまうかもしれませんね。

そう思い、自分の能力が使えるか確認する。

《バチツ》

「良かった、使えるようですね。

では電翼を出して落下速度を緩和する事にしましょう」《バサツ》

能力が使えるのを確認すると電翼を発生させて大きく広げて減速する。

そして下を見て距離を測る。

(下は博霊神社で距離は40?と言ったところででしょうか?)

数時間ぶりのはずが少し懐かしく感じる。

が、そのまま落ちてしまったのは電翼に触れてしまう可能性があるのですが、電翼を操作して博霊神社への長い階段のそばの森によせて着地の態勢を取りながら少しづつ羽を小さくする。

「さて、とっ」《ヒュン》

頭を下げてナニカの飛び蹴りをかわす。

ほほう、白ですか。清純な感じでいいですね。

「やいやいやい!!ここで会ったが100年目!!!いつぞやの決着をつけようじゃないか!」

「ああ、一年ほどぶりですね、夜雀さん?お名前は何と申すのですか?ちなみに自分は千草と申します」

久しぶりに会った所為かテンション高めな夜雀に対し

100年目と言ったのに冷静に一年位という千草(紳士)。

テンションの差からまるで大人と子供の口論の様な状態である。

「あ、ご丁寧にどうも。

私はミスティラ・ローレ! って名乗ってもすぐに死ぬから意味はないわね!!

さあ、死になさい!!」 《ガバツ》

名前を紹介しようとしたが途中でおかしいと思いやぶれかぶれで千草に突っ込むミスティア。

「そう言う三下のセリフはいけませんよ」 《ヒュツ》

「っ!?!」 《ズルツ》

千草はミスティラの突撃をかわしながら足をかけて体勢を崩す。

たったの2動作だが突撃で勢いのついたミスティラを地面と激突させるには十分だった。

しかし、

「やられてしまいますからね」 《バフツ》

ミスティアを地面に激突させる前にすくいあげるように抱きかかえる。

そして一連の動作を受けてミスティアは自分の負けを確信する。

「…って、そんな訳ないでしょうがああああ!!!」

死になさい!!!」 《バツ》

と、そんなことはなく、性懲りもなくミスティアが千草を振りほどいて襲いかかる。

これを40回ほどループ。

「はあ…っはあ…何でっ…息も切れないのよっ!!!」 《ヒュン》

「ミスティアさんは少し動きが大きいので軌道が読み易くなっているんで

せつかくのスピードがもつたいないですよ?」 《ヒョイ》

またもミスティアの攻撃をかわして足掛けからの抱きかかえるコンボをかける千草。

この時にボディタッチを忘れないのが紳士。セクハラ?いいえ、これは私の攻撃です。

「うっ~~~~っ!!!うわ~~~~~~~~んっ!!!」 《バツ》

「さよなら~~~~」 《ひらひら》

ついに諦めたのかミスティアが逃げ出す。

しかし、それを追わずに手をふって挨拶をして見逃すあたり
紳士としての余裕を感じさせる。

無論、ミスティアの下着はさっきまでのもみ合いの時に全て奪って
いる。

セクハラ？いいえ、これは先ほどの労働に対する正当な報酬です。

「さて、それでは行きますか」

下着を懐に収めて博麗神社の長い階段を登りだした。

「まだやってましたか、宴会」

長い階段を登り、博麗神社につくと

何時間もあちらに居たはずなのに宴会の勢いは衰えるどころか

『ヒートアップだヒヤッハー！』みたいな状況になってますね。

これは酷いですね。誰もこの状況でスカートの中に潜り込まない所
をみると

紳士は一人も居ないようですね。

「おお〜ちぐしや〜どこ行ってたんら〜？」

「魔理沙さんすこし飲みすぎじゃないですか？呂律が回ってません
よ」

一升瓶を携えて顔を真っ赤にした魔理沙さんがふらふらしながらこ

こちらにやってきた。
べろんべろんに酔っているようですね。ふふ。

「まあまあ、そう言うなって！酒でも飲もうぜ！」

「あ、それじゃあ頂きますね」《チャプ》

「おっ！！良い飲みっぷりらあ！！」

「プハツ、ありがとうございます」

魔理沙さんから貰った一升瓶を一気に飲みきる。

アルコールの苦味が口に広がるのと同時に少し体に熱を感じる。
かなり早くお酒が回ってきたようです。

これは短期決戦にしなければこちらが先に潰れてしまいます。
そう思い近くに転がっていた一升瓶を手取る。

「さて、魔理沙さん。飲み比べでもしましょうか」

「ほほう、この魔理沙しゃんに勝負を挑むとは良い度胸じゃらいか？
いいれ、もしお前から私に勝てるなんて思ってるんにやら
そんな幻想はまとめて吹き飛ばしてやんよ！！」

魔理沙さんは既に呂律も回らずに足元もおぼつかない状態。
これならなんとかなるはず。では、酒盛を^{デスゲーム}始めましょうか。

紳士少女酒盛中……

「うつ……ふう、まさかあそこまで激しいとは……こちらもダメになるところでした」

激しい酒盛デスゲームは、結局魔理沙さんの吐符【マスターリバーズ】によって一応の決着を得た。

もちろん、介抱するときには下着は抜き取って頭に被りたい衝動を抑えて懐にしまいました。

卑劣？いいえ、据え膳食わぬはなんとやらという奴です。

「いつの間にか皆さん良い感じに潰れているようですね。盗m、借り放題です」

偉い人は言いました。

『これは盗みではない、ただ死ぬまで借りるだけだ』と。家宝にするので堪忍してもらおう。

「さてさて、誰から頂きましょうか？」

チルノさん、リリーさん、霊夢さん、フランドールさん、レミリアさん

美鈴さん、咲夜さん、ふふ、よりどりみどりのてんこ盛りですね。

おっと危ない。《ブン》

なんとなく頭を下げると予想もなかった攻撃が頭のあった位置に槍をもった人形がありました。

おお、こわいこわい。一体誰がこんな事してきたのでしょうか？後ろを向いて確認しましょう。

「何をしてるのかしら？」

「紳士としての挨拶を」

後ろを振り返るとアリスさんでした。

という訳なのでスカートの中に侵入しました。

痴漢？いいえ、これは昔のポケ　ンのオープニングでもやっていた健全な行為です。

という訳でテンプレタイム。

「アリス！アリス！アリス！アリス！アリスううううわあううううわあ
ああああああああああああああああああああん！！！！

ああああああ：ああ：あつあつー！あああああああ！！！！アリス
アリスアリスうううあわあああああ！！！！

ああクンカクンカ！クンカクンカ！スーハー！スーハー！スーハー！スーハー！
ーハー！いい匂いだなあ：くんくん

んはあっ！アリス・マーガトロイドたんのブロンド色の髪をしたい
お！クンカクンカ！あああ！！

間違えた！モフモフしたいお！モフモフ！モフモフ！髪髪モフモフ
！カリカリモフモフ：きゅんきゅんきゅい！！

妖々夢初登場時のアリスたんたんかわいかったよう！！ああああ
：あああ：あつあああああ！！ふあああああんっ！！

萃夢想自機になれて良かったねアリスたん！かわいい！アリスたん
！かわいい！あつあああああ！

永夜抄も自機にしてもらえて嬉し：いやあああああ！！！！にや
あああああああん！！ぎゃあああああああ！！

ぐああああああああ！！！！ゲームなんて現実じゃない！！！！
！あ：二次創作の小説やアニメも良く考えたら：

ア　リ　ス　ち　ゃ　ん　現　実　じ　ゃ　な　い　？　に　ゃ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ
ああああん！！うあああああああああ！！！！

そんなあああああ！！いやあああああああ！！はああああああん！！幻想郷あああ！！

この！ちきしょー！やめてやる！！現実なんかやめ…て…「何言ってるのかわかんないわよ！！最初から説明して！後、スカートの中に潜り込むな！蹴りを避けるな！」

見…てる？目の前のアリスたんが自分を見てる？今自分が潜り込んでいるスカートをはいてるアリスたんが僕を見てるぞ！アリスちゃんが自分を見てるぞ！

今自分を蹴ろうとしてるアリスちゃんが自分に話しかけてるぞ！！よかった…世の中まだまだ捨てたもんじゃないだねっ！

いやっほおおおおお！！自分にはアリスたんがいる！やつたよ上海！ひとりでできるもん！！！！「このっ！このっ！」《すかっ》

あ、自分を蹴ろうとして必死になってるアリスちゃああああああああああああん！！！！

あっあんあっああんあ神崎様ああ！！口、ロリスー！！夢子おおおおお！！！！

うっうっうっう！！俺の思いよアリスへ届け！幻想郷のアリスへ届け「いい加減にしなさい！！」《ズガッ》ありがとうございます！！《ドサッ》

アリスさんの御褒美を顔面に喰らってそのまま後ろに吹き飛ばす。

あ、魂の咆哮を終えた後の達成感と御褒美のダメージとかで…意識…しき…がとぎれ…る…。

そこで自分の意識は途切れた。

アリス視点

「はあっはあっ…ったく、なんなの？」

体調が回復してやっと起きてきたらいきなりスカートの中に顔を突っ込まれて

更にいきなり叫びだしたり、もう私お嫁に行けない！

…とまでは言わないけど、責任は取ってもらわないとね。

「上海、コレを家まで持って帰るわよ」

「ハーン！」

上海に千草を抱えて運んでもらいながら家に帰る。

家の奥の方にあつた魔導書を引っ張り出さないとね。

第37話 拉致監禁（前書き）

遅くなって申し訳ありませんでしたああああ!!!!

第37話 拉致監禁

アリス視点

頭が痛い。

瞼が重い。

体がとてもだるい。

昨日飲みすぎたせいだろう…記憶がほとんどない…

最後の記憶は…上海と楽しく談笑してたらお酒が進んでたような…

やはりよく覚えてない。

まあ考えて手も何なので早く目を開け…

「ブフオツ!？」

目を開けるとそこには私の思い人の千草が居ました。

「いやいやいや!?!おかしから!?!何でこんな事になってんの!?!」

一寸作者説明しなさい!?!」

『今北産業』

「目が覚めた

目の前に千草

作者は後で吊るす」

『ありがとっございます!?!』

駄目だこの作者なんかしないと……あ、もう手遅れだったわ。

「さて、そんなことは置いておくとしてこの状況はなんの冗談かしら？」

『何故そんなに落ちついてるんですか？』

「うっさい出てくんな、本気で吊るすわよ」

「私の本気出したら蓬莱人形やら何やらがゲシュタルト崩壊でホアタタタタア！に……」

『やはり動揺していたようすな、動揺してるアリス可愛いぜ』

「氏ね」

『激しい照れ隠しですな……』

「もう帰れ」

『しかし、われを倒した程度で調子に乗るなよ……。俺は四天王の中でも最弱の……』

四天王登場は打ちきりフラグ。

「そんな訳で帰りなさい」

『ぬわー！！！！』

パパス：作者は光の彼方へ消え去った！第三部完ッ！

『ほーお、それで誰がこの作者の代わりを務めるんだ？』

「誰でも務まるほどの文才の無さに全私が泣いた」

『俺も泣いた……』

「話が進まないから帰ってね」

『フヒヒ、サーセンwww』

作者の霊圧が消えた……？

つて、そんな事は置いといて今この状況をなんとかしないと……千草の唇まであと数センチ……

千草は寝てて……邪魔者は居ない……

私は昨日お酒をたくさん飲んでるから正常な思考は出来ない……

既成事実……イケるッ！

そしてそのまま顔を近づけて…

「って、わたしはなにをしようとしてるのよおおおおお！…！」

あと数ミリというところで正気に戻ってその場で悶える。

もう少しで間違いを犯すところだったわ。危ない危ない…。

そう、私はアリス！出来る女アリス！この程度で揺らぐほどか弱い女じゃないわ！！

「うう…んっ」

「ほああああ！？…っ起きてない？」

寝てるのよね…寝てる…良かった、気づかれてないわね。千草が寝ていることを確認すると一気に安心が吹き出す。

あんな所を見られてたら私の羞恥心が首吊り蓬萊人形。

しかし、私がこんなに動揺しているというのに千草はこんな呑気な顔して眠っているのね…

何かいらつくわね、どうしてやるつかしら？

顔に落書き…幼稚ね。

服をさりげなく乱しておく…そして結婚へ…

「…私っ！はっ！…何をっ！…！してるのよおおおお！…！」

《バン、バン、バン、バン》

またもや奇行に走り悶え苦しむ。
以下20回ほどループの後力尽きる。

千草視点

頭が痛い。…記憶が途切れる寸前の最後の記憶では誰かに蹴られていた様な気がする。

体がだるい。…昨日までの疲労が体から抜けきってないのだろうか。瞼が重い。…このままずっと眠っていたい程気持ち良い寝心地だ。それに良い香りする。何時もの香りではないが嗅いだ事のある香りだ。

…いつもの香りじゃない？はっはっは、そんな訳ないじゃないか。きつと俺は慧音さんの家に帰ってきてぐっすりと眠っているはず。

…慧音さんの家に帰った記憶がないぞ…じゃあここは誰の家？白玉楼？紅魔館？

それとも博霊神社で宴会途中に力尽きたのか？

いや、霊夢さんの性格から考えて布団の中に寝かしてくれるとは思えない…。

じゃあ一体誰が…？とりあえず目を開けて周り確認…

「ブフオツ!？」

目の前に広がる見知った顔。

というかアリスさん。何故目の前でアリスさんがネテルンデスカ？まさか…ヤッてしまったのか!?嘘だろ!?記憶がないぞ!!!ふ

ざけんな!!!

そんな……もつたいない!! どうしてそんな事になったかは知らないけど初体験の記憶がないなんて!!

しかもアリスさんは苦しそうに魔されているし、テクニックの欠片も無かったのか!!

自分の無力さが悔しい!!

「……って、なんでやね………ん!!!」
そんな訳ないだろうが!!

おそらく最後の記憶で蹴られていたことから酔っぱらった勢いで変態行為をやったに違いない。

そしてたったそれだけで済んでいるという事はアリスさんも酔っぱらっていたんだらう。

素面の今なら殺されることは確定的に明らか。
という訳でさっさとトンスラしておこう。

と、思ったがそのままにして置いたら色々面倒というか殺されると
いうか……

置き手紙を置いておけば大丈夫かな?

そんな考えがよぎるが否!! 断じて否である!!!

悪い事したら謝るのは基本。それを手紙ですまそうだなんて正に最低の屑だ!

「うう……んっ」

「ほあああああ!?!?っ起きてない?」

いや、落ちつけ、俺は謝る為にここに残ろうとしてるんだから起きてくれた方が……

「殺す……」

「時間を置いた方が良い時ってあるよね……!」

お互いが感情的になった状態で話し合いなんて出来るわけないんだよ!

だからちょっと時間を開けるといいと思うんだ!!

べ、別にアリスさんの言動にびびった訳じゃないんだからね!!!
勘違いしないでよね!!!

「だから……一寸だけバイバイ」

こうするしか……こうするしかないんだ……だってまだ死にたくないもん。

夢の中ですら殺されかける俺涙目。

まあ、さっさと逃げないと色々面倒な事が起こる気がする《ジャキツ》
はい、起こりました面倒な事が。後ろから槍を構えるような音が聞こえました。

これはアリスさん起きてるね。そして俺はこれから眠るんですね。
永遠に。

「ドコヘイカレルノデスカ?」

後ろから声が聞こえる。……声が妙に高い?

違和感の正体を突き止める為に後ろを振り返るとそこには……なんにも居なかった。

「はい?」

「シタヲミルトイトオモウヨ」

「下？」

言われるがままに下を向くと

そこにはアリスさんがいつも使っている上海と呼ばれていた人形が
ちよこんと座っていた。

「なんだ、ただの人形じゃないか。
驚かせやがって…」

この時、寝起きで頭がしつかりと働いていなかったのかもしれない。
通常ならこんな分かりやすい死亡フラグを立てないだろう。

「タダノニンギョウデハナイノデース」

「うぐつ！？」 《ドスッ》

鋭い痛みが腹に突き刺さる。

避ける事も出来ない速さで槍を投げられたのか？

「…ってそんなのんきなこと言ってる場合じゃないよ！」

叫びながら人形のサイズに合わせられた槍を引き抜く。

幸い槍は人形サイズに小さくされていたので大した出血はなく、痛
みも少ない。

「……って、そんなことよりアリスさん起きたのかッ！？」

人形から目をそらしてベッドの方を見る。

しかし、スウスウと寝息を立てながら時々『クロス…』と呟いてい

るだけで

特に変わった様子はない事から起きているわけではなさそうだ。

……じゃあなんでこの人形は動いているんだ？

《ザクツ》「へぶっ！！！」

槍がまったく同じところに突き刺さり、声にならない叫びをあげる。同じところに刺さった所為で先程のものより深く刺さり、出血と痛みが増す。

「どっやって…ッ!？」

「シャンハイワア…トアルマジユツニヨツテエ…」

アリスノイシトカンケイナクマリヨクヲシポリトツテイルノデスウ…」

「じゃ、じゃあ、アリスさんは起きてないっていう事で良いんだな!？」

上海の言った事はあんまり聞いてなかったけど

アリスさんが起きているのかどうかは聞いておかねば。

もしアリスさんが起きているなら窓から飛び出さなければならぬからね。

まだ死にたくないからね、しょうがないね！

「ダイジヨウブデスヨ、

オキテルナラワタシヘノマリヨクキヨウキウヲトメテイルハズデスカラ」

「そんなに危険なのか？」

「ソウデスネ、モツテジユップンテイドデスカネ」

「今すぐ魔力の供給を止める。さもないと壊す」

難しい事はあまり分からない。

だが、アリスさんがこのままだと不味いという事は分かった。

だから早くその原因を取り除かないといけない。

「ムリデス」《ボツ》「じゃあ壊れる」

足元に居た人形を蹴り飛ばす。

吹き飛んだ人形は窓を破って家の外へ飛んで行ったようだ。

あの程度では壊れるほど脆くないのは身をもつて体験している。

レールガンクラスの攻撃を当てないと一部破損すら難しい強度だったのが

アリスさんの魔力で強化されている事を考えれば何度も当てないと破壊できないだろう。

でもまあ、壊すことには変わりないんだけどね。

第37話 拉致監禁（後書き）

受験勉強とかが忙しかったといいますが……ホント遅れて申し訳ありませんでした

次回から本格的戦闘シーンがあるんじゃないかなあ……

第38話 血の池地獄と針地獄（前書き）

この短さでこの間はないよね……
遅すぎワロエナイ……

一部読みづらいのでは？と思ったところがあったので上海のカタ
カナ表記を

ひらがなで書いております。ご了承ください。

第38話 血の池地獄と針地獄

千草視点

蹴り出した上海を追いかけるように窓から飛びだす。
さて、あの人形はどこに…

「フッ!!」

横から飛んできた槍を回避する。
森に蹴りだしたのは失策だったみたいだ。
隠れるところが多すぎる。

「という訳で吹き飛ば」

全力で電撃を放ってアリス邸を除く辺り一帯を吹き飛ばす。

「シャンハイ!!」

すると爆風と電撃で吹き飛ばされた上海が出てくる。
そしてそこに全力の超電磁砲を叩きこむ。

「シャンハイ」

「まだまだあッ!!!」

砂鉄の剣を生成して叩きつけるようにして相手にぶつける。

「シャンハイッ！！」

上海は砂鉄の剣に切り裂かれて真っ二つになった。

「呆気なかったな」

ポテツと落ちた人形の上半身にあたる部分を拾い上げる。

今まであれだけ苦戦していたはずの人形もアリスさんの指示がなければこんなものか。

「……アリスさんは大丈夫か？」

後ろを振り返りアリス邸に向かう。

体調を確認したら早く出ていかないとこの音で起きたかもしれないアリスさんが

俺を殺しにかかってくる可能性も考えられるからな。

普通の状態でも殺されかけるのに二連続は本気で死ぬるはず。

《ズルウ》

肉を抉るような

骨を砕くような

そんな一生涯でただの一度も聞きたくない音が下腹部から聞こえる。傷口は大変な事になっているだろうが見たくない。

「アリスカラマリヨクヲモラツテイルノニ、マハウガツカエナイトオモツテイルンデスカ？」

後ろを振り返ると槍を片手にアリスさんがつけていた人形操作のための道具に指を通して楽しそうにしている上海がふわふわ浮いてい

た。

ああ、さっきの人形、やけに脆いと思ったらお前が操作してたのか。膝が震えだして止まらなくなり、その場に崩れ落ちる。

「アハハハハアハハハアハアハアハ！！！」

狂った様な上海の叫びにも似た笑い声がひびく。

傷口に響くからやめて欲しい。

ドンドン血が出て行って意識が遠くなる。

このまま眠ったら気持ちいいんだろうな。

そのうちあいつも魔力が切れれば動けなくなるんだしこのまま放っておいても……

「ッアアアアア！！！」

「ハ？」

全身に無理やり力を入れて立ち上がる。

ここで俺が倒れて上海が魔力をすべて食いつぶすという事はアリスさんがやばいじゃないか！！

俺が急に立ち上がった事に油断してる今の上海なら倒せるはず。右手にありつただけの電流を集める。

「だあああッ！！！」

「キヤアアア！？」

超至近距離から雷撃の槍を放つ。

イける、これはかわせるタイミングじゃない。

壊せなくても動きに支障がださせるくらいはできるはず。

そうすれば後はレールガンでも当てればこっちの勝ちだ。

「……ナンテネ」

「槍ツ!？」

渾身の雷撃の槍を相手の槍ではじかれる。

いくらなんでもそんな人形用の小さな槍程度で防がれるほどヤワな攻撃じゃないはず……

「ニンギョウヲアヤツルコトシカデキナイトオモイマシタア？」

「コノシキンキヨリナラアテルルトオモイマシタア?……アメモエヨ」

ニタニタ笑いながら自分が魔法を使える事をアピールしてくる上海間近でアリスさんの魔法を見ていた上海ならそんな事が出来るかもしれない。

その魔法の為に使っているのはアリスさんの魔力だという事が更に怒りを加速させる。

しかし、さっきの森林爆破とかの消費が思ったより大きいのか、自分の中で残りの力がかなり減っているのが分かる。

ここからは力押ししていくことはもちろんできないし、腹の傷も結構広くなっている。

多分、さっき刺された槍は魔力で強化を施されていたんだろう。

視界の端でチラチラ真っ赤な血だまりができてるのが視認できる。このままだと腹からイロイロ人体から出ちゃいけないものがでちゃう気がする。

でも、こっちの全力の電撃は防がれて超電磁砲を溜める時間はくれないだろう。

だからって、諦めるなんて選択肢はない。

アリスさんの為にも、そして自分の命の為にも。

だからなんとしてでも、ここでコイツを壊さないといけないんだ。

「カミサマヘノオイノリハデキタカ？」

「ハアミガイタカ？ヘヤノスミデガタガタフルエルジュンビハ？」

「それらはできてないが、おまえを倒す為の決意はできた」

上海がじりじりと迫ってくる。

上海がこちらに来るまでの少しの間に能力を使用する。

「ナニヲシテルカシラナイケドトリアエズデストロイデス！！」

「くっ！！！！」

上海の突きをかわそうとするが避けきれずにギリギリ服に掠る。

まあこの程度は許容範囲内だ。

意識を手放す程の重傷で泣ければいくらでも喰らってもいい。

むざむざ喰らうようなことはしないけどな。

「カンガエゴトデスカア？」

「考え中だから攻撃すんなよッ！！」

不意に投げしてきた槍を何とか回避するが、左腕に少し掠る。

腹からの出血の所為かさつきから反応が遅れる。

後手後手に回っていたらすぐに追い詰められてしまう、こちらからも攻撃を仕掛けないと。

「っつらぁッ！！！！」

「オソイノデス!!」

「っが!!!」

こちらの蹴りを避けて槍を突き刺してくる上海。

だめだ、こちらが攻撃しても確実にカウンターで返してくる。

これじゃ迂闊に攻撃もできない。

確実に俺は攻撃力、防御力、素早さの全ての面で上海に劣っている。

そこは認めなければならぬ。認めたらうで冷静な判断を下す。それが今できる最善の戦い方。

もうどれだけの時間がたっただろう。

いや、体感時間としては長いだけで実際には数十秒も経っていないのかもしれない。

上海の猛攻で体に無数の切り傷がついている。

ここまで致命傷を負ってないのは奇跡だろう。

しかし、細かい傷も度重なると確実にダメージを蓄積させる脅威になる。

腕を上げるのすら困難な状態になっている。

「イイカツコウデスネエ……センシンマツカデスヨオ……？」

恍惚の表情を浮かべながら槍を片手でくるくるといじりながら話しかけてくる。

なんとかその顔面に蹴りでもいれてやりたいが、そんな事をしてもカウンターを返されるだけだ。

「ソロソロトメデスカネエ……？」

ワタシモモウスグウゴケナクナルヨウデスシイ……」

「……くそつたれえ……」

ゆっくりとこちらににじり寄る上海に対して悪態をつくことしかできない。

体が重くて動く事が出来ない。

「サヨウナラア……」

俺の体を人形用の小さな槍が貫いた。

肉の抉られる音が聞こえる。

二度と聞きたくなかったが、結局一日で二回もこの音を聞かされてしまった。

「フッフ、サヨウナラッ!？」

「……まあ、一寸待てよ……」

槍を引き抜こうとした上海の腕を掴む。
散々刺して来やがって…誠君もびっくりだぜ。

「グツ…ハナシナサイツ…！」

「嫌だね…！散々刺してくれたお返しまだだしな…！…！」

上海の腕をつかむ力をさらに強め、ゴゴゴという音を立てて電撃を生成する。

「遠くからの電撃は弾けても、零距离からは流石に消せないよな！
…！」

「ヤ、ヤメロ…！」

「もう遅いわああああ…！…！」

轟音とすさまじい光を発して電撃を直接上海に流し込む。
後の事は考えずに、全ての力を出し切る。

「ガアアアツ、ウグツ、ワアアアア…！…！？」

「らあああああ…！…！」

上海の悲痛な叫び声が響く。
が、そんな事でやめるはずもなくむしろもっと強く電撃を流し込む。
そしてじきに上海は動かなくなった。

「…つしゃあ…！」

かろうじて電池が切れる前に動かなくなった。
といっても出血は止まっていなかったのでアリスさんの家の救急セット
を探さねば。

絆創膏位はあるはずだよな。

上海視点

危なかったです。

もう少しでも長く電撃を喰らっていたらと思うとゾツとします。
さっきの電撃で武器は落としかけたけれどまだ全ての人形に標準搭載さ
れている自爆機能があるのです。
油断しきっている相手の背中に貼りつき自爆するなど造作もないこ
とです。

『そうはいかないのよね』

懐かしい声が聞こえた瞬間、突如意識が薄れ始める。

わたしは勘違いをしていたようです。

途中から最後の攻撃まで奴は一切攻撃に能力を使わなかった。

それはなぜか。

全ては最後の攻撃で私を倒しきれなかったときに御主人様^{アリス}を起こす
ための布石。

謂わば保険をかけていた。

それに気付く事が出来なかった時点でこの勝負は私の負けだったの
です。

そこまで考えた時点で私の意識は途絶えた。

第38話 血の池地獄と針地獄（後書き）

帰ってきたNGシーン

横から飛んできた槍を回避する。

森に蹴りだしたのは失策だったみたいだ。

隠れるところが多すぎる。

「という訳で吹き飛「シャンハイ！！」ッ!？」

電撃を放とうとしたところで突っ込んできた上海に邪魔されて狙いが狂う。

全力の電撃がアリスさんの家突っ込んだ。

そのせいで家は半分ほど削れ、ベットはアリスさんの寝ている所のギリギリまで消し炭になっている。

「……………うおおおおおい!!?どうすんの!?!?ねえこれどうすんの!?!?」

「……………」

「うわっ!?!?こいつ動かなくなりやがった!?!?自分は関係ありませんみたいな顔して眠りやがった!?!?」

あ、大声出したせいで…………アリスさんが…………今…………ベットから…………落ち…………た。

第39話 い、今起こった事をありのまま（ry）前書き（

必殺！！短文ならサッと書けるぜ作戦！！！！

本当に短いので注意！！

第39話 い、今起こった事をありのまま（ry

目が覚めると、目の前に広がる白、白、白。

アリスさんの家の天井でも、慧音さんの天井でもないようだ。ならば俺のやるべき事は一つしかない。

「知らない天じょブハアツ!!!」

「あ、起きました？」

「え、あ、はい」

起きてその場で超有名テンプレ台詞を言おうとしたところで血を吐くという高度なギャグを披露したと言うのに華麗にスルーだ。なんてボケ体勢のすぐれた人だ。とりあえずお顔を拝見しなければ。

「何故ウサ耳？何故ブレザー？おk、襲えつてことですね分かります!!」《ルパンダーイブ》

即座に服を脱ぎ捨ててパンツだけになりウサ耳装備のロング髪の少女にルパンダイブする。

ウホッ、イイウサ耳!!やらないか？

「師匠よんできますね」

「ひでぶ!？」《カベニドーン》

あっさりと部屋から出て行かれてそのままの勢いで壁にぶつかる。

悔しい！けど（痛みを）感じちゃう。びくんびくん。というか起きてから俺のテンションが異常なんだがどういう事だ？これはまさか『消える前の蠟燭はすごい勢いで燃える』という状態か？

さっきのナース服、綺麗な部屋、異常なテンション。

このことから導かれる答えはつまり余命宣告？

おれは死ぬのか……、思えば短い生涯だったな。

「おはよう、機嫌はどうかしら？」

白い髪を頭の後ろで結った赤と青の二色のナイスバディーのお姉さんが部屋に入ってくる。

その手にはカルテみたいなものを持っていた。

つまり余命宣告か。DTのまどつていま死ぬのか。切ないな。魔法使いにもなっていないのに……いや、成りたいわけじゃないけど。

「悲しいです」

「そう、正常なのね」

流石、クールビューティーっぽい見た目をしてるだけはある。俺の返事なんて聞いてなかったぜ。

「ところで、俺は後何日生きられるんですか？」

「日単位だと思ってたの？」

「なるほど、分か、時間が、それとも秒か」

「答えは世紀単位よ。運が良かったわね、お腹に大きな穴があいて

たのの後遺症無しなんだから」

そう言いながらこちらに何か投げ渡してくる。

ペロツ、ほのかに香るアーモンド臭、これは青酸カリッ!?

しまった、これは罠だ!?!ニアが僕を陥れるために仕組んだ罠だ!?!

というのは嘘で包帯を渡された。

縛りプレイですね、分かります。

「ふ〜じこちゃん!!!」

「はいこれ請求書」

「へぶしっ!?!」《マタモヤドーン》

俺の本日二度目のルパンダイブは当然のようにかわされて地面に這いつくばっていた所に

ひらひらと落ちてきた紙を拾い上げて読んでみる。

「治療費、壱、拾、百……壱億!?!」

どんな治療をしたらこんな値段になるんですか!?!」

「一寸した人体改造と処方した薬の材料費よ」

人体改造……とてつもなく気になる。

もしかしたら俺は仮面ライ ダーになってしまったのか。

あと、薬も申し訳程度に気になる。

「内訳見ればわかると思うけど薬が99%ほど値段の割合占めてるわよ」

「なん…だと…!?!?」

そんなバカな、と請求書を見るが手術費が1文と書いてあり薬代の所にそれ以外と書いてあった。

意外と適当なんだな…… って、そうじゃなくておかしいでしょう!?!? どんな手術したらこんな比率になるんだよ!

「治療って言っても傷口に消毒液ぶっかけたただけだから」

「痛あ!?!?そしてすぐく荒っばい!?!?」

包帯を傷口に巻きつつ感心する。

なんて男らしい治療法なんだ!?!?!

これじゃどつちが男かわからない!?!

「じゃあ、そう言う事で」

「待ちなさい」《ツカミツ》

「ですよねー」

何とか踏み倒そうとしたが、案の定首筋を掴まれて逃げられなかった。で、ちよつと待てよ?治療は消毒液をぶっかけただけ(……………
……………)と言っていた。

流石にこの治療でき億はおかしいんじゃないか?

「異議あり!?!」

「ど、どうしたの?」

「この治療でこの値段はいくらなんでも法外なんじゃないんですか？」

「だから書いてるじゃない手術費と薬は別だつて」

「はい？」

え〜と、それは一体どういう事ですかい？

消毒液は手術費に入ったんですか？

じゃあ、薬って一体なんの事を言ってるんだ？

「幻想郷に来る前に呑んだでしょ、【夢をかなえる程度の薬】」

「……………ハツ!？」

呑んじやった呑んじやった呑んじやった!!!

厨二病全開の効力の薬呑んじやった!!!

体から嫌な汗が止まらない、そんな夢みたいな薬なら高いのも肯けるね。

「でわでわ」

「逃・が・さ・な・い・わ・よ」

今度こそ流れて逃げられると思ったが、結局また掴まれて逃げられなくなる。

ちなみに、私の財産力は53文です。

「無理無理無理!絶対無理!!そんなお金出せませんって!!!」

「そう言つと思つたわ」

にっこりとした笑顔から悪い予感しかしない。

こいつは『ここで働きなさい』とか『新薬の実験台になりなさい』
なんていうヌルイ物じゃねえ……

もつと何か恐ろしいものが来る……そんな気がする。

「とある方を部屋の外に出してくれたら代金はチャラで良いわ」

「え、マジで？マジすか？マジですね？」

なんて楽な仕事なんだ。

今までの中で一番楽だった『オヤジと一緒に布団に入って天井の染
みを数えるだけのお仕事』より簡単だぜ。

「その人に会わせてください！！即日達成確実ですよ！！！」

「そう？じゃあ今からさっそく案内するわね。

あ、私は永琳。長い付き合いになると思つからよろしくね」

「あ、俺千草って言います。よろしくお願ひしますね」

長い付き合い？ああ、怪我しまくるからかな？

まあ、今回はサクッと終わらせてサッと帰ろう。

とある部屋の前

「はい、ここが姫様の部屋よ。無礼の無いようにね」

「おk!!任せろ!!!!!!」

ガラツと大きな音を立てて戸をあけて部屋の中に突入

「は？」

俺はいつの間にか病室のベッドに転がっていた。

第39話 い、今起こった事をありのまま（ry）後書き

ね？短かったでせう？

NGシーン

包帯を傷口に巻きつつ感心する。

なんて男らしい治療法なんだ！！！！

これじゃどっちが男かわからない！！

「じゃあ、そう言う事で」

「待ちなさい」《ツカミツ》

何とか踏み倒そうとしたが、案の定首筋を掴まれて逃げられなかった。こっぴどい力尽くでやるしかない！！！！

「うおおおおお！！！！」

「あら危ない」

ポキッと首の骨が折れる音がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6386t/>

レベル5で幻想入り

2011年12月18日11時47分発行